

---

# かけがえのない君だから（かけがえのない存在だから 番外編）

余田史子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

かけがえのない君だから（かけがえのない存在だから 番外編）

### 【Nコード】

N8165N

### 【作者名】

余田史子

### 【あらすじ】

かけがえのない存在だからの番外編です。主人公は榎本聖君。かけがえのない存在だからの小説の後の、1年後のことを書いています。

またまた、聖君がピンチです。

永遠のラブストーリーの番外編でもあります。桃子側ではなく、聖君側から見た、永遠のラブストーリーを良かったら、お楽しみください。

## 第1話 またピンチ！（前書き）

永遠のラブストーリー 恋人編の途中ではありますが、こちらの作品を書き出しちゃいました。

ちよつと本編はブレイク。

ブレイクタイムのつもりで、番外編を軽く読んでくださいませ。  
なんだ、聖君の方はこんなだったのね、てな感じで。

## 第1話 またピンチ！

久しぶり。ほんと、久しぶり。俺の窮地に陥ったストーリーから、けっこう日にちがたった。

その後、また、なんだか今、俺、ピンチだ。

好きな子が実は妹で、父さんが実は血がつながってなかったという事実を知り、ピンチに陥ってから早1年が過ぎた。

あれからどうなったかっていうと、菜摘とは、すっかり仲のいい兄妹でいるし、菜摘は俺の親友の葉一と付き合ってる。

基樹は蘭ちゃんと別れちゃった。それからはずっと、一人身。本人は受験生だし、恋はおあずけで、大学行ったら彼女を作るんだと張り切ってるような、寂しいような、そんな毎日を送っている。

だけど、俺は知ってる。あいつは実は、蘭ちゃんのことをまだ、ひきずってる。

でも蘭ちゃんは、もう彼氏がいる。

女の子の方が、切り替えが早いんだろうか。

かもしれない。

俺なんてふられたら、やばいだろうな。もしかすると一生、ひきずってるかもしれない。うじうじいじいじと。

なにせ、それだけ惚れちゃってる。自分でもやばいって思う。最近特にだ。

俺は受験生だ。でも、勉強もまじで手につかない。

なぜって？彼女を失うのが怖いからだ。

ああ、情けない。情けなさ過ぎる。

ずっと俺、その彼女に、俺のこと信じてとか、もつと彼女なんだって自覚してとか言ってたんだ。なのに今は、自分の方が自信をなくしてるし、失うのが怖くて、どうにもならない状態に居る。

それだけ、好きになりすぎてるのかな、俺。

はじめはさ、キスしても驚かれたり、固まっちゃったり、抱きしめても、手で押されたり、はねのけられたりするものも、みんな、緊張してるからとか、恥ずかしいからなんだろうなって思ってたんだ。でもそれが、付き合って、1年にもなってまだそうだと、さすがに俺もだんだんと、自信がなくなってくるよ。

葉一に聞いてみた。菜摘はどうかって。そうしたら、菜摘は菜摘で、葉一のこと怖がってるみたいで、進展もしないし、そうそうキスもできないんだって、やっぱりあいつはあいつなりに、悩んでるみたいだった。

本人に聞いてみたらとも言われた。だけど、聞けない。聞いたところで言っただろうか？俺のことが嫌なんだとか、そういうこと。

それとも、俺が怖いんだろうか。

だけど、前に「怖くない」って言ってた。夏に俺の部屋に来た時、思わず胸を触っちゃって、その時思い切り駄目って言われて。

理由は、胸が小さいのがばれたくないからってことだった。

その時には、そんな理由？それで嫌がるなんて可愛いな、なんて思ってたんだ。

だけど、それもだんだんと日がたつにつれ、本当にそれが本当の理由だったの？って疑問すら湧いてくる。

勉強が手につかない。

今すぐに会いたいって思ってる。

それは、俺だけ？

声だつて聞きたい。でも、電話もなかなか向こうからかけてこない。俺の勉強を邪魔したくないって配慮からだろうけど、ほんとにそれだけ？

会いたいつて言ったらどうするかな。

今すぐにでも会いたいつて言ったら…。

そんなことを思っていたからか、とんでもない夢を見た。彼女が俺から去っていく夢だ。誰だか知らないやつと腕を組んで、歩いていった。

嘘だろ。なんで他のやつと腕組んでるんだよ。それになんで俺から、去っていくんだよ。

去っていったから、後悔した。もっとしっかりとそばにいたら良かったとか、俺のものにしておけば良かったとか。

夢の中で俺は泣いていた。

ものすごい悲しみだった。果てしなく底もないような穴が、心の中に開き、どうしようもない虚無感と、苦しみと、絶望に俺は覆われていた。

何もする気が起きない。ただただ、俺は俺を責め、後悔ばかりしている。取り返しのつかないことをしてしまったと、暗く、重たい気持ちで夢の中で泣いていた。

はつと目が覚めた。まじで、夢で良かったって、ものすごいため息が出た。すぐに彼女にメールをした。なんでメールしたんだろうか。とにかくこれは夢であって、現実では彼女は俺のそばにいてくれているはずだと、それを確認したかったのかもしれない。

> 桃子ちゃんが離れていく夢見た。  
すぐに返信が来た。あ、返信が来たってことは、やっぱり遠くに行ってしまったのは、夢での出来事だ。  
桃子ちゃんは、俺がそんな夢を見て、夢の中で泣いてたってことを冗談で言ってるのかと思ったらしい。

だけど、俺が変わってことは察したみたいだ。何かあったの？ってメールが来た。

ある。大有りだ。今、俺、かなり変だ。だけど、つい、大丈夫ってメールを送っちまった。

塾に行き、昼休み、昼飯を食っても、味がなんだかわからない。  
> 今、昼ごはん食べて、そのあとちよつとのんびりしてる。

なんてことのないメールを、桃子ちゃんに送った。なんでもいい返事がほしい。

> 私は、おばあちゃんちに来てるよ。

そうなんだ。今、おばあちゃんの家にいるのか。ああ、どうせなら、ここまで来てほしいくらいだ。

> そうなんだ。いいな。

そうメールをしてからまたすぐに、

> 俺も会いたいな、桃子ちゃんに。  
とメールを送った。

ああ、やばい。一回そんなことを書いたら、止まらなくなった。  
> すげ〜会いたい。今すぐに会いたい。

そして、帰りに桃子ちゃんの家に行くことにした。

桃子ちゃんはすぐに、いいよとか、会いたってメールをくれなかった。塾の帰りで疲れてないかって、気を使ってくれてたけど、もしかして、会いたいとは思わないのかななんて、そんな疑問がま

た湧いてくる。

やばい。暗い。暗すぎる。俺、こんなに暗いやつだったけ？

もっと楽天的だったよな。あ、そっか。そうだ。一回悩みだすと止まらなくなるんだよな。

どうにも気になってしまっただけ、そればかり考えてしまうから、勉強が手につかないんだ。

桃子ちゃんの家に着いた。

お母さんが玄関のドアを開け、俺を通してくれた。

「桃子なら、自分の部屋よ。今、幹男君という」

幹男と？ 幹男ってのは、桃子ちゃんの従兄弟だ。前に会ったことがあるけど、ちょっと俺に対して、いい印象を持っていなかったよ。うで、そういうのがひしひしと伝わってきたっけ。

でも、なんだかしんないけど、そのあと俺、気に入られたらしい。

その幹男が、桃子ちゃんの部屋にいるの？

なんで、部屋？ 二人きりってこと？ やばい。変なことばかり、頭の中で考えてる。もしかして、幹男が来るから、俺に来てほしくなかった？

もしかして、桃子ちゃんの気持ちは幹男に傾いてる？

そんなわけがないと否定しながら、気持ちを必死で保ちながら、2階に上がった。桃子ちゃんの部屋はドアが開いていた。話し声が聞こえるけど、ぼそぼそと言っていて、内容はわからない。

そつと中を覗いた。ドアが開いてるんだから、覗いたっていいってことだよな。

っていうか、俺、桃子ちゃんの彼氏だよ。そんな気を使う必要ないだろ？ 二人の間に何かあるわけもないんだし。

いや、何もあつてほしくない。そんな願いまで出てくる。

「?!!!!」

部屋の中を見た。そして目に入ってきた光景は、ベッドの上で、座ったまま、抱きあつてゐる二人の姿だった。

まじかよ。

なんだよ、これ?!?!?!!

## 第2話 これは悪夢？

なんだ？何が起きてるんだ？

「何してんの」

俺の声で桃子ちゃんが振り返った。

「何してるんだよ？」

声が震えた。手も震えてる。

なんで？俺が抱きしめたら、手で押してはねのけるのに、なんでそいつには黙って抱かれてるの？

なんで、何も抵抗してないんだよ。

それになんで、桃子ちゃんのこと抱きしめてるんだよ？！

「あれ？なんでここにいるの？」

幹男がいけしゃあしゃあと、そんなことを聞いてくる。ム力！！それはこっちの台詞だ。

「桃子ちゃんから離れろよ！」

思い切り幹男の腕を掴んだ。

「いて！」

幹男が痛がった。

「桃子ちゃんはお前のものなわけ？」

桃子ちゃんからやっと離れた幹男が、そんなことを聞いてきた。いちいちむかつく。

「そうだよ！」

「ふん、そう思っているのも今のうちだな」

「え？」

何が言いたいんだよ、こいつ。

「君が沖縄に行つて、桃ちゃんが寂しい思いをしている時、そばにいるのは俺だよ。遠くにいるやつより、すぐそばにいるやつの方に傾いていくに決まってるじゃん」

……。なんだよ。なんでそういうことを言うんだよ。

「桃ちゃんに彼氏が出来て、その彼氏が遠くに行くつて聞いて、桃ちゃんが傷ついたり泣いたりするのを見てられないつて思った。だから、君が沖縄に行かないように、桃ちゃんから、君が沖縄に行くのをやめるよう、説得させようかとも思った」

え？

「でも、二人すごく仲いいし、うまくやっていくかなとも思ったよ。この前はね。でも、今は違う」

「何が違うんだよ」

「さつさと沖縄にでも、どこにでも行けばいいさ。そうしたら、桃ちゃんのそばにいるのは、この俺だ。また、桃ちゃんは、俺のもとに帰ってくる」

「また？」

「そうだよ。ずっと、桃ちゃんを守っていたのは、俺なんだ。あとからのこのこ出てきたのは、君の方だ」

なんなんだよ、こいつ。何が言いたいんだよ。俺から桃子ちゃんが離れるとか、そういうことを言いたいのかよ。

「なんで、そんなこと今更言つてんだよ？妹みたいな存在だつて、言つてただろ？」

「……。妹みたいだつて、思い込んでいたさ」

「どういうことだよ」

「……。いつまでも自分のもんだつて、思い込んでるなよ。離れても、桃ちゃんが自分のことを好いているなんて、自惚れるな」

「え？」

自惚れてる？俺が？

「離れて寂しい思いをしたら、そばにいるやつの方がよくなるんだよ。そんなとき後悔したり、後戻りしようとしても、もう遅いんだよ」  
「んだよ、それ。そんなこと俺だってわかってる。それが怖くて、勉強も手につかなくて、こうやって会いに来てる！なのに、なんでもわかってるみたいな顔しやがって。」

「うつせよ。これは桃子ちゃんと俺のことだ。部外者に言われたかねーよ！」

「部外者？」

「そうだろ！」

「もうやめて！これ以上言い合うんなら、部屋を出てってよ！」

…桃子ちゃん？まじ、怒ってる？

「悪かったね、桃ちゃん。そんな辛そうな顔しないで。そろそろ俺は、引き上げるから」

幹男は出て行った。くそ！なんでそんなに冷静になってるんだよ。しばらく気持ちがおさまらなかった。

「くそっ」

なんであいつにあんなことを言われなくちゃならないのか。こぶしを握り締めた。その手が震えた。

ドカツ。そのまま、ベッドに座った。桃子ちゃんは黙っていた。  
「ちきしょう」

幹男のやつがにくたらしかった。桃子ちゃんを抱きしめていたっていうのも腹が立つし、あんなに冷静に、俺が思い切り不安に思っていることを言っただけでいいのも、全部がにくらしかった。

「聖君…？」

桃子ちゃんが声をかけてきた。俺のことを怖がってるのか、おそろおそろ俺の顔を見ている。

俺は思わず、桃子ちゃんを抱きしめた。ぎゅって強く抱きしめていた。

「ひ、聖君」

桃子ちゃんの体が固まっていくのがわかる。

「聖君、苦しい」

そう言って、桃子ちゃんは手で俺を押しつけようとする。

なんで？あいつには抵抗してなかったじゃないか。なんで俺にはそうなんだよ。

「桃子ちゃんは、俺のことが嫌なの？」

「え？」

「心臓が持たないからとか、苦しいからとか言うけど、本当は嫌がつてるんじゃないの？嫌って言えないでいて、そんな言い訳してるんじゃないの？」

俺は桃子ちゃんに、思わずそんなことを言っていた。

「幹男ってやつにはさ、抱かれてても平気だったじゃん。俺のことはそうやって、いつも手で押しのけて、嫌がるけど」

「嫌がつてない」

「嫌がつてるよ！いつもキスしても、抱きしめても、体硬くして、本当は嫌がつてるんじゃないの？そうじゃないの？！」

駄目だ。止まらない。ずっとずっと思っていたことだ。

桃子ちゃんは、驚いていた。目を丸くして固まっている。

「私、嫌がったことなんてないよ」

「嘘だ」

「本当だよ。今だって、嫌がってないよ」

「じゃ、なんで俺から逃げようとするんだよ」

「逃げてない」

「手で押して、離れようとするじゃんか！」

駄目だ。まじで駄目だ。感情を抑えきれない。俺、今にも泣きそうだ。やばい。

「それは…」

桃子ちゃんの言葉が詰まった。なんで？なんで答えられないの？

「ちきしょう」

なんでだよ。なんでなんだよ。

「あいつは？なんで桃子ちゃんのこと抱きしめてたんだよ」

情けない。まじで今、泣きそうだ。それを必死にこらえてる。でも、こんなこと聞いている。

「元力ノが結婚するって友達から聞いて、すごく幹男君落ち込んで」

「だからって、なんで桃子ちゃんのこと」

「そばにいと落ち着くって…」

「桃子ちゃんは、なんで、他のやつに抱きしめられてても、逃げないんだよ！なんで、やめてって言わないんだよ！」

「ご、ごめん。でも、幹男君は私にとって、お兄ちゃんみたいなもので」

「でも、本当の兄でもなんでもないじゃんか」

「そうだよね」

桃子ちゃんの声が、小さくなった。そしてうつむいた。

「ごめん、もうしない」

もっと小さな声でそう、桃子ちゃんは言った。

俺は今まで、何をしていたんだろう。桃子ちゃんがすげえ大事で、壊したくなくて、大事に、本当に大事にしてきたんだ。

でも、それだけじゃない。無理強いして嫌がられて、去っていかれたらと思うと、それがすげえ怖かった。失うのが、すげえ怖いんだ。

他の誰かに取られるのも、俺から離れていくのも、そういうこと考えるだけでも怖い。

なのに、俺、沖縄に行こうとしてる。1年も離れようとしてる。今、こんな状況なのに？こんなで、離れてても大丈夫なのか？

情けない。でも、これが今のありのままの俺だ。こんな俺を見せ、桃子ちゃんは嫌わないのか。嫌がらないのか。

ああ、でも苦しい。全部をぶちまけたい。

### 第3話 俺の本音

「すげえ大事で、壊さないよう、傷つけないよう、泣かせないよう、ものすごく気を使ってきた。いつだって、もっと抱きしめたかったし、キスしたかったし、でも、ずっと我慢してきた」

「……」

「本気で、桃子ちゃんの場合は、傷つけちゃいけないって、ずっと俺……」

大事にしてきた。でも、でも……！

「他のやつに取られるのも嫌だ。絶対に嫌だ」

ああ、言っちゃった。

こうなったら、全部をぶちまけよう。どう思われてももう、かまわない。

「俺、無理じいをして、桃子ちゃんに嫌われたり、去っていかれるのが怖かった。失うのがすごくすく怖かった。でも、そうやって大事に大事にしてる間に、もし、他のやつが強引に、桃子ちゃんをかつさらっていったらと思ったら、気が気じゃなかった」

桃子ちゃんの顔は見れなかった。

「他のやつに桃子ちゃんを取られるくらいなら、俺のものにしようかって思ったことも何度もある」

「……」

桃子ちゃんはずっと、黙ってる。

「俺、すげえ身勝手だよな。桃子ちゃんを抱いて、俺以外のやつのことなんて、絶対に考えさせられないくらいにしたいって、そんなことも思ってるんだから」

まだ、黙ってる……。でも、顔が見れない。

「今だつて、幹男つてやつがたまらなく、憎たらしい。あいつに渡すくらいなら、今すぐにでも、桃子ちゃんを俺のものにしたいって思ってる」

なんで黙ってる？困ってる？呆れてる？引いてる？それとももう、とつくのとうに、嫌になつてた…とか？

桃子ちゃんはちよつと、座ってる位置を後ろにずらした。ああ、やっぱり引いてる？

「情けないし、とんでもないだろ？俺つて。桃子ちゃんを失うのが怖くつて、どうしていいかもわからなくなってる」

「……」

「すげえ好きで、俺のものにしたいくて、でも、嫌われるのも怖くて避けられるのも、嫌がつてる桃子ちゃんも、俺、どうしていいかわかんなくなつてて」

「……」

「情けない。自分でもすげえ情けない。最近は勉強だつて手につかない」

ああ、止まらない。思つてたことが、全部口から出てる。

「沖縄、行くのをやめようかとも思ってる」

「な、なんで？」

やつと桃子ちゃんが口を開いた。

「だから、怖いんだつて。桃子ちゃんを失うの。幹男が言ってるの、当たってるよ。離れて、もし桃子ちゃんのこと、他のやつに取られたりしたら、後悔するなんてもんじゃない」

「ど、どうしちゃったの？いきなり、そんな」

「桃子ちゃんには、自信持つてなんて言つてたくせにね。とんだ弱気になつてゐるつて、思つてゐるよね？」

「……」

桃子ちゃんは目を丸くしていた。

「でも、俺もそんなに強くないよ。本当は桃子ちゃんは、俺のこと好きだって言ってくれるけど、俺が想うほど、想ってないんじゃないかとか、沖縄だって無理に来させたら、悪いんじゃないかとか、そんなことも考えるし」

情けないよな、俺。まじで情けない…。桃子ちゃんは黙ってる。きつと呆れてる。

「キスしても、抱きしめても、いつまでも硬直してるのは、緊張とかじゃなくて、嫌だからかなとか、でもそんなのも聞けないでいるし」

俺の顔をじつと見たまま、黙って桃子ちゃんは聞いている。

「会わないでいると、そんな不安もたくさん出てくるし…。情けね。こんなで1年離れられるのかって、まじ、最近悩んでて」

俺は桃子ちゃんの方を向いた。そして続けた。

「俺、好きになりすぎてる？こんなで、桃子ちゃん、引いてる？うつうつしい？」

「え？」

「なんか、好きの量が違ってる？温度差がある？」

「……」

桃子ちゃんは黙ったままだ。なんだか、がつくりきてしまった。自分でも、何してるんだって思うよ…」

全部をぶちまけて、ようやく我に返った感じだ。俺、今まで何を言ってたんだろう。

ボタボタボタ…。桃子ちゃんの膝に涙がこぼれ落ちた。え？

「ひつく」

泣いてる？え？なんで？

「なんで泣いてるの？」

「く、苦しくて」

「え？」

「胸が、苦しくて」

「な、なんで？」

「だって、だって…」

俺が苦しませてる？それで泣いてるの？

「なんで、苦しいの？俺、困らせた？そうだよ、困らせたよね、  
違う」

「何か、俺に言いたいことがあって、それを言えずにいて苦しいの？俺を傷つけるかと思って、言えないでいるの？」

「違う」

「もしかして、あいつ、幹男の方が、好きになったとか」

「ち、違う！」

「じゃ…？」

「わ、私」

桃子ちゃんは、まだ苦しそうに泣いている。何かを言おうとする  
と、ひつくひつくと涙が溢れてしまふみたいだ。

「ま、待って、今言うから」

どんなことを言われるのか。すげえ怖い。でも、桃子ちゃんは必  
死で泣くのをこらえようとしている。

そして、自分の思いをちゃんと伝えようとしてるのがわかる。

「私」

桃子ちゃんは、大きな深呼吸をした。でも、まだまだ、苦しそ  
うだ。

「ゆつくりでいいよ。俺、待ってる。どんなこと言われても、ちゃんと聞く。覚悟決めたから」

桃子ちゃんのそんな必死な姿を見て、なんだか、気持ちが落ち着いた。何を言われても、受けとろう。

桃子ちゃんは、俺の袖口をひっぱった。  
「ん？」

「私…」

桃子ちゃんは泣き止んだ。

「私、本当のことを言うからね？」

「うん」

覚悟は決めた。大丈夫。ありのままの君を受けとめるから。

#### 第4話 桃子ちゃんの気持ち

「さっき、幹男君に抱きしめられてた時も、聖君のこと考えてた」  
「え？」

「これが聖君だったら、胸がバクバクするんだろうとか、聖君の匂いとか、ぬくもりとか思い出して、なんで幹男君だと全然ドキドキしないのかなとか、これってお兄ちゃんにハグしてもらってるみたいなものかなとか…。そんなこと」

桃子ちゃんは、落ち着いて話し出した。俺はちよつとびっくりしていた。

俺のこと考えてた？

「聖君だと、心臓が壊れそうになるくらい、ドキドキする。聖君の声が耳元でしただけでも、息がかっただけでも。こうやって、隣にいても、ドキドキしてる」

え？

「でも、嫌じゃないの。でも、耐えられないの。でも…」

「うん？」

「聖君のことが大好きなの」

「……」

桃子ちゃん…。

それが本音？本当の気持ち？俺のことが本当に好き？

「さっき、うつとうしいって聞いたよね？引いちゃったって聞いたでしょ」

「うん」

「そんなこと全然ない。聖君があんなふうに思ってくれてたこと、すごく嬉しかった」

「え？」

「情けないなんて思ってたない。大事に思ってくれてるのも、私を失うのが怖いって言うてくれるのも、それに…」

「うん」

それに？

「わ、私を俺のものにしたいって言うてくれたのも、嬉しかった」  
「……」

ああ、俺、今、感動してる。やばい。

桃子ちゃんは赤くなって、下をむいた。

「わ、私ね、もう、聖君以外のこと、考えられないくらいになってるよ」

「え？」

「聖君以外の人のことなんて、考えられないから」

「……」

「私も、聖君が思っているよりもずっと、想ってる」

俺が思ってるよりも？ずっと？

桃子ちゃんはしばらく、黙ったままでいた。でも、俺も黙っていたら、ぽつりとまた話し出した。

俺は感動してて、言葉にならなかった。それに頭の中は真っ白だった。

「あのね」

「え？」

「あのね、聖君の匂いが好きなんだ」

「俺、なんか匂う？」

「ふわって、優しい匂いがする」

「そう？」

優しい匂いがするの？それってどんななんだ。

「それにね」

「え？」

「聖君の声も好き」

「そ、そう？」

「うん。本当に耳元で話されると、ドキドキする」

俺の声？どんな声なんだ。駄目だ。なんか聞いてて恥ずかしくなってきた。

「それに」

「え？」

まだあるの？

「聖君の目も好き。見つめられると、どうしようかと思う。だから、目をふせちゃう」

「ああ、それでなの？たまにあるよね」

「うん」

そうか。それで目をふせてたんだ。嫌がってたわけじゃないんだ。思いながらじっと見ていると、本当に桃子ちゃんは赤くなり、目を伏せた。

「あ、本当だ」

「聖君の髪も好き」

「髪？」

か、髪？俺の？

「うん。きつと、触ったらサラサラだよね？」

「え？どうかな」

サラサラって、それって…。え？

「それから…」

うそ。まだあるの？！

「まだあるの？」

「え？」

「俺、今、すごい恥ずかしくなってるんだけど」

「やばいことに俺、今、きつと真っ赤だ。さつきからくすぐったくなるようなことばかりを、桃子ちゃんが言ってくる。」

「だって、私が聖君のことを嫌がってるとか、逃げてるとか、そんなことを聖君、言うんだもん。だから、どれだけ私が聖君のこと好きか、言ったほうがいいかなって思ってる」

「う…。そうか、それでか…。あ…。そっか…」

「それでいろいろと、くすぐったくなるようなことを言ってくれたのか。」

「じゃ、本当に手で俺のこと押すの、心臓が壊れそうになるからなんだ？」

「うん」

「じゃ、俺がキスしたり、抱きしめると、固まっちゃうのも？」

「うん」

「そうか…。桃子ちゃん、真っ赤だ。それ、本当に本心なんだ。」

「私、聖君が、私に触れるたび、体中心臓になってるよ」

「え？」

「体中で、バクバクしてるの」

「体中で？まじで？うわ。やば！もっと俺、赤くなってる。絶対だ。思い切り顔が熱い。」

「胸が苦しくなるくらい、聖君が好きだよ。すごく好きで、好きすぎて、それで苦しいの」

「え?!」

「うわ！それで？苦しいのって、好きだから？」

「さっきも、苦しかったのは、聖君が愛しくって、愛しくって、それで…」

「い、愛しいの?」

愛しいって…。う~~~~わ~~~~。やばい。恥ずかしいけど、めちゃ嬉しい。

「情けないとか、弱いとか、そんなふうに聖君は言ってたけど、そういうところも全部、愛しい」

まじで~~~~? すんげえ、嬉しい。

やばい! すげえ、感動。

俺はしばらく、何も言えないでいた。

俺の全部を好きでいてくれるの? こんなに情けないこといっぱい言ったのに、そんな俺も愛しいって思ってくれるの?

「本当は私の方から、ぎゅって抱きしめたいくらい」

「え?」

「なんだけど、きつと心臓がまたバクバクしちゃうよね」

「ど、どうかな? それはわからないけど、試してみる?」

あれ? なんで俺、そんなこと言ってるの?

桃子ちゃんは、ちよつと体を俺の方にずらして、それから俺のことを抱きしめてきた。それもぎゅうって。

うわ! うわわわ! 桃子ちゃんの匂いがする。それに柔らかい。

髪がほっぺに当たる。くすぐりたい。

桃子ちゃんは黙ったまま、ぎゅうって抱きしめている。これ、かなりやばい。頭がくらくらする。

俺も桃子ちゃんのことを、抱きしめたい。今、すぐ、ぎゅって。

「いつまで俺、我慢してたらいいの?」

「え? 我慢?」

「俺も、桃子ちゃんのこと、抱きしめてもいい?」

「駄目」

え？駄目？

「なんでだよ？」

「心臓バクバクしちゃうから」

ええ？

俺を抱きしめるのは大丈夫で、なんで抱きしめられるのは駄目なんだよ。

桃子ちゃんはまだ、俺を抱きしめていた。本当にいつまで、このままでいたらいいの？俺。絶えられるかな。ああ、軽い拷問だよ、これ。そのうえ、桃子ちゃんは俺の耳元で、  
「大好き」  
て言ってくる。

すげえ嬉しい。でも、このまま、思い切り押し倒したくなってくる。

やばいつて。まじで。

「俺も、ぎゅってしちや駄目？」

「…。ちよ、ちよっとだけなら」

「ほんと？」

俺は桃子ちゃんを、ぎゅって抱きしめた。桃子ちゃんの反応はやっぱり固まって、

「聖君、駄目だ」

と苦しそうに言う。

「はい、おしまい」

しょうがないから、桃子ちゃんから離れた。

「また、おあずけでしょ？」

そう言つと、桃子ちゃんは少し困った顔をした。

「ごめんね、もう少し待って。私の心の準備が出来るまで」

「うん、待つよ」

ああ、でもな…。

「でも、5年とか10年とかは、待てないよ？俺」

桃子ちゃんはそのなに待たせないと言いながらも、ちょこつと首を横にかしげた。それって、もしかして、待たせちゃうかもしれないってこと？

俺、相当な覚悟をして待たないと駄目みたいだ。

「聖君、私の心の準備が出来るまでの間に、待ちくたびれて、他の女性の方に行ったりしないでね」

へ？何それ。

「多分、大丈夫だと思うけど」

と、ちよつと意地悪なことを言ってみた。

桃子ちゃんは、ええって驚いた顔をした。

「うそうそ！俺が抱きたいのなんて、桃子ちゃんだけだって」

桃子ちゃんは赤くなり、黙り込んだ。

「ほんとだよ？他の子になんて、まったく興味ないから、俺」  
そう言って、俺は桃子ちゃんにキスをした。

## 第5話 俺って一途

俺はほつとして、その日は家に帰った。

いったいどんだけ、桃子ちゃんのことを思い、悩んでたんだろうか、俺って。

自信があるわけじゃない。ただ、桃子ちゃんは、けっこう素直で態度とか、言葉で思いを現してくれる。

それもどうやら、自覚していないようで、純粹なんだろうな。裏表がないって言うか、心のままが外側に出てるって感じた。

だから、安心していられた。桃子ちゃんは俺のことが好きなんだなって。

でも、離れてて、メールや電話があまりなくって、不安になってきていた。これってどうよ？よく、女の子がそんな話するよね。最近、彼からメールがないのよ、心配…なんつつてさ。

桃子ちゃん俺のことを好きでいてくれる。っていう安心感の中にいたのは確かだ。幹男が言うように、自惚れてたところもあったかもしれない。

それに、桃子ちゃんがそばにいてくれて、すごく癒されていたんだってことも気がついた。会えない時間が増えたり、メールでやり取りが少なくなったり、こんなにも俺、パワー不足になるんだな。

やばい。とことん、俺、桃子ちゃんにまいつてるんだ。本気も本気。だいいち、桃子ちゃん以外の子なんか、まじで目に入らない。

そういえば、最近2人から、告られたっけ。一人の子はちよつと、背丈や髪型が桃子ちゃんに似ていて、泣かれて桃子ちゃんに泣かされてみたいな気持ちになって、辛かった。

だけど、それも桃子ちゃんに似ていたからだ。その子に対して、

悪いとか、そういう感情を持ったわけじゃない。俺って冷たいのかな？

その前にも、学校でいきなり、放課後基樹と廊下でバカ話をしていたら、二人の女の子がやってきて、そのうちの一人から告られた。「俺、付き合ってる子いるよ」

それだけ言って、さっさとその場を去った。

で、そのあとに学校から駅に向かう途中、基樹に言われた。

「あの子、学校で1番可愛いんじゃないかって言われてる子だよ。その子を振るなんて、俺じゃ考えられない」

「可愛かったっけ？今の子」

「ああ、お前にとっては、桃子ちゃんが1番可愛いんだもん」

「うん、そうだよ」

そんな会話をしたのを覚えてる。基樹のやつ、そのあと思い切り背中をたたいてきて、

「のろけるなよな！一人身なんだから、こっちは」と怒っていたっけ。

でもさ、学校で1番可愛かろうが、なんだろうが、それで断れなくなるってどういう意味？俺には桃子ちゃんって彼女がいる事実是不変わらないわけだし、基樹が言うように、俺には桃子ちゃんが1番可愛いわけだし。

そうなんだよ、そこなんだよ。まじで可愛いんだよ。だから他の子なんて、どうでもいいんだよ。俺って、何？こんなにも一途なやつだったんだな。

そうだ。この前父さんが夏に撮った写真を、プリントアウトしてた。桃子ちゃんの可愛い写真があったっけ。

俺は、引き出しの中からそれを出して、眺めた。桃子ちゃんはこの間抜けな写真って言うてたけど、すごく可愛く写ってると思うけどな。

どこを見てるんだろう。嬉しそうに笑ってる。その視線の先にはもしかして、俺がいるんだろうか。なんつって。

その写真を定期入れにしまった。これで、いつでもどこでも、取り出して見れるじゃん。

本当は携帯の待ち受けも、桃子ちゃんにしたいくらいだけど、さすがに誰かに見られたらうてのがあって、それはできなかった。だから、俺の携帯の待ち受けは、クロの写真。でもほら、クロ見ても桃子ちゃんに見えるから。すげ、似てるし。

翌日、学校から帰ってから、菜摘の家に行くことになっていた。俺の誕生日も、菜摘のお父さんの誕生日も12月だから、お祝いをしましうって、そう菜摘のお母さんに提案され、お呼ばれさちやっただ。

菜摘のお父さんっていうのは、実は俺の血のつながった父親でもあるんだけどさ。

なんか、一回遊びに行つて以来、すっかり菜摘のご両親とも俺のことを気に入ってくれて、時々夕飯にお呼ばれされてる。

その日は担任が休みで、ホームルームもなかった。だから、俺はさっさと電車に乗り込み、新百合ヶ丘に向かった。

駅に早くに着いたし、桃子ちゃんの家に着いてから、菜摘の家に行つても、全然大丈夫の時間だ。

俺は桃子ちゃんに電話をかけた。これから、家に行つてもいい？なんて軽い気持ちで。

だけど、桃子ちゃんに電話をしたら、いきなり、

「もしもし、聖？」

と知らない男が出た。

男?!?!なんで?!?!めっちゃ驚いた。頭真っ白だ。

「誰!？」

「俺、桐太。覚えてる？」

「桐太~~~~？」

覚えてるよ。中2まで同じ学校だった。仲良かったのに、いきなり俺の彼女に手を出してきたとんでもないやつ！

ななな、なんで桃子ちゃんの携帯にそいつが出るわけ？

「お前がなんで、桃子ちゃんの携帯に出るんだよ！なんで桃子ちゃんというわけ?!」

「軟派だよ、軟派」

な、軟派~~~~?!!!!

「ふざけるな！桃子ちゃんに代われ！」

でも、結局桐太は変わろうとせず、頭に来て、その場所まで行ってやった。

桐太と桃子ちゃんは、桃子ちゃんのクラスメイトの花ちゃんの家に行った。桐太は花ちゃんのお姉さんと今、付き合ってるんだそうだ。新百合ヶ丘の次の駅だからすぐに着いた。

チャイムをならし、ずかずかと中に入った。中には、桐太と桃子ちゃん、花ちゃんとそのお姉さんらしき人がいた。

桐太は久しぶりって喜んでたけど、俺はまったく嬉しくない。

「桃子ちゃん、帰ろう」

と言ったけど、桐太の彼女に話がしたいと言われ、少しだけその場

に残ることになった。

桐太は、どうやら中学校の頃と変わらず、二股かけてみたり、平気で浮気してるようだ。花ちゃんのお姉さんもそれで、泣かされると花ちゃんが嘆いていた。

そんなことより、俺は中学の時に付き合ってた子に桐太がちょっかいを出したのが、どうもひっかかっていた。今度は桃子ちゃんに、ちょっかいを出したりしないだろうか。

案の定、桐太は桃子ちゃんに興味を持ち始めていた。

桐太は、兄貴がいる。どうやら優秀な兄貴らしくて、いつも親に比較されていたようだ。中学の頃、そんなことをばやいていたのを覚えてる。

親に自分を認めてもらえず、自分の存在価値を、女にもてるかどうかで、はかってるんじゃないのか、そんなことを俺は感じていた。

それに変なライバル意識があり、人の彼女を取ろうとする。自分の方が上なんだと、そう思いたいのかもしれない。だけど、人の彼女を取っておいて、すぐにまるでモノか何かのように、ばいって捨てたんだ。

桐太が俺の彼女にちょっかいだして、その子は俺に、もう付き合いえないと言ってきた。俺といっても、つまらないとも言われた。

まあ、そうだろう。女の子と付き合うなんてその頃、どうしていいかわからなかったし。俺よりも桐太の方が好きなら、それはそれでしかたがないと思った。

それに俺も、その子には悪いけど、すごく好きで付き合いだしたわけじゃなかった。仲を取り持ってくれたのは、葉一だ。葉一に言われて、じゃあ、付き合いおうかなって、その程度だった。

俺と別れてから、葉一がその子のことを好きだったって知って、愕然とした。そのうえ、桐太の方にその子は心変わりまでしてて、葉一の想いはどうするんだよって、俺は自分を責めたんだ。

もっと早くに葉一の気持ちを知ってたら良かった。なんで気づかなかったんだって。そして、その子にちよつかいだしたにもかかわらず、数週間でその子をふった桐太に憤慨したんだ。それでもうるせえって言われて、もうこいつなんか知るかって…。

何を言っても無駄だって、そう思ってから桐太から離れた。転校していく時もそのあとも、口をきくこともなかった。

そんなやつに今会っても、俺は嬉しいわけがない。それに桃子ちゃんにちよつかいだしたりしたら、俺は憤慨するどころじゃないだろう。

花ちゃんの家から出る前に、桐太の胸ぐらを掴んで、桃子ちゃんには絶対に手を出すなと、脅した。

それから、花ちゃんの家を出た。桃子ちゃんはそんな俺に驚いていた。

## 第6話 俺って冷たい？

その次の土曜、花ちゃんと花ちゃんのお姉さんが、桃子ちゃんとれいんどろっぷすに来た。桐太とのことで、相談があるらしく、桃子ちゃんに頼まれ、しかたなく話を聞くことにした。

俺、本当はどうでもいいんだよね。でも、桃子ちゃんのお頼みだからしょうがない。

そういうところも、俺、冷たいかな？

最近、告られてもすぐにふっちゃったり、チョコやプレゼントも受け取らないのは冷たいって、そんなふうに言われてる。桐太にも言われた。まあ、あいつから言われてもどうでもいいけど、一番へこんだのは、菜摘からそう言われたことだ。

断るにしても、もっと言い方があるでしょうと、言われてしまった。

そうか。俺、冷たいのか。でも、他の子が傷つかないようにとか、泣かないようにとか、そんな配慮までしてられない。

自分と桃子ちゃんのことと精一杯だ。桃子ちゃんのこと大事に思うので、いっぱいいいだよ、俺。

でも、今日はそんな桃子ちゃんのお頼みだからな。断れなかった。

そして3人でやってきて、桃子ちゃんと花ちゃんはカウンターに座り、俺と花ちゃんのお姉さんとで、テーブル席についた。

桐太、二股かけたり、浮気したり、私はどうしたらいいかわからないと言われた。そんなこと言われても、嫌なら別れるしかないし、好きなら、桐太にそういうのをやめてくれて言うしかないんじゃないかなって、そう言った。

いきなり、花ちゃんのお姉さんはしくしくと泣き出した。でも、泣き方が変だ。なんていうか、わざとらしい。

これ、同情を買おうとか、俺の気を引こうとかしてるんじゃないだろうか。って、俺、かなりひねくれてるかな？ だけど、何度か告られたり、いろいろとそういうことがあって、泣きまねか、本当に泣いてるのかを見抜けるようになってた。

そのあと、聖君、いろいろと話を聞いて、これからも相談に乗ってと言われた。だけど、それはできないって、はっきりと言った。そうしたら、

「聖君って、そんなに冷たいって思わなかった」と、いきなり逆切れされた。

そんなにつて、何？ 俺のことまったく知りもしないで、勝手に優しい人だと思われても、すげえ迷惑。って思ってる自体、俺って冷たいのかな。

でも、そのあとだ。俺、すげえ驚いた。桃子ちゃんが、花ちゃんのお姉さんに、ちゃんと聖君に話をしたらってそう言った。俺はけっこうストレートにものを言うけど、俺と話すことで、自分と向き合えたり、気づけたりできるって。

桃子ちゃんもそうだったの？ 俺、ストレートに言って、傷つけたことあるのかな。

知らないうちに泣かせてることもあったんだろうか。

桃子ちゃんだったら、傷ついてても黙って、俺のいないところで泣いていそつだ。

花ちゃんのお姉さんは、話を真剣にすることを決意して、話だしただ。自分と向き合い、本音を語り、それをはじめて聞いた花ちゃんの方が、動揺していた。

花ちゃんのお姉さんもまた、親からの愛情を感じられず生きてきたようだ。ああ、桐太に似てる。似たものどおしだったんだ。

花ちゃんのお姉さんも、やっぱり桐太を本気で好きじゃなかったし、きっと桐太もだろう。

自分をもっと大事にすると、花ちゃんのお姉さんはそう言って、桐太とは別れると決め、帰っていった。

そう、父さんがリビングで俺らの話を聞いてて、こんなことを言った。

「聖は一見、冷たそうに見えるし、実際、ズバズバものを言って、傷つけることもあるけど、それも相手にとっては必要なこと。だから聖、自分を冷たい人間だなんて、否定する必要はないよ」

父さんはよく俺に言う。すべては必然だよって。

俺はこの言葉で、なんか一気に救われた。そっか。俺が冷たいわけじゃないんだ。

それにもう一個、俺、桃子ちゃん以外の子が泣いてるからって、動揺したりしないそんな俺でよかったって思った。

もし、そうだったら、俺、そのたびに心痛めたりして、桃子ちゃんのことだけを考えられない。

桃子ちゃん以外の子のことまで考えてたら、桃子ちゃんを傷つけることもあるかもしれない。そう思ったら、なんだ、俺、桃子ちゃんのことだけでいいんだって、なんかそこんこもすっきりしたんだよね。

桃子ちゃんに頼まれたからしかたなくってことだった。でも、今日あった出来事もまた、必然だった。俺にはすごく、必要で起きたことだったんだ。

花ちゃんと花ちゃんのお姉さんを駅まで、桃子ちゃんと送っていった。そのあと、桃子ちゃんと海の方に行った。

桃子ちゃんは俺に、聖君は冷たくないよって言うてくれた。それも優しさだと思うよって。

まじで嬉しかった。

桃子ちゃんには、俺の弱さも、情けなさも見せてきたと思う。なのにいつも、そんな俺のことまでひっくるめて、好きでいてくれる。桃子ちゃんの隣を歩いてて、ほっとする。それに、すごく幸せを感じる。

桃子ちゃんと店に戻ると、父さんも店を手伝っていて、忙しそうだった。桃子ちゃんは気を使ってくれて、もう帰るって言うてくれた。駅まで送り届け、俺は急いで店に戻った。

最近、パートさんが休むことも多くて、俺も塾で店を手伝えなくて、母さんが一人で大変な時がある。父さんもできるだけ手伝うようにしてるみたいだけど、でも、父さんにも父さんの仕事がある。仕事の締め切りがあつたりすると、店も手伝えなくなるし、母さんはこれから大丈夫なんだろうかって、心配だ。

俺、そういうことも何も考えずに、大学選んだんだよな。ただ、沖縄の海、潜りたい。それが動機だ。

それが夢だった。

だけど、それ、ほんとのほんとに俺がしたいこと？

店に出て、俺はキッチンに入った。洗い物はたまってたし、母さんはオーダーのものを作るだけで、手一杯だった。

いくら店が大変でも、母さんは疲れた言うことがない。弱音も、愚痴もはかない。そのへんは、もしかして、昔、仕事をばりばりやってた頃の癖なのかもしれない。

弱音を吐いてもいいし、休んでもいいのにつて俺は思う。

ぎりぎりまで頑張つて、いつかボタンつて倒れやしないか…。最近まじで、心配なんだ。俺が手伝つてた頃は、そんな心配なかった俺のこときつかつてたし、たまに、こんなにきつかわせるなよつて思つたこともあつたけど、でも、言われたことも毎日してると、できるようになつちやつてたしな。

パートさんだとそうはいかないようだ。パートさんが具合が悪ければ、母さんがその分、いろいろとしないとならないし。

俺が塾に行くことで、バイトをやめたけど、初めはわからなかった。母さんが大変になること。

こんなで、俺、沖縄に行つて、大丈夫なのかよ？何かあつても、すぐに駆けつけることもできないんだよ？

それに…。俺も大丈夫なのかよ？今はすぐそばに桃子ちゃんがいる。パワーをもらえてる。でも、離れたら？

桃子ちゃんは俺が、沖縄に行くことにたいして、何も言わない。きつと、俺が夢を叶えることを、邪魔したり、諦めさせたりしたくないんだと思う。それで、もしかすると、我慢してるのかもしれない。

そばにいるから、大丈夫だ。でも、離れたら？じいちゃんは大丈夫だろつて言つてたけど、本当に？ああ、桃子ちゃんのお母さんだつて、大丈夫だつて言つてたっけ。

俺も大丈夫だつて思つてたんだ。思つてたんだけどさ。

お客が一区切りついて、母さんが俺と父さんの夕飯をさつと作り、俺らはカウンターでそれを食べた。

「桃子ちゃん、帰っちゃったの？」

父さんが聞いてきた。

「え？ああ、うん」

「悪かったね。もっと聖といたかったんじゃないの？」

「え？」

そんなことを聞かれて、なんて答えていいかわからず、黙ってご飯を食べていると、

「聖も、あまり桃子ちゃんと会えてないんだろ？」  
と父さんは、聞いてきた。

「うん。いや、会えてるかな」

この前も、桐太のことがあつて、会ったしな。

「お前見てるとさ」

「え？」

「桃子ちゃんは、すごい癒しになってるようだから」  
げ、ばれてる？

「会えないと、勉強もはかどらなくなるんじゃないの？」

「なんでわかんのか？」

「はは、やつぱり？よく受験生だとき、勉強も手につかなくなるし、ちよつと距離をおきましょうなんてこともあるじゃん」

「うん」

「お前の場合は、そばにいたほうが、勉強頑張るって感じたもんな」  
「う、うん」

それ、まじで最近感じてた。桃子ちゃんのパワーはすごいってさ。

塾もあるし、会わないようにしてたんだ。でも、だから勉強頑張れたとか、集中できたかって言うと、そうでもないしな。

いつ会えるから、頑張ろうとかそういうのはあった。会ったその日に、元気になって、頑張れることもある。

やっぱり、桃子ちゃんパワーの源なのかもしれない。

## 第7話 怒りマックス

翌日、学校から帰り、部屋にカバンをぽいと投げ出して、ブレザーも脱ぎ捨て、ズボンも脱いでいる時、携帯が鳴った。

誰かと思ったら、蘭ちゃんだ。珍しい。基樹のことかな？

何てのんきに構えながら電話に出ると、蘭ちゃんはすごい勢いで、「私！蘭！聖君？」

と名乗ってきた。なんだか、すごい焦ってるようだ。

「桐太って知ってる？」

え？桐太？

「そいつが、今、高校のそばまで来てる。桃子を聖君から奪うとか、わけわからないこと言ってる……」

何だって？桐太が？桃子ちゃんを奪う？

「よう、聖」

いきなり、電話に桐太が出た。

「なんでお前、桃子ちゃんの高校まで行ってるんだよ！何しにいったんだよ！」

「桃子ちゃんを俺のものにしようと思って、こうやって来たの。いいだろ？お前も俺の女、奪ったんだから」

「奪った？俺が？」

何を言ってるんだ、こいつは！

「あほなこと言っくな！誰もお前の彼女なんか奪ってない。そんなことより、お前、桃子ちゃんに手出してみろ！ただじゃすまないからな！」

「聖、今江ノ島だろ？俺を殴りに来ることも、この前みたいに桃子ちゃんを助けに来ることも、できないよな？ははは。江ノ島で指く

わえてるしかないじゃん。ま、悔しがれば？早くに自分のものにしておかなかったことを、後悔したらいいさ」

このやろ。俺は慌てて、ジーンズを履きながら、  
「てめえだけは、まじで、ただじゃすまない！」  
と、怒鳴り散らした。

「ただじゃすまないって、さっきからみんな言うけど、何が出来るんだよ？なあ、教えてくれよ？それに、もうそんなにすこまれても遅いよ？俺、桃子ちゃんにキスもしたし」

キス？！

「やめて！聖君には言わないで！」

桃子ちゃんの声？

「聞こえただろ？嘘じゃないよ。ほんとのこと」

「桐太！桃子ちゃんに何をしたんだよっ！！！」

「そんなに怒鳴るなよ。耳がおかしくなるから」

桐太はそう言って、笑ってから、

「そんなに大事？そりゃ良かった。大事なものを奪われたり、壊されるの、どう？お前の悔しがってる顔が見てみたいよ。なんなら今からこっちに来る？」

と言って来た。

こいつ！なんだんだよ！何がしたいんだよ。どうして、俺をわざと怒らせるようなことするんだよ。

駄目だ。おさままない。怒りがおさままない。

キスだって？桃子ちゃんに？大事なものが奪われる？桃子ちゃんを奪う？壊される？桃子ちゃんが？

「冗談じゃないっ！！！！！！！！今すぐに、ぶんなぐりに行ってやる！」

「お前には何も出来ないだろう？笑えるよな。今、どんな顔して怒ってるの？俺のことでも殴りたい？でも、出来ないよな？」

ちきしょう！携帯がつぶれるかと思うくらい、手に力が入った。

「グエツ！」

なんだ？今の声。俺が携帯を思い切り握ったから、携帯が変な音が出たのか？

「桃子！」

携帯の向こうで、蘭ちゃんの声がした。

また、桐太のやつが、何か桃子ちゃんにしたのか？

「桐太？」

返事がない。

「蘭ちゃん？何？何が起きたんだよ！」

「携帯！」

かすかに蘭ちゃんの声がした。携帯？何？どうなってんの？

「歯！俺の歯！」

桐太の声？歯？歯がどうしたって？

「すごい！桃子」

蘭ちゃんの声…。すごいって何？それになんか、歓声と拍手の音まで聞こえる。

「蘭ちゃん、どうした？桃子ちゃんがどうかした？」

俺は思い切り大きな声で、聞いた。

「え？何が起きたかって？」

蘭ちゃんの声がようやく、ちゃんと聞こえてきた。

「桃子が、グーで桐太のこと殴った！聖君が殴りにこななくても、私が代わりに殴ってやろうかと思ってたのに、桃子が殴っちゃった。それで、桐太の歯まで折れて…」

グーで殴った？桃子ちゃんが？殴った？桐太を？！

「え？どうということ？もう一回説明して」

「聖君！私だったら大丈夫だから、心配しないで、じゃあね」

「桃子ちゃん？」

プツ…。プ…。プ…。

き、切れた…。

頭の中を整理しよう。桃子ちゃんが、桐太を殴った。それで桐太は歯が折れて。

桐太は桃子ちゃんにキスをして、キス…。

ムカ~~~~~！キス？あいつが、桃子ちゃんに？！

頭に血が上った。冷静になんて考えられない。俺は慌てて、制服のシャツを脱ぎ、その辺にあった、Ｔシャツと、セーターを着た。

それから、スタジャンを羽織ると、ものすごい勢いで、下に下りた。

「聖？どうしたんだ？」

リビングにいた、父さんが驚いてた。

「ちよつと出てくる」

「え？」

「塾はさぼる！」

くそ！靴がなかなか履けない。ああ、めちやくちや、焦る！

殴った？どうして？そこまで、桃子ちゃんは辛い目にあってた？

そこまで追い詰められた？

今、どんな心境でいるんだ。俺には大丈夫だって言った。心配か  
けたくないから？俺が塾サボって、絶対に駆けつけるって思ってた  
から？

キス？桃子ちゃんに？

ちきしょう！はらわたが煮えくり返るって、こづいづことを言うのか！

今、まだあいつといるのか？

桃子ちゃんにあって、近づいたりしたんだ！仕返しなら、俺に直接しろよ！

あいつが、桃子ちゃんを傷つけた。

桃子ちゃんを守りきれなかった。

もうすぐ駅だつてところで、携帯を出した。桃子ちゃんに電話をしたけど、まったく出ない。蘭ちゃんなら出るか？蘭ちゃんの携帯に電話してみた。

3回くらいのコールで、蘭ちゃんが出た。

「蘭ちゃん？」

「あ！聖君？」

「桃子ちゃん、そこにいるの？」

「え？桃子？いるよ」

蘭ちゃんが桃子ちゃんと、電話を変わった。

「桃子ちゃん！大丈夫なの？」

「うん、大丈夫」

本当に？声、震えてるじゃんか。

「まだ、あいつそこにいる？」

「うん」

「まじで、桃子ちゃん、殴ったの？」

「うん」

桃子ちゃんのうんって声も、震えてるのがわかる。泣くのを我慢してる。

「もう江ノ島の駅だから。これから電車乗ってそっちに行く。とにかく、桃子ちゃんの家に戻って。あ、蘭ちゃんに送ってもらって。あいつからは、もう離れて！」

「え？聖君は？」

「桃子ちゃんの家に行く」

「き、桐太君には？」

「そのあと、会いに行く。ぼこぼこにしてやる」

「え？でも、もうすでに、一本歯、折れてて」

「俺が全部へし折ってやる」

それだけでも、気がすまないかもしれない。

「じゃ、家にいる」

「うん。待ってて！駆けつけるから。ね？」

「うん……」

それから、電話を切って、来ていた電車に乗り込んだ。

電車が走り出した。ものすごく遅く感じた。もっとマツハのスピードで走ってくれないか。そんな気分だ。

怒りはおさまってくれない。シートに腰掛けても、いらいらしてくるばかりで、俺は立ち上がり、車両の端から端まで歩いた。

どうしてもっと、あいつのことを脅かさなかったんだろうか。

桃子ちゃんに絶対に近づくなつて、どうして…。

花ちゃんのお姉さんの相談に乗らなければ良かったのか。

これも必然で起きたことなんて、そんな浮かれてのんきなこと言ってる場合じゃなかったじゃないか。

父さん。今起きてる状況もあり、必然なら、なんでこんなこと起きるんだよ？！

ちきしょう。怒りしか出てこない。

くそ！握り締めた拳で、ドアをたたいた。隣にいたおっさんが、驚いて俺を見た。

くそ！見てるなよ！

ああ、早くに着いてくれ。いてもたってもいられない。

今、桃子ちゃんは泣いてるんじゃないのか。泣くのをこらえてたのが、まるわかりだった。

なんで、俺、桃子ちゃんのそばにいてやれなかったんだろう。

ちゃんと、守ってやれなかったんだろう。

桐太も憎い。でも、俺自身も許せない。

## 第8話 桃子ちゃんの涙

新百合ヶ丘の駅に着いた。俺は階段を駆け下り、改札を出ると、全速力で走り出した。

桃子ちゃん、今、泣いてる？

大丈夫なのか？！

桃子ちゃんの泣き顔が浮かぶ。そうすると、思い切り桐太が憎く思え、それと同時に後悔や、自責の念が出てくる。

はあ。息切れしながら、チャイムを押すと、ドアが開き、真っ青な桃子ちゃんが顔を出した。

「入っていい？」

「うん」

お母さんが出てこないけど、家で仕事かな？

玄関を上がると、桃子ちゃんはドアを閉めた。鍵をする手が震えている。

「お邪魔します」

トリビングに行くと、桃子ちゃんが、

「誰もいないよ」

と、か細い声で言ってきた。

「え？お母さんも？」

「ひまわりとおばあちゃんの家に行ってる」

「そうなんだ」

そうか、誰もいないんだ。

桃子ちゃんを見ると、まだ青ざめていた。

「桃子ちゃんの部屋に行ってもいいかな」

「なんだか、リビングで話す気分じゃない。それに、もし桃子ちゃんが泣いたりしたら、誰かが帰ってきたら、心配するだろうし。」

部屋に入ると、重い足取りで桃子ちゃんはベッドの前まで行き、深く腰掛けた。それから下を向き、ふうって重いため息をした。

桃子ちゃんの方へ近づくと、微妙に手が震えてるのがわかった。

「大丈夫？」

桃子ちゃんのまん前にしゃがんで、顔を覗き込んだ。

泣いてる？ いや、我慢してるって顔だ。

「怖かった？」

「うん」

「大丈夫？」

桃子ちゃんは、いきなりひくって泣き出した。ああ、やっぱりいっぱいだったんだな。

桃子ちゃんをそつと抱きしめて、ごめんって謝った。

「な、なんでごめんなの？ ごめんって謝るのは私だよ？」

「なんで？桃子ちゃんは悪くない。俺が、桃子ちゃんを守れなかった」

「それは、しょうがないよ」

「しょうがない。こうなることも考えられたのに…。こうなる前に、あいつにもっと、桃子ちゃんには手を出さなっ、脅しておけばよかった」

俺は、思い切り自分を心の中でも責めていた。

「そんなことしても、きつとこうなってたよ。うつん。私が桐太君についていかなかったら良かったんだよね…」

ああ、桃子ちゃんは桃子ちゃん自身を責めてるんだ。

ぎゅう。さつきよりも力を入れて、抱きしめた。

桃子ちゃんは俺にしがみつき、ボロボロと泣き出した。肩をふるわせて泣いている。桃子ちゃんの肩は俺の胸にすっぽりと入るくらい、小さくて、俺はそんな桃子ちゃんを感じて、ますます心が痛んだ。

「ごめん」

桃子ちゃんはひつくひつくと、しゃくりあげて泣いている。

「怖かったよね、ごめん」

「うん」

うなづいてから、また桃子ちゃんは泣き出した。

俺はぎゅって力を入れたまま、抱きしめていた。桃子ちゃんが泣き止むまで、ずっと抱きしめていよう。

ああ。でも、こんなに泣くくらい、桃子ちゃん、怖かったんだ。辛い思いをしたんだ。

後悔、自責、憎しみ、申し訳なさ、いろんな思いが交差する。その思いを感じながら、俺は桃子ちゃんを抱きしめていた。

桃子ちゃんは、少しずつ落ち着いていった。泣き声がなくなり、肩の震えも落ち着いた。

ぎゅう。それでも俺は抱きしめていた。桃子ちゃんがめっちゃくちや、愛しかった。愛しくて、胸が痛くなるくらい。ああ、俺、めっちゃ好きだよ。桃子ちゃんが大事で、たまらないよ。

桃子ちゃんの顔をそっと覗くと、涙が頬に流れたままになっていた。それを手で拭いて、それからキスをした。

そっと、傷つけないよう、桃子ちゃんの唇に触れた。

桃子ちゃんは、俺の胸にまた顔をうずめた。

「落ち着いた？」

と聞くと、小さくうんってうなづいた。

「おさまったね？震え…」

「え？私震えてた？」

「うん。小さく震えてたよ。気づかなかった？顔色も悪かった」  
気がついてなかったのかな。自分が震えてたこと。

俺は、桃子ちゃんの隣にそっと座った。

「怒ってないの？」

桃子ちゃんが聞いてきた。

「誰に？」

「私…」

？なんで桃子ちゃんを、怒らなきゃならないんだろうか。

「怒ってないよ。あいつのことは許さないけど」

あ、桐太のことを思い出した。いきなり怒りが湧いてきた。

「だけど、私がもう殴ったから」

桃子ちゃんが俺の怒りを察したのか、そんなことを言った。

「本当に桃子ちゃんが殴ったの？蘭ちゃんじゃなくって？」

「うん」

本当に？

「えっと…。あまり事情が飲み込めてないんだけど、いつ殴ったの？」

「桐太君が、聖君に電話で話してる時」

「あの時？なんか、桐太が電話の向こうで、ぐえってすごい声出したけど、あの時？」

「そう、多分」

「何で？その頃になってもしかして、ふつふつと怒りが湧いてきたとか？」

「だって、桐太君は思い切り、聖君のこと苦しめようとしてたから、許せなくなつて。それで、気がついたらバキって音がしてた」

「え？気がついた時にはもう、殴ってた？」

「…ううん。何かがブチって切れたのは、気づいてたよ」

「そう。桃子ちゃん、切れると強いね…」

あ、切れるとじゃないな。

「人のことになると、強くなっちゃうんだね」

「引いた？」

「え？」

「男の人を殴っちゃったりして…」

「驚いたけど…。でも、ちょっと桃子ちゃん、すげえ！とか、やった！とか、桐太のやつ、ざまあみろ！とか思ってた」

桃子ちゃんは、本当に落ち着いたのか、表情を柔らかくして話出した。桐太のことだ。

俺が電車に乗って、こっちまで来る間、桐太と話をしたらしい。とつとつ、離れろって言ったのにな。

なんでも、桐太は俺のことが好きで、俺が桐太から離れていったことが、傷に残り、トラウマになっているんだと桃子ちゃんは話した。

もう傷つかないよう、誰も大事に思ったり、誰かを好きになつたりしないようになったとか。裏切られるのが怖くて、心を閉ざしてしまつたようだ。

俺、そんなに最低なことしたかな。どっちかっていえば、桐太の

ほうが、ひどかったと思うけどな。人の彼女にちょっかいだしたりしたんだから。

桃子ちゃんは、俺に、そんな話をしたあとに、  
「それでも桐太君のこと、ぼこぼこにするの？」  
と聞いてきた。

「する」

「え？」

「俺の気がおさまらない」

「……」

「桃子ちゃんにキスしたんだよ？ちょっと触れるだけでも、許せないのに！」

ああ、また怒りがこみ上げてくる。

桃子ちゃんにキスをしたんだよな。

俺は桃子ちゃんにまた、そつとキスをした。

ああ、やばい。桃子ちゃんの唇にあいつが触れたのか。めっちゃくちゃ、憎らしい。それに悔しい。

「なんか思い切り、悔しくなってきた」

「え？」

「桃子ちゃんの唇にあいつが触れたと思ったら」

「……」

桃子ちゃんが目を伏せた。あ、すごく辛そうな顔をしてる。

「ごめん！嫌なこと思い出させた。ごめんね」

「うつん」

桃子ちゃんは、顔を横に振ったけど、そのままうつむいて、唇をぎゅって手で拭いていた。それも何回も、何回も拭いている。

「桃子ちゃん？」

「やだった」

「え？」

「すごく、やだった」

「……」

「……私、桐太君の顔もひっかいた」

「え？」

「キスされて、なんで私、聖君以外の人に、こんなことされてるんだろうって、頭にきて、ガリって」

「ガリ？」

「爪で目の辺りをひっかいたの。それで、桐太君が痛がってるうちに、走って逃げた」

「……」

「私……、聖君のこと怖いとか、嫌だと思ったことないけど、初めて男の人が怖いって思った」

あいつ、桃子ちゃんのこと、そんなに怖がらせたのかよ。くそ！俺が怒りをあからさまに、顔に出していると、桃子ちゃんが困った表情をした。あ、話の途中だよな。

「ごめん、何？」

「あのね」

「うん」

「呆れない？引かない？」

「え？」

何のことかな。

「言ってくれないとなんとも言えないけど、なんか見当もつかなくて、何かな？俺が呆れたり、引いたりすることなの？」

「かもしれない」

「何のことかな？」

桃子ちゃんは話しづらそうにした。　　いったい、何の話があるんだろっか。

## 第9話 桃子ちゃんの心の変化

桃子ちゃんは、俺の胸に顔をうずめたまま、まだ黙っている。相当、言い出しにくいことなのか。

「怖かったって言ったよね？あいつのこと。でも、俺は怖くないんだよね？」

「うん」

「あ、あいつのせいで、俺のことまで、怖くなったとか？」  
桃子ちゃんは、顔を横に振った。

「男の人って不潔！とか思っで、俺も嫌になったとか？」  
また、首を横に振った。そうだな。もしそうなら、今、俺の胸の中でじつとしてないよな。

「その逆」

「逆？」

「逆って？」

「聖君じゃなきゃ、嫌だっと思った」  
え？俺じゃないとって？

「聖君以外の人なんて、嫌だっと思った」  
「……」

桃子ちゃんは俺の顔を見た。でもまた、下を向いた。

「それで」

「うん」

桃子ちゃんはさっきから、俺のセーターの袖口をつまんでいる。これ、この前も確かしてたよな。

「それ、よくするけど、落ち着くの？」  
「うん」

「そう」

そっか。落ち着くのか。

え?! 桃子ちゃんは、袖口をつまむのをやめて、俺の手を握ってきた。

一瞬、ドキッてした。だけど、手をつなぐことで、もっと落ち着くのかなって思っ、俺も桃子ちゃんの手を握り返した。

「あのね」

桃子ちゃんは、また口を開いた。

「うん」

「あんなふうに、他の誰かに触られたり、キスされるのはもう絶対に嫌だっと思っ」

「そ、そりゃそうだよ! 俺だっ、絶対に嫌だよ!」

俺は思わ、そう言っ。でも、桃子ちゃんが困った顔でこっちを見たから、

「あ、ごめん。話してる途中だよ」  
っ、謝った。

「聖君がもし、他の女の人にキスしたり触れたりしたら、絶対に嫌だっと思っ」

「え?」

「なんか、そんなことも思っんだ」

他の子に? そんなこと思っこともない。

「しないよ。俺、桃子ちゃんにしか」

「……」

あれ? なんて無言?

「なんで無言? まじで、しないっ。信じられないの?」

「ううん、そういうわけじゃ……」

「もしかして、それ、俺に聞くのが勇気いったとか？そんなこと聞いてまた、呆れないかって思ったの？でも、しないよ。信じていいよ。俺、桃子ちゃんにしか興味ない」

桃子ちゃんは、黙ってまだ下を向いている。

「なんでかな。俺が言うこと、まだ信じられないのかな。男性不振にでも陥っちゃったとか？」

「なんでずっと下向いてるの？」

「……」

「顔あげて、顔見せて？」

桃子ちゃんは、首を横に振った。もしかして、さっきの話で俺が引いちゃったとも思ってるのかな。

「なんで？俺、呆れてないし、引いてもいないし、大丈夫だから」

「違うの」

「え？何が？」

「まだ、続きがあるの」

「え？話に？」

「うん」

「続き？桃子ちゃんは、顔をさらに赤くした。それから、また俺の胸に顔をうずめた。」

「なんだろう。なんか、すごく恥ずかしいこと？」

「考えても、まったく浮かばない。」

「私、あんな思いをするくらいなら、早くに、聖君のものになっちゃいたって思ったの」

「……え？！！！！」

「えっ？え？えっ？！！！！」

「今、なんて言った？」

「聞き返しても、桃子ちゃんは黙ったままだった。顔を下に向けた

まま、あげようもしない。

えっと？早くに、聖君のものになっちゃいたって言った？俺の聞き間違い？

聞き間違いじゃないとしたら、えっと？ええっと…。

あ、あれ？それって、どう解釈していいの？いや、待てよ。聞き違いってこともあるよな。

「俺の聞き間違いでなかったら、その…、お、俺のものに早くなりたいて言っただのかな？」

桃子ちゃんは、小さくうなづいた。

「まじ？」

聞き間違いじゃないらしい。

「うそ」

ボボッ！俺の顔が、火がついたように、熱くなった。

俺のものになりたいって言うてんの？それって、何？もう待たなくていいってこと？ってことだね？！！

「も、桃子ちゃん、それ、言うてる意味わかって言うてる？」

桃子ちゃんはこくと、またうなづいた。

「やっぱり引いてる？呆れてる？」

う。そっか。それで、俺が引くかとか、呆れるかとか、気にしてたのか。

「うそ」

この展開は何？

「まじ？」

ちよつと今、現実を受け入れられなくなってる、俺。

実はすげえ嬉しい。やった〜って叫びたいくらいだ。でも、それと同時に、いいの？いいの？って頭の中で何度も聞いている。

俺、思ってた。桐太が桃子ちゃんにちょっかい出す前に、桃子ちゃんを俺のものにしておけば良かったって。

もし、キスだけじゃなかったら？それ以上何かあいつがしたとしたら？

それどころか、あの中学の彼女のように、俺よりも桐太の方が、桃子ちゃんが好きになったら？

そんなこと絶対にはない思いながらも、心のどっかで不安もあった。その前に、俺のものに…。でも、そんな考えで桃子ちゃんのこと、抱いちゃうなんて、そんなの桃子ちゃんを傷つけるだけだよな。って、その考え事否定した。

「桃子…ちゃん」

ビクッ！桃子ちゃんが一瞬、ビクって動いた。

「それ、俺も思ったけど…」

「え？」

「あんなやつに手を出される前に、俺が桃子ちゃんをつてちよつと思っちゃったけど」

「……」

「でも、そんな理由で手は出せないよなって」

「え？」

「えつと…。いや、あの…」

何を言ってるんだ、俺。

「ごめん。俺、相当面食らってて、何を言っているのか、頭も回らない」

「うん」

「だけど、ドン引きもしてなきゃ、呆れてもいないから」

「え？」

「安心して」

「うん」

桃子ちゃんがかすかに、力を抜いたのがわかった。俺の手もぎゅって強く握っていたけど、その力も弱まった。

あれ？そういえば、いつもだったら、こんなにずっと俺がくっついてたら、逃げてるよな。

「今、こうやってるのは、心臓大丈夫なの？」

桃子ちゃんに聞いてみた。

「心臓？」

「バクバクして壊れそうとか、ないの？」

「あ、そういえば、今日は平気かも……」

「平気なの？」

「うん。ずっとなんだか、安心して」

「あ、安心？」

「きつと、桐太君とのことがあったから、今、ものすごく安心してるんだと思う」

「……。そっか」

俺は、そつと手をつないでいないほうの手を、桃子ちゃんの背中に回した。そして髪にキスをして、抱きしめた。

やばい。すぐ桃子ちゃんが可愛い。さっきから抵抗もしないし、体も硬直させないで、俺に体ごと預けてるって感じた。

「手で、押し返さないの？」

桃子ちゃんは、こくってうなづいた。

「じゃ、このまま、抱きしめてていいの？俺」

「うん」

うんって…。いいの？まじで？

「でも、押し倒しちゃうかもよ？」

「……」

あれ？無言？それ、いいってこと？駄目ってこと？

しばらく抱きしめていた。でも、桃子ちゃんはまだ、そのまんまにしているし、何も言わない。

「手ではねのけないと、俺、本当に押し倒しちゃうよ？」

桃子ちゃんは俺がそう言くと、手をつないでいないほうの手を、俺の胸に持ってきた。あ、なんだ、やっぱり、俺のこと手で押すんだな。

って俺がそう思った瞬間、桃子ちゃんは、俺のセーターの胸の辺りをぎゅってつまんだ。

…え？

…あれ？

なんで？それじゃ、しがみついてるみたいだよ？

「えっと？手で押すんじゃないの？」

「え？」

「今、桃子ちゃん、俺の胸のところに手、持ってきたから、そのまま俺のこと押して、はねのけようとするのかなって思ってた…」

ぎゅ…。桃子ちゃんは、もっと俺にしがみついた。

あ。駄目だ。押さえてたものが、ぷつりと切れた。

「まじで、俺…」

我慢の限界…！！

それはさすがに、口にはできない。でも、そのまま、桃子ちゃんを押し倒してしまった。

桃子ちゃんはまだ、俺にしがみついてる。

うそ。はねのけないの？

いいの？俺のこと、受け入れてるの？

さっきのあれ。俺のものに早くになっちゃいたって言うた、あれ、本気？

まじ？本気って書いて、まじ？いや、そんなこと考えてる場合じゃないって！

## 第10話　すげ、可愛い

目をぎゅっつつむって、俺にしがみついたまま、桃子ちゃんは真っ赤になってる。すげえ、可愛い。そっとキスをした。いつもなら体を硬くするけど、桃子ちゃんは今日は違う。それに手で押しのけるけど、今日は違う。

桃子ちゃんが目を開けた。俺のことをじっと見て、ますます赤くなっただ。う、可愛い！

「桃子ちゃん」

声をかけた。桃子ちゃんが、ドキッてしたのがわかる。

「え？」

「すげ、可愛い」

そう言つと、桃子ちゃんは首まで真っ赤になった。

もう一回キスをした。あれ？桃子ちゃん、なんか、硬直するどころか、逆に体、俺に預けちゃってない？

ぎゅってしがみついていた手も、力が抜けてるみたいだし、つないだ手もだらんってしてる。

いつもだと、押し返されるから、キスも長くできない時がほとんど。だけど、今日はまったく抵抗しないから、俺はしばらくそのままキスをしていた。

桃子ちゃんの髪をなでた。桃子ちゃんはまだ、目をつむっている。

「桃子ちゃん、ほんとに抵抗しないの？」

「え？」

桃子ちゃんが目を開けて、俺を見た。あれ？なんかいつもと違うない？目、とろんってしてるけど…。

「本当に、いいの？いつもみたいに、心臓持たないとか、バクバクするとか、そういうのないの？」

桃子ちゃんは黙って、こくんとうなづいた。あ、あれ？…その顔つきがやけに色っぽいんだけど、俺の気のせい？

「体、いつも硬直しちゃってるのに、なんで今日は全然なの？」

「なんでか、わかんない」

「え？」

わかんないって？

「わかんないけど、でも、力が逆に抜けちゃったの」

「え？」

どういうこと？

「だ、だから、聖君、すごく優しいし、なんか力が急に抜けちゃって、抵抗も何も出来ないくらいに」

「……」

俺が優しい？うわ。なんかめっちゃ照れる。

そう言っただけ俺のことを見る桃子ちゃんが、めっちゃ可愛い。髪をなでると、また、色っぽい目で俺を見る。

やばい。やばい、やばい。鼓動が早くなってる。

桃子ちゃんにキスをする。柔らかい。鼻にもほっぺにも、あごにもキスをする。桃子ちゃんが、少しだけ体をよじらせた。そしてくすぐったそうな顔をする。それから俺をまた見た。その目はやけに熱い目だ。

「桃子ちゃん、好きだよ」

そう言っただけ、真っ赤になって目をふせた。ああ、そういうところも、めっちゃ可愛い。もう一回キスをした。そして抱きしめた。

桃子ちゃんが俺の髪をなでてる。ドキ！桃子ちゃんの手が触れるところ、ものすごく熱くなる。ぎゅう。思わず力を入れて、抱きしめてしまった。

「……」

桃子ちゃんの息が、耳にかかる。顔をあげると、桃子ちゃんが泣いていた。

「桃子ちゃん？」

「どうして？」

「どうしたの？」

桃子ちゃんは、目をまだ潤ませながら、

「うれし泣きだから」

「つて、つぶやいた。」

あ。やべ…。すげえ、可愛い。可愛すぎるよ。

「桃子ちゃん、すげ、可愛い」

思わず、声に出してた。そして、桃子ちゃんにいっぱい、キスをした。

無抵抗なままの桃子ちゃんの、ブラウスのボタンに手をかけた。

「あ…」

桃子ちゃんが、びくんっしてた。

「え？」

「やっぱり、駄目？」

「だ、駄目？」

駄目って言うのかな。桃子ちゃん。

「で、電気」

電気？ああ。電気がついてた。あ、明るいと嫌だっただよな？

「ああ」

俺は、ベッドから立ち上がり、電気を消した。  
それから、桃子ちゃんの横に膝をついた。

桃子ちゃんの横に寝そべりながら、電気を気にしたってことは、あれだよな。いいってことだよな、なんて考えていた。

桃子ちゃんを見ると、目をぎゅってつむっていた。

わ。その顔も可愛い。両手はどうしていいのかわからないのか、胸の前で、中途半端に握りこぶしを作っている。  
両足はぴったりとくっつけて、さっきよりも、体が固まっちゃってる感じた。

ボタンに手をかけると、また、ビクンツて動いた。それから握りこぶしの位置が胸に近くなり、ぎゅって力を込めて、握っているようだ。微妙に震えてるのがわかる。

目もさつきよりも、ぎゅうってつむってる。

ああ、緊張しちゃってるんだな。俺はボタンに手をかけながら、外していいものかどうか、迷いが出てきてしまった。  
どうしようか。このまま、いいのかな、続けても…。

「緊張してるの？」

思い切って聞いてみた。

「え？なんで？」

桃子ちゃんが驚いたように聞いてきた。

「だって、一気に力が入っちゃったみたいだから」

「ご、ごめん」

桃子ちゃんが、申し訳なさそうな顔をした。

「…いいよ。もし、嫌だったら、やめるよ？無理したり、我慢したりしないでもいいから」

俺がそう言っていると、桃子ちゃんはさらに、困った表情をした。

俺に申し訳ないとか思ってるのかな。体を固まらせたまま、天井を見ている。困った表情のままで。

俺は、さっき、外したボタンをまた、はめようとした。すると、桃子ちゃんがいきなり、

「私、あの！」

と、大きな声を出した。

「え？」

その声に思わず驚くと、

「今日、その…」

と、何かすごく話しづらそうにしている。

「何？」

優しく聞いてみた。頭の中では、どんなことを言い出そうとしてるのか、フル回転で俺は考えてる。

やっぱり、心臓が苦しいから駄目とか、心の準備ができてないとか、怖いとか、勇気が出ないとか…。

すると、桃子ちゃんは、俺が想像していたのとはまったく違うことを言ってきた。

「子どもっぽい下着で…」

「へ？」

下着？子どもっぽい？って何？

え？そんな理由で、今、悩んでるの？え……？

俺の頭の中は一瞬、真っ白。桃子ちゃん、何言ってるの？って感じだ。

あ、もしかして、それ言い訳？本当は嫌なんだけど、そう言つて悪いからとか、そう思った？

「だから、恥ずかしくて」

「え？」

「それを見られるのが…」

下着を？

何？やっぱり、言い訳じゃないの？それがほんとの理由？

「まじで？それ言い訳してるんじゃない？」

「言い訳じゃない。でも、こんなこと言ったら呆れられるかなって思つて、言い出せなくて」

桃子ちゃんは真っ赤になつて、そう言つた。

まじかよ！

「あはははは！」

駄目だ。思わず笑つちまつた。

「そんなの気にしなくてもいいのに」

「よ、よくない」

「そうかな。俺、きつとどんなのが子供っぽくて、どんなのが大人なのかも見分けつかないと思うけど」

「え？」

「女の下着なんて、わかんないもん、俺」

桃子ちゃんは、困つた顔をまたした。

「そっか。だけど、桃子ちゃんには一大事だったりした？」

「うん、かなり。どうしようって、ぱにくつてた」

「あはは。それで、固まつてた？」

「うん」

「あはは！駄目だ。腹いてえ」

なんだよ、それ。可愛すぎるよ。想像もつかなかったよ。下着でそんな、悩むとは。

「ごめん。わかった。じゃ、見ないようにする」

「え？」

「目隠しでもしようか？俺」

「……」

桃子ちゃんが、それはちよっとって顔をした。そうだな。それはやばいプレイになっちゃうね…。

「それとも、大人っぽい下着に着替えるのを待ってるとか」

って、俺、それまで何してたらいいの？だいいち、また脱がせるのに…。

「やつぱ、それはいくらなんでも、手間かかりすぎだよね？その間、俺、待ちぼうけだし」

俺がそう言くと、桃子ちゃんは困ったって顔をまたした。

「やつぱさ〜。気にしなくてもいいのにな〜」

桃子ちゃんは、俺の言うことを聞いているのか聞いてないのか、赤くなりながら、

「布団に入ってもいい？」

と聞いてきた。

「え？うん」

布団？なんで？寒いとか？

「それで、その…。服とか、下着っていうのは、自分で脱いじゃったら、聖君、引いちゃう？」

「え？」

え？何？え？それって、桃子ちゃんが布団の中で自分で脱ぐってこと？

「うっん。全然」

い、いいけど。でも、え？桃子ちゃん、意味わかって聞いている？

「い、いいよ。えっと、あれだよな？布団に入って、自分で脱ぐってことだよな？」

「うん」

うんって、うなづいたぞ。まじ？

わ~~~~~。

「俺、後ろ向いてる」

わ~~~~~。俺はとりあえず、後ろを向いた。

「もういいって言うてね」

俺の頭は真っ白。でも、そんなことを言ってた。

わ~~~~~。桃子ちゃんが布団の中に、もぐりこむ音がする。どひゃ~~~~。なんだか、俺の方がめっちゃ恥ずかしい。

桃子ちゃん、恥ずかしがり屋なんだか、大胆なんだか、わかんないよ、俺…。

## 第11話 理性と本能

後ろを向いてただ立っている自分が、間抜けな気がしてきた。

「あ、そっか。俺も今、脱いじゃえばいいのか」

そう独り言を言つて、服を脱ぎだした。ぱぱと脱いで、床にぱいぱいと投げ、桃子ちゃんが呼ぶのを待っていたんだけど、なかなか桃子ちゃんがいいよと言ってくれない。

「いいかな？もう」

そう聞いてみた。ちょっと間をおいてから、

「まだ…」

と、返事が来た。そのあと、もそもそつて布団が音を立てた。女の子というのは、服を脱ぐのに時間がかかるものなのか。それとも、布団の中だからなのか。

「ま、待つて」

どうやら、桃子ちゃんは焦っているようだ。でもそのうち、もそもそいう音が消えた。だけど、まだ桃子ちゃんはいいつて言ってくれない。あ、あれ？

「桃子ちゃん、寒いんだけど」

そう言つと、ようやく桃子ちゃんは、

「ごめんね、もう大丈夫」

と言つると同時に、どうやら、布団の中でもそそと移動をしているような音がした。

ぐるりと後ろを向くと、桃子ちゃんは背中を向け、ベッドの端っこまで行き、頭が半分隠れるくらい、布団にもぐりこんでいた。

もしか、桃子ちゃん、まだ服着てたりして？なんて思いながら、布団の中に入ろうと、布団を半分くらい持ち上げると、桃子ちゃん

の背中が見えた。いや、えっと、正確には、お尻まで。

うわ！！！！！裸だ！！！！桃子ちゃんの白い肌が見えた。

ドキン！鼓動が早くなる。

そのまま、俺も布団に入り、桃子ちゃんの背中を抱きしめた。桃子ちゃんがビクンってかすかに動いたのがわかった。

桃子ちゃんのうなじが見えた。真っ白だ。わ！もっとドキドキしてきた。それから肩にそっと、キスをした。桃子ちゃんが、肩をすぼめた。

桃子ちゃんの肌だ。白くてあつたかい。ぎゅう。後ろから抱きしめた手に力が思わず入る。

桃子ちゃんが、固まってる。腕を胸の前に持ってきて、かたくなに胸を隠している。肩もすぼめて、かすかに震えている。

「ひ、聖君」

桃子ちゃんが小さな声で、俺を呼んだ。でも、俺はそのまま抱きしめていた。

今、相当やばい状況だ、俺。

理性と本能が戦ってる。やや、本能がリードしつつある。

桃子ちゃんの小さな肩も、震える背中も、すげえ可愛い。ぬくもりも、肌も、すげえ愛しい。今すぐ、俺のものにしたいって、ガンガンに頭の中で、本能の俺が叫んでる。

だけど、理性の部分が残ってて、

「桃子ちゃんが固まってるよ。緊張してるんじゃないの？」

とか、

「ここまでにしてあげたら？桃子ちゃんきつと、いっぱいいっぱいだよ」

なんて、そんなことを俺に言うんだ。

「聖君」

さつきより、大きな声で桃子ちゃんが呼んだ。俺は、桃子ちゃんを俺の方に向かせた。

桃子ちゃんの顔は、緊張していた。その顔を見て、理性の方が本能の声を打ち消していった。

俺は、そつとキスをして、

「桃子ちゃん、いいよ、無理しないで」と髪をなでながらそう言った。

「え？」

「いいよ」

そう言つと、桃子ちゃん表情が一気に和らいだ。あ、やっぱり無理してたんだ。

また、そつとキスをして、

「腕枕してもいい？」

と聞くと、桃子ちゃんはそつと頭をあげた。

俺の腕を桃子ちゃんの首の下に回して、

「もうちょっと、おあずけでも俺、大丈夫だから」

と、相当のやせ我慢の台詞を言った。本能の俺が、おい！何言ってる！今もぎりぎりの癖にっ言ってる。

「ごめんね」

桃子ちゃんが謝った。

「いいよ」

「でも、私からあんなこと言ったのに……」  
「いいよ、大丈夫」

俺がそう言っても、桃子ちゃんはまだ、申し訳なさそうな目で俺を見ている。

「ごめんね」

「謝らなくてもいいってば」

桃子ちゃんは、目線を下げて、ほっとした顔をした。それから、

俺の胸に頬をくっつけて、

「聖君、大好きだからね」

と、小さくささやいた。

「うん、わかってる」

そんなことを言う、桃子ちゃんがものすごく可愛く思えて、俺は桃子ちゃんの髪を、そっとなでていた。

「聖君」

「ん？」

桃子ちゃんが、俺の胸に頬をくっつけたまま、声をかけてきた。

「なんで？」

「え？何が？」

「聖君、すごく優しい」

「俺が？」

「うん」

桃子ちゃんの顔をあげて、そっとキスをした。

「俺、今日何回キスしたかな？」

「え？」

「何十回としてたりして？」

「うん。そうかも」

「じゃあもう、俺のキスしか思い出せないくらいになった？」

「え？」

もう、桐太のキスは、忘れてくれたかな。

でも、桃子ちゃんは黙ったままだ。

「あれ？まだ？」

俺はまた桃子ちゃんにキスをした。今度は長いキス。キスを終えて、桃子ちゃんが目を開けた。俺をまた、色っぽい目でじっと見る。

「もう完全に消えたかな」

と聞くと、

「桐太君のことだよね？」

と桃子ちゃんがようやく、口を開いた。

「うん」

「消えた。忘れてたもの」

「本当に？」

「うん…。本当に。もう聖君のことしか、考えられない」

「俺のことだけ？」

「うん。聖君のことしか、思い出せないよ。きっと…」

「俺のキスだけってこと？」

「うん」

桃子ちゃんが、色っぽい目で見つめながらそう言った。

俺はまた、桃子ちゃんにキスをした。

桃子ちゃんは、目を閉じた。

やばい。なんだか、その表情が、やけに色っぽい。あ、俺の本能がまた、顔を出す。

抑える。ここで、いきなり襲ったらやばいだろ。それこそ、狼だろ。

ガバーーーーって行きたくなるのを、必死で抑え、

「……。もう、俺ベッドから出て、服着た方がいいかも」

って。桃子ちゃんにそう言った。

「え？」

「さっきから、我慢の限界は来てただけど……」

「……」

「で、桃子ちゃん、離れてた方がいいかも」

「なんで？」

「狼にいつ、俺、変わるかわからないよ」

桃子ちゃんはきよとした顔をした。

「実は、襲いかかりたくなるのを、必死でセーブしてた」

「え?!」

桃子ちゃんが驚いていた。

「今までずっと？」

「うん」

「こらえてたの？」

「うん」

「それなのに、優しくしてしてくれたの？」

「うん……」

俺は桃子ちゃんの頭の下から、そつと腕を抜いた。それから、ぐつと、桃子ちゃんにおおいかぶさりたい気持ちを抑え、後ろを向いて布団から出ようとした。

でも、その時、桃子ちゃんが俺の後ろから、抱きついてきた。

「え？」

なななな、なんで?!なんで抱きついてるの？

「ど、どうしたの?こついつのされられると、まじで、俺やばいよ?」

「うん」

「うんじゃないよ、桃子ちゃん。もうまじで限界。押し倒したら、止まらないよ？俺、絶対に」

今も、ギリギリ。必死で理性を保ってる。

「だって」

「え？」

「だって、聖君のこと、今、苦しめてたんだよね？私」

「苦しんではいないって」

「だけど、我慢させてるんだよね？」

「そ、それはそうだけど」

駄目だ。やばい。そう、今まさに我慢して、必死で本能と戦って…。

桃子ちゃんはそんな俺の胸のうちを知ってか、知らないのか、もっとギュッと抱きしめてきた。

うわ！俺の背中に当たってる柔らかいのって、桃子ちゃんの胸？！

「も、桃子ちゃん！思い切り、胸、当たってる」

ブチン。俺の理性の何かが、切れた音がした。

「駄目だ。限界」

ドスン！

桃子ちゃんの両腕を掴んで、俺は押し倒した。俺、もう止まらないかもしれない、まじで…。

## 第12話 めっちゃ幸せ

本能が勝った。でも、心の奥底で理性が、かぼそい声で言ってる。  
「いいのか？」

「桃子ちゃんを傷つけないのか？」

「早過ぎないのか？」

「桃子ちゃんを泣かせないのか？」

そんな言葉を全部、否定する。

「いいんだ」

「いいんだ」

「いいんだ」

何回も頭の中で、そう言ってる俺。

ほとんど無意識にキスをして、抱きしめて、首筋にまでキスをして、桃子ちゃんが俺の髪を優しくなでてきて、我に返った。

え？

それに俺を優しく、抱きしめている。

目を見ると、色っぱいんだけど、優しい目だ。俺のことをじっと見て、髪をなでる。

うわー！！

桃子ちゃん、全然、抵抗してないんだ。それに体も全然、硬直してない。

桃子ちゃんは、覚悟を決めたの？もしかして、観念しちゃったの？俺のものになるって…。それで、俺に全部を預けてるの？任せてるの？

桃子ちゃんの目は、熱いし、優しい。

桃子ちゃんにキスをした。俺の背中に回してた、桃子ちゃんの手がだんだんと力が抜けていって、とうとうすっと、ベッドに滑り落ちた。

桃子ちゃんの体、全部、力抜けてる。思い切り、俺に任せてるのがわかる。

桃子ちゃんの鼓動が伝わる。ドキ、ドキ……。その鼓動に俺の鼓動まで早くなる。

桃子ちゃん、そういえば、貧弱な体で恥ずかしいって言ってたっけ。どこが？全然だ。すごい女らしいよ。

色がめっちゃ白い。その白さにドキドキする。白いからか、ほくろが際立つ。

それに、柔らかい。女の子ってこんなに柔らかいの？おや？杏樹はそんなことないぞ。あいつの場合は骨太だから？それか筋肉か？

肩の線も細い。腕も細い。指も細い。それに足も、足首まで細い。

……。ああ、やばい。

桃子ちゃんの全部が、めちゃくちゃ可愛いじゃん！！！！！！

桃子ちゃん……。もう、俺のものなんだ……。

なんか、胸の奥で、すんごく喜んでる俺がいる。やった~~~~って世界中に叫びたいんだけど、これまた、理性がそれを抑えてる。

桃子ちゃんに腕枕をして、桃子ちゃんの髪をなで、顔をじつと見た。

桃子ちゃんも、俺をまた、色っぽい目で見つめ返してくる。

俺、今、すげえ満たされてる。嬉しくて幸せで、胸がいっぱいだ。そんな気持ちで桃子ちゃんを見てみると、桃子ちゃんは俺を見つめながら、ぼ~~~~ってしていた。

あ、今、絶対意識どっかに飛んでる。

「大丈夫？」

「え？」

「なんか、意識どっかに行ってない？」

「うん、行ってるかも」

「まじで？大丈夫？」

「大丈夫じゃない」

え？大丈夫じゃないって、どういうこと？

「聖君が、好き」

わ。いきなり、そんなこと言う？意識どっかに行って、大変だったんじゃないの？

「聖君が、大好き」

「うん」

わ……。俺、顔真っ赤だ、きっと。

「どうしよう」

え？何が？何がどうしようなの？

「聖君のことが、大好きすぎて、どうしよう」

「へ？」

大好きすぎ…？

「聖君、かつこよすぎる」

桃子ちゃん俺に、抱きついて、そう言ってきた。わーーーー！

「桃子ちゃん、何それ？わけわかんないんだけど」

なんなんだ。かつこよすぎるってのは。

「いいの、わかんなくても」

桃子ちゃんはまだ、俺の胸に顔をうずめていて、ぎゅって抱きつ

いていた。

桃子ちゃんから、こういうことをしてくるのってあまりないから、今、俺かなり、照れくさい。

「うん、また俺に惚れちゃったってのは、なんとなくわかった」

そんなことを、照れ隠しで言ってみた。

「でも、それなら俺も……」

桃子ちゃんの髪をなで、それから、頬に手をあて、顔をあげてキスをした。

ああ、やばいな、俺。今までみたいなそつとするキスなんかできない。キスをしただけで、桃子ちゃんが愛しくって、嬉しくって、なかなかキスをやめられない。

でも、桃子ちゃんもまったく、抵抗しない。

「桃子ちゃん、もう俺のものなんだ」

抵抗せずにいる桃子ちゃんも、俺のことぎゅって抱きしめてくる桃子ちゃんも、それを実感させてくれて、俺はめっちゃ幸せを感じてる。

「俺、まじで嬉しい」

そう言って、俺は桃子ちゃんを抱きしめた。

桃子ちゃんは、甘い香りがする。

あつたかくって、柔らかかくって、俺はものすごく優しい気持ちに包まれる。

「大好きだよ」

桃子ちゃんの耳にキスをして、そうささやいた。

桃子ちゃんは、くすぐったそうに、体をよじっていた。あ、そっか。耳、弱いんだっけ。

桃子ちゃんの全部が可愛くて、全部が愛しい。大好きだよなんて言葉では、それが言い表せない。

ずっとこのまま、抱き合っていたいな。桃子ちゃんのぬくもりを感じながら。

でも、そういうわけにはいかないんだ。

俺は、時計を気にして、それから、桃子ちゃんにお母さんやお父さんが帰ってこないかを聞いてみた。帰って来て、この状況だったら、めっちゃやばいもんな。

でも、お母さんとひまわりちゃんは、おばあちゃんちに行っていて、帰ってくるのは10時になるだろうと言い、お父さんは12時頃だと言う。

俺はほっとした。まだ、桃子ちゃんとこうして、抱き合っている。

俺は自分でも驚いていた。

何がつて、桃子ちゃんにめっちゃくちや、癒されてることだ。

さつきから、胸があったかくつて、ほっとしていて、満たされて、こんな幸せを感じたことはないってくらいだ。

桃子ちゃんのぬくもりをこうやって、じかに肌で感じるだけで、ものすごい安心感がある。

時間も何もかもが、ゆるゆるとしていて、今までとはまったく違う次元にいるみたいだ。

俺と桃子ちゃんの周りだけ、甘い、ゆるゆるな時が流れているんじゃないだろうか。

フワ……。時々、桃子ちゃんが俺の胸に、顔を押し付けてくる。それがめっちゃ、くすぐったい。

桃子ちゃんに腕枕をしたまま、話をした。話をしてる間も、時々

顔に胸をうずめてくる。

それから、時々俺を上目遣いで見る。その目がめっちゃ、可愛い。

話しながらそっと、桃子ちゃんの鼻筋を指でなぞった。それからほつぺたも、あごも。桃子ちゃんはあるがままになっていた。

唇にも触れてみた。桃子ちゃんは、話をやめて、黙り込んだ。それからじっと、俺の顔を見つめてくる。

「こうやって、時々桃子ちゃんを抱いてもいい？」

俺がそう聞くと、桃子ちゃんはいいいよって言うてくれた。

それから、また俺の胸に顔をうずめる。恥ずかしくて顔を隠してるのかな？

「なんで？」

「え？」

顔をうずめながら、桃子ちゃんが聞いてきた。

「さっきから、時々そうやって、俺の胸に顔をうずめてる。どうして？」

「だって、聖君の鼓動が聞こえるし、あったかいし、幸せなんだから」

ああ。そっか。幸せを満喫してたのか！

「桃子ちゃん。俺も、すげえ幸せ」

桃子ちゃんをぎゅって抱きしめた。力いっぱい抱きしめた。

でも、桃子ちゃんが苦しくなるかもって、力をゆるめて、「ごめん、苦しかった？」

と聞いてみた。そうしたら、桃子ちゃんは胸に顔をうずめたまま、「ううん。すごく幸せだった」と、ささやいた。

ああ！俺、天に昇ってるね、今。確実に天国にいるよ！！！！

### 第13話 にやついてる俺

ふわふわした気持ちで、まだまだいたかった。でも、もう帰らないとな…。着替えをして、一階に下りた。

桃子ちゃんは俺に、お腹空いてないかって、聞いてきたけど、胸がいっぱいで、全然空いていなかった。

玄関に行き、桃子ちゃんにまたキスをした。桃子ちゃんは俺の両手にしがみついていた。それから、俺は家を出た。

外は北風が吹いていたのに、まったく寒さを感じなかった。

駅に向かって歩き出した。やばい。俺、にやけてる。

桃子ちゃんのぬくもりを思い出したり、桃子ちゃんの俺を見る目を思い出したり、そのたび、顔がにやける。

駅に近づき、人が行きかう場所へ行く前に、一回ほつぺたをパンとたたいた。それからきりつとした気持ちになって、切符を買い、電車に乗り込んだ。

電車ではずつと外を眺めていた。すると窓ガラスに俺の顔が映り、その顔がにやけている。

やばい！俺は慌てて、下を向いた。

なんでこうも、頭の中で、桃子ちゃんの顔が再現されちゃうんだろっか。

桃子ちゃん、色っぽかったな。って、何回も思ってるし！

下を向いて、寝たふりをしながら片瀬江ノ島まで、帰ってきた。それから、改札口で定期を探した。

あ！あれ？ない！

しかたなく、乗り越しの代金を支払い、改札口を出た。

俺、もしかして、桃子ちゃんの部屋に定期入れ忘れたかな。きつと脱いだ時にジーンズのポケットから、落としたんだろうな。でも、そんなのもどうでもいいって感じた。

家に着いた。店のドアを開くと、お客がひと組だけいた。

俺は母さんに何も言わずに、さっさとリビングにあがった。リビングには誰もいなかった。父さんは仕事で部屋かな。杏樹は今、風呂に入ってるみたいだ。

良かった。にやけた顔を見られずにすんだ。俺はとっとと自分の部屋に上がった。

それから、すぐに桃子ちゃんにメールをした。

> 今、家についたよ。で、どうやら忘れ物をしたみたいで。定期入れ、どっかに落ちてない？

少しして返事が来た。

> あったよ。黒のでしょ？

> 良かった。ごめん、今度会う時でいいから、持ってきてくれる？

> 週末にでも、お店に届けるね。

> いいよ。悪いから。

> でも早めの方がいいでしょ？聖君にも会いたいし、届けるね。

そうか。また週末、桃子ちゃんに会えちゃうのか。

週末か。塾が終わって、3時半ごろ会えるかな。そうしたら、俺の部屋に上がってもらおうかな。

わ。二人つきりになれるのかな？もしかしたら…。

> じゃあ、待ってるね。3時半ごろなら、塾終わって江ノ島にいる。

改札口で待つてるよ。

>うん。3時半に行くね。

そのメールを見てまた、俺はにやついていた。くくく！またすぐに会えるんじゃない！って喜びながら。

しばらくしてまた、桃子ちゃんからメールがあつた。

>聖君、こんな間抜け面した写真を、入れておかないでくくく！

あ、写真見られたか…。

>あ、写真入れてたの、ばれた？そのまま入れといてね。出しちゃ駄目だよ。それ、気に入ってるから。

そう送ったけど、返事が返ってこなかった。

「聖！夕飯は食べたの？」

リビングから母さんの声がした。

「まだ！」

「じゃあ、用意するから食べにきてちょうだい」

「わかった」

店に行くと、母さんが俺の夕飯をカウンターに並べていた。

「母さんのは？」

「さつき、爽太と、杏樹と一緒に食べちゃったわよ」

「そう」

俺は、いただきますと言って、食べた。食べたしたらけつこ  
うお腹が空いていたようで、ぱくぱくと食べていたけど、たまに、  
ふっと桃子ちゃんを思い出し、にやけそうになるのをこらえていた。

すると横で、俺のお茶を淹れていた母さんが、

「爽太が言ってたけど、なんか急用だったの？いきなり、塾サボる  
って言って、飛び出して行ったって」

と聞いてきた。

「え？ああ。うん、まあ」

俺はしどろもどろになった。

「ちよつと、ややこしいことに桃子ちゃんがまきこまれて、桃子ちゃんの家まで行ってた」

「ややこしいって？大丈夫なの？」

「う、うん。まあ…」

あ、そうだ。桐太のことすっかり、忘れてたな、俺。

「大丈夫だから、母さんは後片付けしたら？あ、俺も食べたらず伝うから」

「いいわよ。パートさんいるし、大丈夫」

母さんはそう言つて、キッチンに戻つていった。

大丈夫だったかな？俺、にやついてなかっただろうか。  
夕飯をさつさと食べた。でもたまに、顔がにやけそうになり、必死に顔を戻した。

食べ終わり、皿をキッチンに運ぶと、俺はさつさと2階に上がった。そして、ベッドに座り、しばらくまた思い出していた。

あ~~~~。まじで、夢じゃないよな。現実だよな。ついさっきまで、俺のすぐ横に桃子ちゃんがいた。

可愛かった。すげえ、可愛かった。あ、駄目だ。また、俺にやついてる。でもいっか。誰が見てるわけじゃないんだし…。

俺は、桃子ちゃんにメールをした。

>桃子ちゃん、もう寝た？

すぐに桃子ちゃんからメールが来た。

>まだ寝てないよ。今さっき、お母さんとひまわりが帰ってきた。  
>そうなんだ。ご飯は食べた？

>うん。今食べた。聖君は？  
>俺も、店で軽く食べたよ。

>そろそろ寝るよね？

>うん。もう寝る。

>おやすみ。

>おやすみなさい。

ああ、桃子ちゃんのメールだ。なんだか、それだけでも嬉しいし愛しい。桃子ちゃんのぬくもりを思い出し、また俺はにやけてしまい、ベッドにごろんと横になった。

イルカのぬいぐるみをぎゅうって抱きしめ、

「桃子ちゃん！」

なんて馬鹿なことをやってみる。

また携帯を手に取り、

>桃子ちゃん、愛してるよ。

と、送ってみた。

ちよつとして、桃子ちゃんから返信が来た。

>私も。

それだけ？

それだけか……。私も、愛してる……。じゃないのか……。と思いながらその文字を眺めていた。それから目をつむった。

私もって言って、真っ赤になってる桃子ちゃんの顔が浮かんだ。そつだよな。桃子ちゃんなら、私もって言っただけで、真っ赤になっただけだよ。

だけど、今日は、大好きって言ってきたり、ぎゅって抱きしめてきたり、俺の髪をなでたりしてたんだよな。

あれ、いつもの桃子ちゃんだったら、できない行動だよな。

でも、今日はそんなことを、桃子ちゃんしてくれたんだ。

髪、なでる手が優しくったな。それから俺を見つめる目、あんな桃子ちゃんの目は、初めてだな。あの目も、あの表情も、絶対他のやつには、見せたくないよな。

見ていいのは、俺だけだし、俺だけしか知らない桃子ちゃんだ。

だ、駄目だ。桃子ちゃんの家を出たときから、ずっと俺の頭の中、桃子ちゃんだ。

そこにメールが来た。桃子ちゃん？慌てて見ると、菜摘だった。

なんだ…。菜摘か…。

> 兄貴、蘭から聞いたんだけど、あの桐太ってやつ、今日桃子に会いに来たんだって？&#x2190;とんでもないことになったんだって？

あゝゝ。なんか、返事したくないな。そう思いながら、携帯を放り出し、ベッドにまた、横になった。それから、浮かぶのはまた、桃子ちゃんだ。

するとまたメールが来た。桃子ちゃん？って思って見てみると、また菜摘だ。

> 桐太、桃子に手を出したって蘭が言っただけ、兄貴、桃子に会いに行っただ？それとも桐太のところ？

申し訳ないけど、今、桐太のこともどうでもいい。っていうか、すっかり忘れてたし。そうか。桐太、桐太だよ。

そう、桐太のことがきつかけで、今日、桃子ちゃんと…。

桃子ちゃん、まじで抵抗してこなかったな。あれって、観念しちやっただってことかな。

桃子ちゃん、あつたかかったな…。あゝゝ！駄目だ！！！！！桃子ちゃんていつぱいだ！！！！

>やばい。桃子ちゃんのことを、頭から離れない！（><）

思わず、桃子ちゃんにそうメールをした。桃子ちゃんは？俺のこ  
と考えてんの？

>私も。今、ベッドに横になったら、シーツから微かに聖君の匂い  
がして、ベッドにしがみついていたところなの。

やっぱり、俺のこと…。って、俺の匂いつて何？

>え？俺の匂い？臭い？汗の匂いかな？

>違う。髪かな。なんだろう？何かつけてる？香水。

>つけてないよ。そんなもん。

どんなだよ、俺の匂いつて…。まあ、いいや。それよりもさ…。

>桃子ちゃん、可愛かった。

俺は、そうメールした。

>聖君、突然、それだけのメール送ってこないで。びっくりする！  
あれ？そんな反応？

>だって、まじで可愛かったし。色っぽかったし。綺麗だったし。

やべえ。寝れそうにない。

そう送ってみた。そうしたら、止まらなくなった。

>やべ〜。帰りの電車でも、何度にもやけそうになるのをこらえ  
てたし、店でも、にやけそうになるのをこらえて、食べてたんだ。  
でも、母さん勘がいいから、俺がにやけてたの、わかったかも。  
>さっきのメールがあっさりとしていたから、聖君、全然普段と変  
わらないのかと思った。

え？あっさり？ああ、定期入れ忘れたってメール？

>まさか！にやけすぎて、メールがうてなかっただけ。

って、ほんとのことを書いて送った。

>やばいよ、俺。ずっと回想してて。それでにやけてるって、かな

りやばいよね？

> 私も思い返して、ため息ついてるよ。

え？た、ため息？

> ため息？！なんで？

> あ。暗いため息じゃなくって、幸せ〜っていうため息。幸せすぎて、溶けちゃいそうなの。

何それ！幸せすぎて、溶けちゃいそう？く〜く〜！嬉しすぎるし、可愛すぎるっしょ！

> もう、桃子ちゃんってば！

そうメールをしたら、桃子ちゃんが、

> 変なことを聞いてもいい？

って聞いてきた。何？なんだろうか。

> うん、何？

> 幼児体型で、がっかりしなかった？

ええ？！！！！

がっかり？とんでもない！それに幼児体型だなんて、とんでもない！！！！

すげえ綺麗だった。やばいことに、目に焼き付いちゃってる。桃子ちゃんの色の白さも。それにぬくもりと同時に、柔らかさも。

桃子ちゃん、まだ、そんなこと気にしてたの？っていうか、もしかして今日もずっと、気にしてた？

俺ががっかりしたなんて思ってた？俺、そんなそぶり見せたのかな。そりゃ、綺麗だとか、そういうことは言わなかったけど…。

ってことはちゃんと、桃子ちゃんにそういうこと伝えるべきなのかな。でないと、桃子ちゃんはまた、不安になっちゃうのかな。

> 桃子ちゃん。全然幼児体型じゃないよ。すごく綺麗だったよ。

そう送ってから、またメールを打った。

> 透き通るくらい色白いね。それにあったかくって、柔らかくって。ごめん。今、思い出してて、また、メール打てなくなってた。

桃子ちゃんからしばらく、メールが来なかった。

> そろそろ、風呂入ってくるね。おやすみ。

> おやすみなさい。

俺は、携帯を閉じて、風呂に入りに行った。

ああ、俺、しばらく勉強手につかないかな。きっと。

## 第14話 俺のもの

土曜、3時半になる前に駅に着いていた。なぜか、緊張している俺がいる。緊張って言うか、なんていうか、恥ずかしいって言うか…。

電車がホームに入ってきた。あの電車に乗ってるんだろうか。乗客が降りてくる。一人、また一人。そして、ああ、遠くにいるのになんで、桃子ちゃんだってわかつちゃうんだか…。

今日は、ワンピースなんだ。ああ、母さんが去年買ってあげた白のワンピース。すげ、俺、覚えてるあたりが、すごくない？

そのうえに、ジャケットを羽織り、ブーツを履いて、ワンピースの裾をひらひらさせながらやってくる、桃子ちゃんがめっちゃ可愛い。

あの、めっちゃ可愛い女の子は、俺のものなんだよ、もう。なんて、心の中で叫んでる俺。相当バカかも。

改札口の向こうで俺に気がついた。にこって桃子ちゃんが微笑む。うわ！可愛い。

「待った？」

「うつん、俺も今さっき着いたところ」

桃子ちゃんは、ちょっと恥ずかしそうに目をふせた。もしや、桃子ちゃんも恥ずかしがってる？

桃子ちゃんに手袋を貸した。俺はジャケットのポケットに手を突っ込んで、腕組んでくれないかなって、期待をしていた。でも、まったく桃子ちゃんは気づくそぶりも見せない。わざと桃子ちゃんの腕に、俺の腕をぶつけた。

「じめん」

と桃子ちゃんは、謝ってきた。いや、そうじゃなくって……。しょうがないな。

「腕、組んでてもいいよ」

しかたなくそう言ってみた。すると、桃子ちゃんは、俺の腕に手を回し、ぎゅって握ってきた。

うわ。なんか照れる！自分で腕組んでいいとか言っておいて、俺ってば。

桃子ちゃんは黙って歩いていった。俺も、なんか恥ずかしくって、黙っていた。

桃子ちゃんを見ると、俺の視線に気づくのか、俺の方を向く。上目遣いが可愛くて、思わず嬉しくて笑うと、桃子ちゃんもちよっと恥ずかしそうに笑う。

く~~~~。可愛い！その可愛さで、でれでれにやけそうになるのをこらえながら、俺はまっすぐ前を向いて歩いていった。

店に着くと、桃子ちゃんはぱつと俺の腕から、手を離れた。

店に入ると、父さんも母さんも、桃子ちゃんを歓迎して、スコーン食べない？とかあれこれ聞いてきた。

俺は、さっさと俺の部屋に行きたい。店、これから混むでしょ？部屋に行くよ、なんて言って、桃子ちゃんを連れて、2階にあがった。

部屋に入り、机の上に母さんが淹れてくれた、カフェオレを置き、椅子に腰掛けた。

桃子ちゃんはなぜだか、入り口付近で突っ立っている。どうしたんだろう。

「桃子ちゃん？」

「……」

あれ？返事がない。どっか一点を見つめたまま、固まってる。

「どうしたの？立ってないで、座ったら？」

しーーーーん。

あ、あれ？まじで、どうしちゃったの？

「ね、桃子ちゃん」

ちよつと大きな声で、話しかけた。するとようやく、はつと気がつき、こつちを見た。まじで、どっかに意識飛んでいったよな、今。

「また、どっか行ってた？」

「ごめんね。考え事してた」

「あ、そう」

なんなんだ。何を考え込んでいたんだか。

なんて思いながら、俺は、桃子ちゃんを見ながらカフェオレを飲んだ。まだ、桃子ちゃんは突っ立ったままだ。

「な、何？」

桃子ちゃんは、緊張した顔で聞いてきた。

「だから、なんでそこで突っ立ってるのかなって。さっきから、座れば？って言ってるのにさ」

「あ」

桃子ちゃんは、慌ててベッドに座った。

俺は、桃子ちゃんを見ていた。なんだか、ちよつと今日は雰囲気が違う。どこが違うのかな。どこも変わっていないようで、でも、どこかが違う。

「な、何？」

桃子ちゃんは、俺がじっと見ていたことに気がつき、聞いてきた。

「うん？」

桃子ちゃんは、真っ赤になって、ちょこつと困った顔をしている。

ああ、その顔も可愛いじゃん。

「なんでもない……」

俺は視線を外した。本当はずっと、見ていたかったんだけど。

桃子ちゃんにカフェオレを飲む？って聞いて、マグカップを渡した。桃子ちゃんは両手でマグカップを持って、飲んでいた。

白のワンピースの上には、薄いピンクのカーディガンを着ている。その袖口が長くて、半分手が隠れている。その状態のまま、マグカップを持って、ふうふうっしてしながら、飲んでる姿は、めっちゃめっちゃ、可愛い。

「聖君、何か私、今日変？」

「え？別に。なんで？」

「だって、さつきから、ずっと見てるから」

「ごめん。なんかつい……」

やべ〜。じっと見てたから、変に思われたか。

「つい？」

「桃子ちゃんのこと、見ていたくなっちゃって」

「え？」

桃子ちゃんが、また真っ赤になった。

「えっと、横にいつてもいい？」

「うん」

俺は桃子ちゃんのマグカップを、桃子ちゃんから受け取り、机に

置くと、桃子ちゃんの横に座った。

ふわ……。桃子ちゃんの髪から、甘い香りがした。

俺はドキドキしながら、桃子ちゃんの手を握った。

桃子ちゃんは赤くなりながら、下を向いていた。なんか、その横顔は、やけに大人びて見えて、すごく綺麗で…。

俺は、そっと桃子ちゃんの顔に顔を近づけて、キスをした。そして、少しだけ、顔を離して、じっと桃子ちゃんの顔を見た。目をつむっていた桃子ちゃんはそれに気がつき、そっと目を開けた。

「何？」

「2日間会わないうちに、変わった？」

「うっん」

「そうかな、すごく綺麗になったけど」

そう言つと、桃子ちゃんは目をまんまるくさせて、驚いていた。

「ええ？か、変わらないよ」

あ、真っ赤だ。頬がピンク色に染まり、ますます桃子ちゃんは色っぽく見える。

「そうかな？めっちゃ綺麗だけど」

そう言つて、俺はまた、桃子ちゃんにキスをした。桃子ちゃんに触れられるのがすげえ、嬉しい。

桃子ちゃんの頬はあつたかいし、柔らかい。それに、唇も……。桃子ちゃんにキスをしてる幸せを思い切り、味わっていると、桃子ちゃんが俺の両腕に、がしつてしがみついていた。

これ、確かこの前も、桃子ちゃんの家から帰るとき、玄関でキスしたら、桃子ちゃん、しがみついていたよな。

なんで？それもかなり、両腕に力入ってるけど…。

桃子ちゃんの唇から離れ、そっと目を開けた。桃子ちゃんも目を開けると、俺の目を見た。

「この前もそうだった」

「え？」

「俺の腕にしがみついてくるけど、なんで？」

「なんでって…」

桃子ちゃんが目を伏せた。

「えっと…。嫌がってて…とかじゃないよね？」

「え?!」

「なんか我慢してて、嫌で力が入っちゃうとか？」

そう聞くと、桃子ちゃんは首をぐるぐるって横に振った。

「その逆だから」

「逆？」

逆ってなんだ？

「だから、その…。ち、力が抜けて、そのまま倒れそうになって、それで、腕にしがみついていたの」

「え？」

「だ、だって、聖君のキス…」

「うん」

「力が抜ける」

「え？」

力が抜けるから、必死でしがみついていたとか？

あ！そういえば、さっきの桃子ちゃんの目、やたら色気があると思ってたけど、

「目、色っぽいもんね」

「え？誰の？」

「桃子ちゃんの」

「うそ」

「うそじゃないよ。すごい色っぽい目するんだ」

「で、でも、聖君だって」

「俺？」

「すごく熱い目になるよ、今だって」

「熱い目って何？」

「ステージの上でもそうだった。すごく熱い目。色っぽい。それで、射抜かれちゃうの」

はいくく？射抜かれるって？！そんなこと聞いて、俺、絶対に真っ赤になったよ。今、顔が熱い。

「射抜かれる？」

「うん、ハートをズドンって射抜かれちゃう」

「な、何それ？」

「それで、お手上げてなっちゃうの」

「お手上げて？」

「だから、その…。ノックアウトされちゃうみたいなの、降参しますってなっちゃうの」

降参？ノックアウト？あれ？じゃ、この前の…。

「もしかして、この前もそれで、何にも抵抗しなくなった？」

「え？うん」

「それで、体の力も一気に抜けた？」

「うん。わかった？」

「うん。なんかいきなり、桃子ちゃん、体預けたって言うか、まったく抵抗しなくなったから、俺、とうとう観念してくれちゃったのかって、思ったんだよね」

「そうじゃなくって、聖君の熱い目に、まいっちゃったんだ、私」

熱い目？まいつちやった？！

「どんな目してんの？俺。なんか、物欲しそうな、そんな目？」

「違うよ」

「じゃ、相当すけべな目？」

「違う違う」

桃子ちゃんは首を横に振った。そして、桃子ちゃんの方がよっぽど色っぽいんじゃないかって目で俺を見た。

「そうじゃなくて、だからね、すごい色っぽい目で、どんな女の人、いところで聖君に体預けちゃうかもっていう目」

「げ！何それ。どんな目だよ」

俺、そんな目してんの？そんな目で桃子ちゃんのこと見てるの？！  
やべーーーーーーーー！

「だからね、聖君」

「え？」

「他の人には、そんな目しないでね。そんな目で見つめたら、絶対に女の人、いころだからね」

他の人についてこと？桃子ちゃん以外に？

「ええ？！」

まさか！

「当たり前じゃん。桃子ちゃんのことしか、そんな目で見ないって焦ってそう言うてから、はっと気がつき、

「どんな目なのかわかんないけど、あれかな？桃子ちゃんも色っぽい目するけど、そんな目かな。あ、その目も、他のやつには絶対に見せないでね」

と、俺も桃子ちゃんに注意をした。

「俺だけだよ。その目、見ていいのは」

俺はそう付け加えた。まじで、その目で他のやつなんて見てほしくない。俺のことだけを見ていてほしい。

俺はまた、桃子ちゃんにキスをした。他のやつになんて、渡してたまるかよ、そんな思いも込めて。

## 第15話 桐太の告白

ドスン。キスをしてると、桃子ちゃんがまた、俺の両腕を掴もうと手を伸ばしてきた。だけどその前に、後ろに倒れてしまった。

俺はそのまま、桃子ちゃんの上に乗っかってしまった。

やばいことに、止められそうにない。

そのまま、首筋にキスをした。桃子ちゃんの首って、甘い香りがするんだ。なんでかな。すげえ、愛しくって、可愛くてしょうがなくなる。

「聖君」

桃子ちゃんが俺を呼んだ。でも、そのままキスをしていた。

「聖君。誰かがもし入ってきたら…」

「大丈夫。鍵閉めたし」

「でも、一階にお父さんもお母さんも…」

桃子ちゃんは、小さな声でそう言ってくる。

「大丈夫。店には聞こえないよ」

と、俺も桃子ちゃんの耳元で、小声で言っ、耳にキスをした。  
「だけど」

桃子ちゃんは、ビクンツてなりながら、まだ話を続けようとした。

「今日は、子どもっぽい下着？」

言われる前に、聞いてみた。

「え？違うけど」

「違うんだ。じゃ、大丈夫？」

そう言っと、桃子ちゃんは黙り込んだ。

「電気消す？」

これまた、言われる前に聞いてみた。

「え？」

あれ？桃子ちゃんが思い切り、びっくりしてる。もしか今日、まったくその気はなかったとか？白のワンピースで、俺、期待を勝手にしちゃってた？

ドン！

「え、何？」

桃子ちゃんがドアの方を見て、驚いてそう言った。

「クロだ」

鍵閉めて、自分でドアが開けられないと、ああやって、体当たりしてくるんだよね〜。

あ〜〜〜、まったくもう！なんで、邪魔して来るんだよ！

そのうえ、カリカリ、ドアをひつかくし、しまいには、

「く〜〜ん」

ってないてるし。あれ、ほっとくと、ずっとやってるんだよね〜。  
「しょうがねえな」

俺は、ベッドから立ち上がり、ドアを開けにいった。

「ワン！」

クロが尻尾を振って、喜んでいる。このやる〜。邪魔しやがって〜！と、頭をぐりぐりしてやりたいのを必死に我慢している、俺のズボンの裾をかねでひっぱった。

「何？下で俺のこと呼んでた？」

「ワン！」

あゝあ。誰？俺と桃子ちゃんを邪魔しようとしているやつは。

「クロ、俺のこと呼びにきたみたい。ちょっと待ってて、行っていく

る」

「うん」

桃子ちゃんは、ベッドに座って、こくんとうなづいた。

クロに続いて、俺は一階に下りた。クロはそのまま、店の方まで行った。俺もクロのあとをついていくと、店に、なんと桐太がいた。

「あ、聖、お友達よ」

母さんはにこにこ顔でそう言った。俺は、思い切り、顔が引きつった。

「な、なんでここにいるんだよ、桐太」

「話があるんだよ」

「話？何？わざわざぼこぼこにされに来た？」

それを聞いてた母さんが、横で驚いていて、俺は焦って、

「じゃ、ちよつとまって。外行つて話そう。桃子ちゃんが来てるから、今、断ってくる」

と、また家にあがろうとすると、桐太に呼び止められた。

「待てよ、あいつもいるのか。じゃ、呼べよ。あいつにも話がある」

「なんの？」

「そんなに怖い顔するなよ。別に、仕返しに来たわけじゃないから……」

桐太の顔は、真顔だ。こんな真顔を見ることは、そうそうない。

「わかった」

俺はまた、2階にあがり、桃子ちゃんに桐太が来たことを告げ、桃子ちゃんと一緒に店に行った。

それから、3人で外に出て、海に向かって歩き出した。

なんでだかしんないけど、勝手にクロも尻尾を振って、ついてきた。まあ、いいか。

俺は、桃子ちゃんにぴたりとくつついていた。もう、2度と桃子ちゃんを傷つけるような真似は、させない。いつでも、桃子ちゃんを守る位置にいる。そう心に誓いながら歩いていた。

浜辺に着き、桃子ちゃんを俺の後ろに隠し、桐太の真正面に向かって立った。

「お前、何しにきたの？」

「……」

桐太は黙っていた。しばらくしてから、俺の後ろにいる桃子ちゃんの方を見ながら、

「その女、俺の歯を折った」

って、ぼそって言った。

なんだよ、やっぱりそのいちゃもんでもつけにきたのかよ。

「だから？お前がそれだけのことしたんだろ？なんなら、もう2、3本へし折ってやろうか？」

「もういいよ。一本で十分だ」

桐太の表情が変わった。いきなり、声も変わった。

「じゃ、何しに来たんだよ。俺にぼこぼこにされるのを覚悟して来たんじゃないのかよ」

「その女が、ちゃんと聖と真正面から向き合って話せて言うから、来てやったんだよ」

「はあ？何それ…。え？桃子ちゃん、そんなこと言ったの？」

桃子ちゃんの方を向くと、桃子ちゃんは黙ってうなづいた。

「なんで、そんなこと？」

「だって、なんだか、いろいろと桐太君は思いを抱えてるみたいだったから、一回、聖君にそれをぶつけた方がいいんじゃないかなっ

て思って」

「はあ？ちよつと待った。俺、そんな器用じゃないって。

「……。俺、そんなに何人もの人の思い、受け取ってられないってまじ、自分のことだけで精一杯だよ」

でも、桃子ちゃん、そんなことこいつに言っちゃったのか。あゝあ。面倒くさい。だけど、桃子ちゃんが言っちゃったんなら、しようがない。

「しょうがねえな。なんだよ？俺に何が言いたいんだよ？」

桐太はしばらく俺を黙って、睨んでいた。なんだ？うらみつらみでもあるのか？

クロがやたらと喜んで、走り回っている。この暗い重たい雰囲気をおかれよ。って無理か。

「中学の時、お前、いきなり俺のこと見放したよな」

「え？」

クロが落ち着き、俺の足元に寝転がると、ようやく桐太が口を開いた。

「それまで、説教したりしてたのに、いきなり手のひら返したみたいに、俺にかまってこなくなった」

「それは、お前が俺の話を聞かなかったからだろ？うるさいの一点張りで、なんか、もう、何を言っても無駄なんだなって、そう思ったんだよ」

「お前、だいたいなんで俺に、説教なんかしてきたんだよ」

「は？お前、自分が何をしたかわかってないの？」

「お前の彼女にちよつかいだした」

「そつだよ。そのうえ、俺と別れたら、その子のこと見向きもしなくなつた」

「そりゃそうだ。お前と別れさせるのが目的だったんだから」  
「だから、なんでそんなことするんだよ。それがわかんねえ」

桐太は、顔をゆがませた。俺の後ろで話を聞いていた桃子ちゃんが、俺のジャケットの袖口をぎゅってつまんだ。俺と桐太が喧嘩にでもなると思っただのかな。

「あんなやつ、お前の彼女になんか、認められない」

「は？俺の彼女だよ？お前の許可がなんで必要なんだよ」

「聖は知らないんだよ。あの女、聖のこと、ただ自慢したくて、付き合ってたんだ」

「ああ。そう。でも、それだからって、なんでお前が別れさせなくっちゃならないんだよ？」

「あんな女、聖にふさわしくない」

「なんだよ？ふさわしいとか、ふさわしくないとか、なんでそれをお前が決めるんだよ？俺が好きになるかどうかだよ？お前には関係ないじゃん」

「関係大ありだよ」

「関係ないだろ？！」

桃子ちゃんの手が、もつと力を入れたのがわかった。

桐太は一瞬、黙り込んだ。そしてうつむくと、

「聖に何がわかるんだよ」

と、低い声でそう言った。

「何もわかんないね！なんでお前がふさわしいとか、ふさわしくないとか決めるのか、まったく理解できないよ」

本当にさっぱり、わけがわからない。それなのに、なんで桐太は泣きそうになってるんだよ。なんなんだよ。

「クーン」

クロが、俺の怒りを感じて足元を歩きながら鳴いた。

「ああ、クロ。お前に怒ってるわけじゃないから、安心して」  
頭をなでると、クロが安心してまた、寝転がった。

「聖って、心を許したり、自分が受け入れたやつには、すげえ優しいんだ。昔からそうだ」

「え？」

「そのクロとかいう、犬みたいに」  
何が言いたいわけ？

「聖の周りにいるやつは、お前が気を許したやつだ。一回そうなる  
と、お前はとことん、仲よくなるし、心を開く」

「そう見える？」

「ああ。羨ましかったよ。だから、同じクラスになって俺も、聖と  
仲良くなれて、すげえ嬉しかった」

羨ましかった？

「聖の周りのやつって、けっこう気のいいやつが多かったし、やつ  
ぱり、聖の友達してるんだから、それだけのやつなんだなって思っ  
てた」

「ふうん」

「だけど、あの女は違う」

「何が？」

「聖のことが本気で好きなんじゃなくて、他の女に自慢したかった  
だけだ」

「なんでそんなのわかるんだよ？」

「聞いたんだよ。放課後教室で、そんな話してたのを」

「じゃ、それをそのまま、俺に伝えたら良かったじゃん」

「……、そんなこと言って、聖のこと傷つけないってのもあったから」

「はあ？何だよ、それ……」

俺を傷つけない？でも、結果的には悪者になったのは、桐太……。え？あれ？

「あ！まさか、自分がわざと悪者になって、俺から彼女を引き離そうとしたのかよ？」

桐太は下を向いた。

「なんだよ、それ」

まだ、桐太は黙っている。

「なんで、俺に言わないんだよ」

ああ、なんだかものすごくむかついてきた。

「いんだよ、別に、俺はどう思われても。だけど、そんなことをしたとしても、聖にだけは、嫌われないですむだろうって、たかをくくってた」

「え？」

「俺のこと、そのまま受け止めてってくれる、理解してくれるってそう思い込んでたから」

「……そうじゃなかったから、頭にきてるのか？」

「お前のこと理解するどころか、俺は、責めたり、怒ったりしてた。だから、傷ついてトラウマになったのか？」

「トラウマって、なんでそれ？」

「桃子ちゃんから聞いた」

「……よけいなこと、しゃべるなよ」

「お前のこと桃子ちゃんも、心配してたんだよ」

「うざい！そういうことする女、大嫌いだ」

「桐太！お前ひねくれ過ぎだよ！」

「うつせ〜よ。俺はな、その女みたいに、さも私はわかっているのみたいな顔をするやつが、大っ嫌いなんだよ！そういうやつに限って、何もわかつちゃいねえんだ」

桐太はそう言っ、思い切り桃子ちゃんを睨んだ。俺は、桃子ちゃんをまた俺の後ろに隠した。

「そんなにその女は大事？」

「大事だよ。だから、手出すなって言っただら？」

「はは！でも、手出しちゃったよ、俺」

こいつ！

「聖君」

後ろから桃子ちゃんが、握り拳をあげそうになった俺の腕をつかんだ。

「殴りたければ、殴れば」

桐太は、悲しそうな顔でそう言った。

「それで気がすむなら、殴ればいいだろ」

「気がすまねえよ」

その顔で、一気に怒りが消えた。

「桐太君、ちゃんと言えはいいのに」

桃子ちゃんが俺の後ろから、桐太にそう言った。桐太は、

「何を！」

と、怒鳴りつけた。

「聖君のことが好きだったこと」

桃子ちゃんは、俺の背中にぴたりとくっつき、そう言った。

「うつせ〜よ」

「……。俺のこと兄貴と重ねてるのか？」

「え？」

「そうなのか？」

「違えよ」

俺の質問に、桐太は、そっぽを向きながら、口を尖らせて答えた。

それから桐太は下を向き、頭を抱えてから、

「わかった。言うよ」

と、俺の方を向いた。

「聖には、こんなこと言うつもりはなかった。こんなこと言ってもしょうがないし、それどころか、お前、絶対に引くからさ」

引く？俺が？って、まさか？

「そ。俺はお前のことが好きだったよ」

ああ、やっぱり？

「多分、小学生の頃から、好きだったよ。中学入って、あの女が聖と付き合いだして、それで自分でも確信した。あんな女に取られたくないってさ。それは、友情じゃなくって、恋愛感情だったこと、気がついた」

あゝ。やっぱり…。やっぱり、そうきたか。そうかと思ったけど、そうか。

俺の顔を桃子ちゃんが、目を丸くして覗き込んだ。桃子ちゃんの方が俺よりも、驚いているみたいだった。

## 第16話 桃子ちゃん好きの俺

「別に、引いたりしないけど、俺」

俺はとっさにそう言った。

「驚かなねえの？聖」

桐太の方が、目を丸くした。

「ああ…。うん、まあ…。お前で3人目。俺、男から告られるの」  
そう言つと、俺の肩にドンと、桃子ちゃんの頭がぶつかった。ど  
うやらよろけたらしい。かなりのショックを受けてる？もしかして  
…。

「そつか。他にも聖に告つたやついるんだ」

桐太は冷静にそう聞いてきた。

「…。付き合ってる子いるからって、断ったけど」

「そつか」

「そいつらって、同じ高校？」

「ああ、うん。後輩だけど」

「今も顔合わせる？」

「え？うん。挨拶程度はする」

「…。嫌がったり、気持ち悪がったりしないの？お前」

「しねえよ、別に」

多少は驚いたけど。

「すげえな、お前」

「そうか？だけど、付き合ったりはできないよ。俺、女の子が好き  
だし」

「……」

「あ、違った。女の子がじゃなくって、俺の場合どうやら、桃子ちゃんが好きだしって言った方がいいかも」

俺がそう言うのと、桐太は、はあ？って顔をしてた。桃子ちゃんは、隣で真っ赤になって俺を見ていた。

「多分、桃子ちゃんの場合は、女の子だからとか関係なく、好きかも」

そう言うのと、桐太はさらに呆れた顔をした。

「なんだよ、それ？じゃ、もし男だったとしても、好きになってるかもってこと？」

「もしなんてないけど、でも、そうかもな」

「あははは。すげえな、それ。こいつは本当に聖にとって、特別なんじゃない」

桐太は、突然笑い出した。

「そうだよ」

俺はちよつとむつとした。

「……わかったよ。俺もこいつだけは、認める。こんな弱々しくって、男がついていないと駄目なんですってのを絵に描いたような女、絶対に聖の彼女なんかとまらねえって思ったけど、こいつ、すげえ強いもんな」

強い？

「こいつは本気で聖に惚れてるってわかったし、その想いはもしかすると、俺、太刀打ちできないかもってそう思ったからさ」

「太刀打ちできない？」

俺がそう聞くと、桐太は、

「すげえ、聖のこと大事にしてるだろ？」

と、桃子ちゃんに聞いた。

「うん」

桃子ちゃんが真っ赤になりながらうなづいた。わ。なんか、嬉しいぞ。

「それがわかったから、俺も認める。それに、こいつの親友ってやつも、こいつのこと本気で大事に思ってるし、そんなふうに着に思われてるってことは、それだけの人間ってことだろうしさ」

桐太は、穏やかな顔をしてそう言った。

「お前、あの果林さんって人のことは、まったく本気じゃなかったのかよ」

「あいつは、俺と同じだよ。俺のこと本気だったわけじゃない。それに、俺も」

「もしかして、女の子は好きになれない…とか？」

「いや、そういうわけじゃない。それに俺、男が好きなわけでもないよ。聖だけが多分、特別。他のやろっ見ても、なんとも思わないからさ」

「そっか」

「聖は、こんな俺でも、友達としてそばにおいておく余裕ある？」

桐太は、言いにくそうにそう言ってきた。うっ、ん、そうだな。

「……。どうかな。けっこう自分のことで、俺もいっぱいいいだから、わかんねえけど、でもま、普通にふざけたりするダチだったら、いいかもな」

「そっか。それじゃ、その程度の友達でもいいからさ、さわぎたくなったら呼んで」

桐太の顔が明るくなったのがわかった。

「桃子ちゃんには、絶対にもう、手出さないよな」

「もちろん。これ以上、殴られたくないし。こいつ、強えんだもん」  
桐太の中じゃ、すっかり桃子ちゃんは強い存在になっちゃったの

か。ま、いつか。それでも別に。

「あ、でも他のやつがいつ手を出すかわかんないし、お前、いい加減大事にするのもやめて、さっさとものにしとけば？」

「げ！何言い出すんだよ。こいつ！うわ。顔がほてる。」

「お前には関係ないだろ？」

俺はそう言っ、後ろを向いた。

ああ、もう手は出しちゃってるし、桃子ちゃんは俺のものになっちゃったんだってば。っていうのを、悟られないように。

それから、俺と桃子ちゃんは桐太と別れて、店に向かって歩き出した。クロは俺の横を、超ご機嫌で歩いている。散歩ができて嬉しいと、そう言ってるみたいに尻尾を振っている。

桃子ちゃんは、後ろを振り返った。桐太のことが気になるらしい。

「桃子ちゃん、いいの。桐太のことは気にしなくても」

桃子ちゃんは俺の方を向いた。

「俺、友達としては接していけるけど、それ以上は無理だから。変に優しくしたり、同情したり、そんなのしたくないから」

「え？」

「やっぱりね、俺には桃子ちゃんが1番なんだよ」

そう言っ、俺は桃子ちゃんの手をぎゅって握った。桃子ちゃんはちょっと赤くなって、俺の顔を見ていた。俺らはまた、ゆつくりと歩き出した。

「初めて、男から告られた時には、さすがに俺、びびっちゃって、俺には、付き合ってる子がいるし、期待しても無理だからって、かなり、顔をこわばらせて断ったと思うんだよね」

「うん」

桃子ちゃんは、前を向いて、うなづいた。

「そいつ、1年生で、思いを告げたかっただけですからとか言ってたけど、それから、学校で会うと、にっこりと微笑んできたりするんだよね。でも、俺にはどうすることも出来ないから、ほんと、挨拶する程度。それ以上もそれ以下もないって感じなんだけどさ」

「うん」

「その次に、告られたのは、夏休み中。同じ塾に通ってる、2年生から」

「え？そうだったの」

桃子ちゃんは驚いて、俺を見た。

「即、断ったよ。でも、高校で会っても、無視しないで、話をしてくださいって言われて、挨拶くらいしかしないよって言ったんだ。それでもいいって言われたけどさ」

「ちょうど、それ、桃子ちゃんがうちに来て、俺が胸触っちゃって桃子ちゃんが嫌がった日あったじゃん。あのあとすぐだったんだ」

桃子ちゃんはじつと、俺の顔を見ながら歩いていた。

「俺、夢見たんだよね。告られた日にさ」

「どんな？」

「桃子ちゃんが、実は私男なんですって、俺に、言ってるの」

「ええ？」

あ、やっぱり桃子ちゃん、驚いた。

「で、俺、驚くんだけど、だから、桃子ちゃん、胸触って、嫌がったんだなって、変に納得してて」

「え？」

「男だつてばれたら困るから、嫌がったんだなって俺、夢の中で思ってるんだ」

「な、何それ？」

「でさ、夢の中でさ、俺、男でも桃子ちゃんのことやっぱ好きだって、桃子ちゃんに抱きついてんの」

俺は、桃子ちゃんの反応をちらちら見ながらそう言った。桃子ちゃんも赤くなつて、呆けた顔で俺を見た。

「起きてから、その夢思い出して、俺、なんつう夢見てるんだよって思ったんだけど、だけど、まじで、桃子ちゃんが男だったとしても、やっぱり惚れちゃってるだろうなって、そう思ったんだよね」

そう俺が続けると、桃子ちゃんは、うつむきながら聞いてきた。

「それ、私の胸があまりにもぺったんこで、それでそんな夢見たんじゃないよね？」

「ええっ？違うつて！」

な、何？その発想…。第一、桃子ちゃん胸、ぺちゃんこじゃないじゃん。

「桃子ちゃん、胸あるじゃん。すげ、やわらかいじゃん」

俺はちよつと照れながら、そうぼそつて言つと、桃子ちゃんはいきなり、俺のことを横から押した。

「うわ！」

いきなりだったんで、俺は思い切りよろけてしまった。

「桃子ちゃん、びっくりした。いきなり押さないで。すつころぶかと思つたよ、俺」

そう言つと、桃子ちゃんは顔を真っ赤にさせて、両手で顔を隠した。あはは、なんで顔を隠すんだか…。

やっぱさ、俺、男だろうがなんだろうが、桃子ちゃんには絶対に惚れてると思うよ。そんなことを思いながら、桃子ちゃんの手を取

つて、また歩き出した。桃子ちゃんの方を向くと、まだ真っ赤だった。ああ、可愛いよね。本当に。

## 第17話 新たな悩み事

その日は、父さんと杏樹が車で桃子ちゃんを送っていった。俺は、店の手伝いに入った。

最近、気づいた。母さん、かなり無理してる。俺が店のバイトをしていた時には、俺のこときつかったから、母さんはそんなに大変じゃなかった。

でも、パートさんだとそうもいかないし、風邪で休まれたり、体調が悪くって、しばらく来れなかったりってこともあり、その時には母さんが倍、働かなくちゃならないから、相当無理をするみたいで。

父さんが仕事がひと段落着いてる時には、手伝ったりしてるけど、それでも、母さん、頑張っちゃってるんだよね。

大変だとか、辛いとかそういうことも母さんは言わないからわからなかったけど、最近は顔色が悪い時もあるくらいだ。

なのに、俺には、勉強があるからいいわよって言って、手伝わせようとしなない。

こんなでさ、俺が沖縄行っちゃったらどうすんの？今は、どうしても大変そうな時、店に出るようにしてる。いいわよって言われても、勝手に手伝っちゃってる。

だけど、沖縄にいたら、母さんが具合が悪くても、飛んでくることもできない。

俺、マザコンかな？いや、母さんだけじゃないんだ。父さんのことも杏樹のことも、すげえ大事だ。

これって、変かな？

沖縄に行きたかった。だけど、最近は沖縄の大学に行かなくなっても、俺の夢は叶えられるよな…とか、そんなふうに思えてきている。なんで、俺、沖縄に行かなくなっちゃ叶わないとかって、執着してたのかな。それすら、今はわからないくらいだ。

桃子ちゃんのこともある。絶対に桃子ちゃんが高校卒業したら、沖縄に来てもらって、一緒に暮らすんだ！なんて意気込んだ。でも、沖縄に俺、行く必要あるのかな。

家族や桃子ちゃんから離れて、一人で行く価値ってあるのかな。

そんなことを考えたら、わけがわからなくなってきた。俺が本当にやりたいことって何？

その日、父さんは、桃子ちゃんを送った後、一緒に車に乗っていた杏樹と、ドライブをしたらしい。だけど、帰り道はほとんど、杏樹は寝ちゃったみたいだ。

俺は、帰ってきた父さんに、

「あのさ、ちょっと話があるんだけど」

と言って、誘って家を出て、2時まであいてるファミレスに行った。父さんは、ビールを注文した。俺はもちろん、未成年だし、コーラを頼んだ。

「く〜。旨い」

父さんは、ビールをぐびって飲んでそう言った。

「いいね。俺も早く20歳になって、飲みたいよ」

そう言つと、父さんはにっこりと笑って、

「そうだな。俺も早くお前と飲み交わしたいよ」と嬉しそうに言った。

「で、何？話って」

父さんはつまみに頼んだ枝豆をつまみながら、聞いてきた。

「うん。実は、沖縄行きのこと」

「ああ、大学？」

「うん」

「桃子ちゃんのこと、決心が揺らいだ？」

「あゝ。うん、それもあるけど」

「他にもあるのか？」

「…母さんさ、最近疲れてない？」

「ああ。そうだな。だから明日は店、休むことにさせたよ」

「店を？」

「臨時休業」

「そっか」

やっぱり、疲れちゃってるんだ。

「俺が沖縄に行くのをやめるって言ったら、もしかして母さん、店やめちゃうかな」

「え？」

「母さんが大変そうだから、俺は沖縄に行くのをやめて、こっちの大学に行って、店のバイトするって言ったら」

「うゝゝん。そうだな。もしかしたら、店しめるって言い出すかもね」

「はゝゝゝゝゝ。それはしてほしくない」

「なんで？」

「れいんどろっぷす好きなんだ、俺」

「そうだな。俺も好きだよ」

「だよね」

父さんがれいんどろっぷすに、思い入れがあるのを俺も知ってる。母さんだって、ものすごく大事にしてるんだ。だから、ずっと今まで、店を続けてきた。

「でも、ほつといて沖縄行く気分じゃ、なくなってきた」

「母さんのためにやめるの？」

「母さんだけじゃない。桃子ちゃんのこともあるし」

「お前がしたいことって何？」

「え？」

「本当にしたいこととか、お前が望むもの」

「……」

「自分自身にもう一回、聞いてみたら？俺は別に沖縄に行けとも、やめろとも言わないよ。お前が決めることだから」

「うん、そうだよね」

「母さんは、もしかすると、沖縄行きをやめるなって言うかもしれないけど」

「なんで？」

「自分のせいで、お前の夢をあきらめさせたくないから、って思うだろうね」

「……」

「そうなんだ。俺も母さんだったら、そう言うだろうなって思ったから、母さんには相談ができないんだ。」

桃子ちゃんもそうなんだろうな。俺の夢をあきらめさせたくないとか、邪魔したくないとか、そんな気持ちがあって、沖縄に行くのをやめてって言えないでいるんじゃないのかな。

それ、もしかして、すごく我慢させてたり、苦しめてないのかな、俺。

大好きな、大事な人を苦しめてまで、行く価値のあることなんだろうか…。

って、またそこに行き着く。

父さんは、黙っている俺を見て、黙っていた。

「もし、父さんだったら、どうする？」

「俺？そうだな…」

父さんは、しばらく黙り込んだ。

「そうだな。大好きな人も、連れて行くかな」

「え？」

「くるみってことになるけどさ。俺、一時も離れていたくないもん」

「あ、そう」

なんだよ。思いつきり、のろけてくるとはね。

それにしても、一時も離れていたくない…か。

じいちゃんばあちゃんと、伊豆と江ノ島で離れた時があるって言ってたっけ。ずっと一緒だったから新鮮だったよって。

でも俺らはまだ、ずっと一緒ってわけじゃない。結婚もまだだし、離れたらどうなるのかっていう不安もある。

やばい。今日は多分、寝れないな。頭の中がぐるぐるだ。

案の定、寝れなかった。

もうすぐ、クリスマスだ。俺は、桃子ちゃんに指輪をあげようと思っていて、今日、父さんと一緒に見に行く予定だ。

なんで父さんとかって言うと、一人じゃまず、そんな店に入る勇

気がない。母さんじゃ、こつぱずかしくって、指輪をプレゼントするんだなんてことすら、言えそうもない。

父さんは去年も、一緒に買い物付き合ってくれたし、父さんも母さんにプレゼントを買うから、一緒に行こうってまた、誘ってくれた。

桃子ちゃんの指、細いけど、いったいどんなサイズのものを買ったらいんだろう。

父さんと、アクセサリーショップに行った。父さんは母さんに、ネックレスをあげるらしい。プラチナで、ちよつとダイヤの入ってるのを買ったとか。

俺はまず、プラチナだの、シルバーだのの差すらわからない。えつと？去年は確か、シルバーのネックレスをあげたんだっけ。

「どのような、指輪をお探しですか？」  
店員に聞かれた。うわ！まったくどれがいいかなんて、わかんない。

「えつと…」  
すごい困つてると、父さんが、

「17歳の女の子っていったら、どんなのを好みますか？」  
と聞いてくれた。ああ、やっぱり一緒に来てもらってよかった。

「あ、彼女にプレゼントですか？」

俺に店員が聞いてきた。

「え？いえ！妹です」

あれ？なんで俺、嘘言ってるんだろう。やばい。顔がほてる。隣で父さんは、ちよつとうつむいて微笑み、それから、  
「そうなんです。兄と父からプレゼントをしようって思ってた、一緒に嘘をついてくれた。」

「そうですね。可愛いのがいいと思いますよ。誕生石はなんですか？」

「た、誕生石？」

俺は、なんじゃそりやって、声が裏返ってしまった。

「誕生日はいつだっけ？」

父さんは、冷静にそう俺に聞いてきた。

「3月」

「では、アクアマリンですね。こちらですよ」

店員がガラスケースの中にある指輪をいくつか、見せてくれた。可愛い薄いブルーの石だ。その中でも、これ、似合いそうっつてのを見つけて、それにすることにした。

金の指輪に、ちょこつとブルーの石が乗っている。

「サイズはいくつですか？」

「へ？」

「指のサイズ」

「あ、あゝ。いくつかな」

「細そうだな。くるみは薬指で、8号だよ」

父さんが言った。

「細いですね」

店員が驚いていた。

「8号？じゃ、そのくらいかも。何しろ細いから」

「では、こちらになりますね」

店員が、出してくれた指輪を見た。わゝゝ！本当に細い。いや、でもこれくらいかもしれない。

「じゃ、これで」

「はい。わかりました。クリスマスプレゼントですか？」

「はい」

「では、お待ちくださいね」

「はい」

店員は、プレゼント用に、指輪を箱に入れ、リボンをかけた。

ドキドキ。俺はなぜだか、ドキドキしてきてしまった。あの指輪を桃子ちゃんにあげたとき、どうするかな。

父さんは母さんのネックレスを買い、二人で店を出た。

「は~~~~~」

出たとたんに、ため息が出た。

「なんだ？聖、どうしたんだ？」

父さんに聞かれた。

「緊張して……」

「あはは！指輪買うのに、緊張してたのか」

「うん、まあ」

「じゃ、結婚指輪だの、エンゲージリングを買う時には、いったいどうするの、お前」

「け、結婚?!」

「そうだよ。いつかは買うだろ？相手は誰になるかは、まだわからないとしても」

結婚指輪、エンゲージリング？相手は桃子ちゃんに決まってるじやんか！と思いながら、それをいつか、二人で買いに来るのかって想像した。

それから、結婚式。桃子ちゃんの真っ白なウェディングドレス。

わ~~~~。わ~~~~。絶対に綺麗だ。

あ、待てよ。白無垢ってのもいいな。そうしたら、俺は羽織袴？

しばらく、道を歩きながらぼくと妄想していると、

「聖！どこに行くんだよ！駅はこっち！」

と、父さんに声をかけられた。

「あ、ああ、わりい」

「何にやついてたんだよ？あ、そこにちょうど、カフェがあるね。」

「コーヒーでも飲んでから帰るか」

「え？ああ、うん」

俺たちは、俺の目の前にあった、カフェに入った。

「父さん、母さんと付き合ってた頃、母さんと結婚とかって考えた？」

「コーヒーを飲みながら、そう聞くと、

「いいや。考えるも何も、赤ちゃんすでにいたし、即結婚だったけど」

「あ！ああ、そっか。だよな、俺がもうお腹の中にいたんだもんね」  
「そういうことだな」

「父さんって、やっぱ、すげえ」

「なんで？」

「だって、その頃、21歳だったけ？そんな年齢で、父親になることも、結婚することも決意できるなんてさ」

「年齢じゃないさ。30になったって、決意できないやつもいるだろっし」

「そっか」

「俺は、くるみを愛してた。だから、結婚した。それだけだよ」

「……」

「すごいよ、やっぱ、そう言い切れるところがさ。」

「まあ、父さんも同じくらいの年齢で結婚してたし、俺が生まれてたし、だから、あまり抵抗はなかったかもね」

父さんは、そう続けた。

「だったら、俺も、そのくらいの年齢になったら、結婚考えるかな？」

「どうだろうね。ま、タイミングじゃないの？きつと一番いい時に結婚するようになってるさ」

「すべてが、必然？」

「そう、それ」

結婚か。今はまだ、妄想だ。でも、妄想するのは、もちろん桃子ちゃんとの結婚だ。桃子ちゃんがれいんどろっぷすで、ケーキ焼いたりしてて、俺の家に一緒に暮らしてるんだ。で、可愛い子どももいたりして。

くくくくく。それ、いいよな、絶対にいいよな。女の子なら、桃子ちゃん似！絶対に可愛いだろうな。

「だから、聖。そうにやついた顔で、ぼけつとするなよな。それ、かなり怖いぞ」

父さんにまた、言われた。

「まあ、どんな妄想してるんだかは、予想つくけどね」

父さんはそう言っと、にやって笑ってコーヒーを飲んだ。

ああ、俺ってば、桃子ちゃんのこと言えないじゃん。妄想しててどっかに行ってたよ。

でも、いつか実現するだろう未来。俺はそれを妄想するだけでも、胸を躍らせていた。

## 第18話 18歳の誕生日

クリスマスイブ、桃子ちゃんと山下公園に行った。大きなツリーがあつて、それを二人で眺め、そのまま腕を組んで歩いた。

そのうちに港が見える丘公園の方まで行き、ベンチに座った。

寒かったけど、桃子ちゃんが横にいるからか、俺はまったく寒さを感じなかった。

桃子ちゃんはそこで、俺にクリスマスプレゼントと、誕生日プレゼントをくれた。また手編みだ！セーターと帽子。すげえ、こんなの編めちゃうなんて。

俺はすぐに帽子をかぶってみた。あつたかった。

「……。すげ、嬉しいな。大変じゃなかった？これ」

「秋から編んでいたから、そうでもないよ」

「え？そんな前から？知らなかった」

「……へへ」

桃子ちゃんがちよつと照れて笑った。うわ！

「可愛い〜。桃子ちゃん!!」

俺は思い切り、桃子ちゃんを抱きしめた。

桃子ちゃんも俺の背中に腕を回してきた。ああ、感激。前だったら硬直したままだったり、手で押されたりしてたのに。

俺は桃子ちゃんにキスをした。

桃子ちゃんは目をあげると、色っぽい目で俺を見た。前は、赤くなつて目を伏せていたのにな。

その目に俺は、ドキッとする。俺は、桃子ちゃんを抱き寄せた。

「桃子ちゃん、最近、俺のこと手で押したり、突き放したりしない

ね

俺は思わず、聞いてみた。

「うん」

「どうして？」

「どうしてってなんで聞くの？そんなの当たり前だよ」

「え？」

「だって、もう心臓苦しくならないし」

「そうなの？」

「うん。それに、こうやって聖君にくっついてるの、すごく嬉しい」

「そ、そうなんだ」

うわ。めっちゃ嬉しい。

「聖君」

「ん？」

「大好き」

「うん。俺も」

嬉しくて、桃子ちゃんをまた抱きしめて、

「愛してるからね」

って桃子ちゃんの耳元で言った。

あゝ。やべゝ。俺、すげえ幸せだ。こんな幸せでいいの？っていうくらい幸せだ。

腕の中にいる桃子ちゃんは、あったかくって、可愛くって、柔らかくって、小さくって。すごい愛しい。ぎゅう……。俺は、ずっとこのままでいいかもって思いながら、桃子ちゃんを抱きしめていた。

すると、どこからか、やたらと色っぽい女の人の声や、息遣いが聞こえてきた。

げ！もしかして、この声って…。

「桃子ちゃん」

「え？」

「なんか、ここ、やばいかもね」

「え？」

「カップル、けっこういるかも」

「うん」

「それも、茂みの中とか。寒いのに……」

「う、うん」

俺は、桃子ちゃんを抱きしめていた腕を桃子ちゃんから離して、

「そろそろ、行く？」

と聞いて立ち上がった。

桃子ちゃんも慌てて立ち上がり、俺らはさっさと足早にその場を離れた。

こんな寒い冬でも、外でいちやついたりするんだな。

あ、待てよ。俺らもそんなカップルのうちの一组か。あのままだったら、俺もやばかったかもしれないし。

俺らは、そのまま洋館のレストランに入り、夕飯を食べることにした。

そこで、俺は桃子ちゃんにクリスマスプレゼントを渡した。桃子ちゃんは赤くなりながら、嬉しそうに箱を開けた。

「指輪……」

桃子ちゃんの目が、大きくなった。びっくりしたみたいだ。

「サイズ合うかな？」

そう聞いてみると、桃子ちゃんは指輪を取り出し、はめようとした。

え？なんで右手？

「左でしょ？左の薬指」

桃子ちゃんは俺がそう言っと、左手の薬指に指輪をはめた。あ、ぴったりだ。

「これ、アクアマリン？」

桃子ちゃんが聞いてきた。さすが、石の名前知ってるんだ。

「うん、誕生石でしょ？」

なんつって、知ったかぶり。俺もあの店で初めて知ったのにさ。

「うん…。いいの？高くなかった？」

桃子ちゃんが少し、恐縮した感じで聞いてきた。

「そんなでもないよ。そんなに高いのは買えないし。次に買う時は、給料3か月分とかいう、そんな指輪かな」

なんつって。あ、桃子ちゃんが真っ赤になった。わ、俺も赤いかも。顔が熱い。

「本当に、左の薬指にしても、いいの？」

はあ？

「何？それ…。また、そういうこと桃子ちゃん言うんだから。ちゃんと、はめててね。そうしたら、周りの男が、もう彼氏がいるんだってわかって、近寄ってこなくなるでしょ？」

「ありがとう。すごく嬉しい」

そう言った桃子ちゃんの鼻が、みるみるうちに赤くなり、目が出るんできていた。

「ブツ！鼻真っ赤だ。今、泣くのこらえてる？」

「うん」

「あはは。可愛いよね、ほんと」

本当に可愛いよ。付き合ったあの頃から、全然変わってないよね。

レストランから出て、元町を歩いた。それから、桃子ちゃんの家まで送っていった。

その間に俺は、今、沖縄に行くのをどうしようか悩んでるんだってことを、桃子ちゃんに話していた。

桃子ちゃんは聞くだけで、何も言わなかった。

俺も、桃子ちゃんに、沖縄に行つてほしくない？本当はどう思ってる？って聞かなかった。

聞いたところで、桃子ちゃんは言うんだろうか。行つてほしくないとか、寂しいとか。俺に遠慮して、困ってしまうんじゃないだろうか。そんな気がして聞けなかった。

翌日はクリスマス会。れいんどろっぷすは貸切にして、店でクリスマス会を開く。これは俺が1歳の頃からずっと恒例だ。

その会は俺の誕生日会でもある。

昔はまだ、れいんどろっぷすに、ばあちゃんもじいちゃんも、父さんの妹の春香さんもいた。

俺にとつての、ひいばあちゃん、ひいじいちゃんも会に来ていたし、母さんの方のばあちゃんや、じいちゃんも来ていたし、そりゃもう、すごい人数でにぎやかなクリスマス会だった。

もちろん、1歳の頃のなんて、俺は覚えていない。覚えてるのは、確か、4歳頃からかな。

一番、はしゃぐのはじいちゃん。春香さんがケーキを焼いてくれた。ばあちゃんは静かに嬉しそうに見っていて、父さんは俺を嬉しそうに抱っこしてくれて、その横で、涙ためて俺らを見ていた母さん。

みんなが俺に、誕生日のプレゼントをくれた。それとは別に、サ

ンタさんからも毎年プレゼントをもらってた。あれ、父さんだったんだよな。

じいちゃんとはあちゃん、春香さんが伊豆に行ってから、なかなかみんなでクリスマス会をすることもなくなつた。だけど、その代わりといつちちゃんだけど、俺や杏樹の友達を呼んで、クリスマス会をするようになった。

葉一は中学の頃から来てる。ほんと、長い間友達してるよな。

俺も葉一も彼女なんかいなくって、いつも母さんに、あんたらは色気がないのねって言われてた。

でも、去年から違う。俺にはしっかりと彼女がいて、俺の誕生日を祝ってくれる。

ああ、これもずっとずっと、続くんだろうな。そのうちに、俺らの子どももできて、そうしたら、父さんと母さんはじいちゃんとはあちゃんになるんだ。

やべ！また妄想だ！今は、勉強中だろ！俺。塾に来てるときには、勉強に集中しろよ。なんつって、たまに勉強してても、桃子ちゃんの顔がちらちらと浮かんじやって、手につかないことも最近多いんだ。だけどさ。

塾が終わり、俺は大ダッシュで、家に帰った。

店に入ると、キッチンにはもう桃子ちゃんがいた。わ！ピンクのエプロンしてる。すげ、可愛い。あれだ、あれ。若奥さんって感じだ。

「俺も手伝うよ」

そう言つと、母さんがあれこれ指示を出してきた。それを俺は、

桃子ちゃんの横でこなしでいった。

桃子ちゃんは、ケーキを作っている。あれ、俺の誕生日ケーキでもあるんだよな。

「桃子ちゃん、それ、泡立てるやつ、俺やるよ」

母さんから頼まれたものはすべて終わり、俺は桃子ちゃんの手伝いをすることにした。

「うん」

桃子ちゃんから、ボールを受け取り、泡だて器で泡立て始めた。しばらく桃子ちゃんが、ぼけっと俺の手を見ていた。

「すごいね、聖君」

「え？」

「手際がいいね。なんでもできちゃうし」

「ああ、こういうのもずっと、手伝わされてきたから」

「へーーーー」

へーーーーと言う桃子ちゃん目、なんていうか、尊敬のまなざしで見てるよ。いや、こんなことないと思っただけ。真剣にホイップクリームをケーキに塗ったり、フルーツを並べている桃子ちゃんの方こそ、すごいと俺は思った。もう、パテシエの顔してるよ。

それから、葉一、菜摘、ひまわりちゃん、杏樹の友達、そして基樹がやってきた。

みんなで乾杯をして、食べたすと、しばらくして、桐太もやってきた。

実はあの、告白の日以来、ちよくちよくれいんどろっぷすに来るし、俺にメールや電話をしてきていた。

で、クリスマスイブに俺の誕生日のお祝いをしたいって言うて来たから、その日は桃子ちゃんと二人でデートだから、クリスマスの日に店に来いよって、誘ったんだ。

葉一も菜摘も驚いていたけど、そういうえば、桐太が、俺の友達になつたって話は二人にはしていなかったっけな。

俺のことを恋愛感情つきで好きだったのは、まあ、ちょっと横に置いて。桐太は、友人として、俺は受け入れることにした。

話してみると、けっこういいやつ。まあ、あの俺の彼女にちょっかいを出すって事件のある前までは、仲良かったしね。あのことだつて、結局は俺のことを思ってたことだったわけだし。

クリスマス会は、楽しく過ぎていった。

駅まで俺はみんなを送っていった。葉一はどうやら、菜摘の家まで、送っていくみたいだったけど、俺は、店の片付けもあるし、桃子ちゃんとひまわりちゃんは、桐太に送ってもらおうと思っていた。

そろそろ新百合だなんて時間に、メールをして、桐太に二人を家まで送っていったと、そう頼んだ。桐太は、しょうがねえなって返事をしてきた。

そうくると思っていた。あいつ、桃子ちゃんに手を出したことも、傷つけたことも、どうやら、すごく後悔して、自分を責めていたようだったし。

少しは、その罪悪感が、消えたらいいんだけどな。って、すっかり許してる俺も俺だけど。だけど、あのことがあったから、俺と桃子ちゃんは結ばれたんだもんな。

あんなことがなかったら、今でも俺、桃子ちゃんのことおあずけくらって、もんもんとしてたかもしれないしさ。

そう思うと、やっぱり父さんが言っていたように、すべてが必然だようになって思うんだよ。うん。

ただ、桃子ちゃんもしかしたら、桐太を許せないかもしれないし。だからこそ、桐太が家まで送っていったら、少しは桃子ちゃんも、気を許すかもしれないかな、なんてちよつと期待したりして。

俺、そういえば、もう18だ。車の免許も取れるし、結婚だって出来る年だ。

そんな年齢になったんだな。  
なんて、ちよつと感慨深い。

まだ、高校生だから、結婚なんて考えられないけど、でも、いつかするんだとしたら、桃子ちゃんと、それだけは、決めている。

そして今日の、ピンクのエプロンをつけた桃子ちゃんのことを思い出し、新婚の俺らってどうだろうかって妄想したりするんだ。  
二人で暮らすってのもいいかもな。なんてさ。あほだよな。

そうだ。そんなことよりも、すぐ未来のことを考えなくちゃ。沖縄行き、どうするんだよ。俺…。

店の片付けも終わり、俺の部屋に入り、机の上に参考書だけを広げ、そんなことを俺は、考えていた。

## 第19話 桃子ちゃんの本音

俺の家族は、俺だけ残して、年末伊豆に行った。俺は塾や勉強があるから、2日に伊豆に一人で行くことにした。

ってことで、大晦日は桃子ちゃんを家に呼び、一緒に初日の出を見ることにした。

家には誰もいないということを告げて、桃子ちゃんに家に来る？って聞いてみた。内心ドキドキだった。桃子ちゃん、それは無理だって言ってくるんじゃないかって。

でも、桃子ちゃんの返事はただ、「うん」それだけだった。

伊豆に行く前の日の夜、母さんが部屋に来た。

「ちよつといい？聖」

「うん」

俺は机の椅子に腰掛けていた。母さんはベッドに腰掛けて、部屋を見回してから、

「爽太から聞いたんだけど、沖縄に行くのを悩んでるの？」と聞いてきた。

ああ、父さん、母さんに話しちゃったか。内緒にしておいてって言うっておけばよかったな。実は母さんに聞かれたくないことは、父さんにちゃんと口止めするようにしている。そうしたら、父さんはちゃんとそれを守ってくれるんだけど、今回は内緒にしておいてって、お願いしなかったんだよね。

「悩んでるって言うか、うん。まあ……」

「店のことなら、大丈夫だから。あなたはそんな心配しないでもいいからね」

「え？」

「そんなことであなたの夢を、あきらめるようなことしないでね」  
そんなことって……。俺にとっちゃ重要なことだよ。

俺が黙っていると、母さんは、

「母さん、あなたの負担にはなりたくないのよ」  
と、ぼそってつぶやいた。

負担？負担って何？

「あなたには、やりたいことをしてほしいし、好きなことをしてほしいし」

「……うん。それはわかってるよ」

俺がそう言っていると、母さんは、

「ほんとね？わかってるのね？」  
と、聞いてきた。

「わかってるよ。俺が1番したいことを、ちゃんと選ぶからさ」  
「そう」

母さんは安心したようにため息をつき、それから部屋を出て行った。

俺のしたいことか。それ、そこなんだよ。それがイコール沖縄の大学に行くことじゃないって、その辺に最近気がついちゃったんだ。俺の夢。もう一回ちゃんと、考えたほうがよさそうだ。

家族が伊豆に行き、大晦日の日がやってきた。

朝早くから起きて、掃除をした。家や店の大掃除は終わってたけど、俺の部屋はまだだった。なんやかんやと勉強に追われ、机の上も床も、ノートや参考書が山積みになり、そのままになっていた。

桃子ちゃんが来るし、もしかして今日は、俺の部屋に泊るかもし

れないから、俺は部屋を綺麗に片付けた。

それから、夕飯も一緒に食べるつもりだから、ハンバーグを作った。

ああ。俺、めっちゃ張り切ってるよな。

昼、駅で待ち合わせをして、桃子ちゃんと駅の近くのファミレスに行った。

海に見えるファミレスだ。初めてのデートでも、行っただけな。昼を食べ終え、家に二人で向かった。

俺はすっかり有頂天になっていた。なにしろ、誰もいないのに桃子ちゃんが来てくれたってことは、もう、あれだよな？そういう気があるってことだよなって、勝手にそう思い込んで。

だけど、俺の部屋に入って、上着を桃子ちゃんが脱ぐと、あれれ？もしかして俺の、勘違いだったかなって、そこで気がついた。

桃子ちゃんの今日の服、セーターにジーンズ。思い切り防寒着。

そりゃ、初日の出見に行くなら、あつたかくしてこないとならないだろうけど、それで、この服を選んだのか、それとも、もしかして今日はNOなんだって、合図なのか、俺は悩んでしまった。

何か、昔読んだ雑誌に書いてあったんだよ。女の子がスカートならOKで、ジーンズじゃ、NOの合図とかなんとか。

まだ、中学の頃だ。彼女もいなくて、ただただ、へー、そんなもんなんだって思いながら、流して読んでたと思う。

でも、いきなりそれを思い出してしまった。桃子ちゃんの格好は、まさにNO？

「……」

それまで、その気になって、部屋をあっためたり、服脱いでも寒

くないかなんて気にしてたのが、一気に恥ずかしくなった。

俺一人で舞いあがってる？もしま…。桃子ちゃん、今思い切り、困ってる？

「……。もしかして、駄目なの？」

「え？」

「いや、その。だからさ。今日は桃子ちゃん、そんな気まったくなかつたりする？」

桃子ちゃんは、顔を赤くしてうつむいた。

うわ。やつぱり？俺の早合点だった？すげえ、ばかじゃん、俺。

「いや、いいんだ。それでも。俺、勝手に家に誰もいないし、ちょっとチャンスかなって思ってただけで、その…。桃子ちゃんも、家に誰もいないのに、来てくれて、そういうのオッケーしてくれるのかななんて、勝手に思い込んでただけで…。駄目ならいいんだ。うん」

桃子ちゃんはまだ黙っていた。

「ごめん、ほんと、いいんだ。ほんと、そんな気がないならしないで。こうやって、二人でいるだけで、それでいいからさ」

やばい。呆れてたりして？それとも、どうしようかって今、桃子ちゃん考えに考えてる？

困らせたかな。

「あ、そうだ。なんかDVD観る？3本くらい、映画借りたんだよ。俺は慌てて、そう言って、一階のリビングに行こうとした。でも、桃子ちゃんに話があると引き止められた。

話？話って何？

もしかして今日来たのは、話が目的…とか？っていうか、何？改

まった話つてのは…。

ドキドキしながら、また俺の椅子に座りなおした。桃子ちゃんもベッドに、深く腰掛けなおしていた。

「話つて何？」

俺が聞くと、

「うん。昨日、桐太君に、聖君は大学沖縄に行こうとしてるの、知ってるかって聞かれて」

と桃子ちゃんは、真顔でそう言った。ああ、沖縄の大学のことが。

「今、聖君がどうしようか悩んでるって、そんな話も桐太がしてきた」

「…うん。あいつにそんなようなこと、この前電話で話したけど…それで？」

「それでね…。桃子は聖君が沖縄に行ってもいいのかって」

「え？」

「大学には女の人もいるし、離れてていいのかって」

「…それ、俺が浮気するかもしれないとか、そういうこと？」

「それもあるけど、あと、1年会えなくってもいいのかとか、きつと、そういうこと」

「……」

桐太がそんなことを桃子ちゃんに？

「なんであいつ、そんなこと桃子ちゃんに？」

「わからないけど…。いきなり聞かれて」

「ふうん」

なんだって、桃子ちゃんにそんなこと聞くんだ？

「桃子は本当はどう思ってるのかって聞かれて」

「桐太から？」

「うん」

って、何？呼び捨てにしてるの？あいつ。

「桐太って、桃子ちゃんのこと呼び捨てにしてんの？」

「あ、そういえば、呼び捨てになってた」

「なんで？俺だってちゃんづけなのに、なんであいつが！」

ほんと、仲良くなりすぎじゃない？

「聖君はなぜ、ずっとちゃんづけなの？」

「え？」

「私を呼ぶ時に」

「桃子ちゃんって？」

「うん」

「だって、そっちの方が可愛いから」

桃子ちゃんが、首をかしげた。

「桃子ちゃんって、桃子ちゃんって感じでしょ？」

そう言つとさらに、首をかしげ、わからないって顔をした。

「あれ？話がずれてるね。えっと……。俺が沖縄に行く話だよね」

「うん」

「桃子ちゃんの気持ちって…、本音ってこと？」

「うん」

「それは俺もちゃんと聞きたいよ」

「え？」

「もしかして、本当は行って欲しくないのに我慢してるんじゃないかって、それは思ってた」

「……」

「俺の夢を壊したくないからって、我慢してるんだろうなって」

桃子ちゃんの顔色が変わった。うつむいて、黙り込んでしまった。

「不安？俺が浮気するかもとか？」

「うつん。そういうことよりも、ずっと会えなくって、寂しくって、私耐えられるかなって……」

耐えられるか……か。俺とおんなじなんだな。

「でも、そんなの私のわがままだし」

わがまま？それが？

「……ごめんね……」

「何が？」

「わがままばかりだし、甘えてばかりだし」

「誰が？」

「私が……」

「桃子ちゃん、甘えないし、わがまま言わないじゃん」

ほんと、もう少しわがまま言ったり甘えてほしいくらいなのに。

「え？」

「全然言ってるよ。俺ばかりが言ってるよ」

「そんなことない。私ずっと聖君に甘えてばかりだもん。海でも、プールでもそうだったし、それにずっと聖君に我慢させてたし……」

「それは、別に俺に桃子ちゃんが甘えてたとか、そういうことじゃないじゃん。海やプールでも俺の方が好き勝手してたしさ」

「……。私、いつも足手まといになってたよ」

「足手まとい？そんなこと俺、思ったこと一回もないけど」

「だけど……。聖君のこと困らせてばかりだったよね。きっと、去年の夏から」

「俺が困った？」

「花火大会ではくれた時とか、それにカラオケボックスで、葉君と聖君の話を聞いちゃった時とか」

それは、桃子ちゃんのせいじゃなくって、どっちかっていうと、俺の不注意……。なのに、桃子ちゃんは、自分のせいだって思ったの？

「この前も、聖君勉強で大変なのに、お店に果林さん連れてきたり……」

それでも、桃子ちゃんのせいじゃないのにな。

「他には？」

「聖君の家に来ると、お父さんに送ってもらったりして、みんな大変なのに、申し訳ないことしてるなって……」

「他は？」

「ひまわり、泊まりに来て、迷惑かけた」

「他は？」

「えっと。うちのお父さんが釣りにさそったりして、聖君、勉強あったのに……」

なんだ。全部迷惑だなんて思っていないことだし、俺、困ってもいいのに。

「それから？」

「えっと……。えっとね……」

「もうおしまい？」

「うん」

「そっか。わかった」

桃子ちゃんは、なんだか全部、自分でしょいこんでいたんだな。自分が困らせてるとか、迷惑かけてるとか、そう思い込んで……。もしかしてそうやって、自分の思いをしまいこんで、俺に黙ってたこといっぱいあったんじゃないのかな……。

じゃあ、沖縄行きのことだって、かなり悩んだり、一人で悲しん

だりしてたんじゃ…？

「じゃ、沖縄にもし俺が春から行くってことになったら、桃子ちゃんどうする？」

「え？」

「今、どう思う？俺、沖縄に行くよって言ったら」

「…どうって…」

「本音ね、本音」

桃子ちゃんは、小さく深呼吸をして話し出した。

「離れるの、嫌だっと思う」

「なんで嫌？」

「会えなくなるから」

「寂しい？」

「うん」

「他には？」

「……やっぱり、不安」

「何が？」

「大学にも女の子のいるだろうし、他の人に興味ないって言われても、もし、素敵な人が聖君にいい寄ってきたらって思ったら、すごく不安」

だから、まじで桃子ちゃん以外なんて俺…。いや、桃子ちゃんの気持ちをちゃんと聞くのが、先決だよな。

「他には？」

「えっと。他…」

桃子ちゃんは黙った。黙って、自分の気持ちと向き合ってるようだ。

「…あのね」

「うん」

意を決したのか、桃子ちゃんは前を向いたまま、話し出した。

「私、すごくすごく会えなくなるのが寂しいの。会いたい時、今ならこうやって会えるけど、沖縄に行ったらそうはいかないでしょ。どうやって耐えようかって、今から思うことがある」

「うん」

「聖君は、寂しいとかって思わないのかなって、そんなことも思ってた」

俺？んなの、寂しいに決まってる。ああ、でも俺、そういうことちゃんと、桃子ちゃんに言ってたかな。

「他にもなんかある？」

「ううん」

「行って欲しくない……って言いたくても、我慢してた？」

「うん。ごめんね。それが本音。私きれいごとばかり言ってたかもしれない」

「きれいごと？」

「きつと、聖君にできた彼女って思われたかったのかもしれない。それに、そんなこと言うと、聖君を困らせるだろうしとか、聖君に重たく感じて欲しくないとか、そんなことも思ってた」

……。それ、思い切り、桃子ちゃんの本音なんだ。そっか。ちゃんとそれを俺に、話してくれたんだ。

「そうか……。今のが桃子ちゃんの本音だよね？」

「うん」

「わかった」

「……」

じゃ、俺もちゃんとその本音に応えなくっちゃ。桃子ちゃんがち

やんと心のままを、伝えてくれたんだから。

## 第20話 俺の本音

俺は桃子ちゃんの本音を聞いて、決心がついた。自分でもびっくりするくらい、きっぱりと決めることができた。

「沖縄、やめた」

そう言つと、桃子ちゃんはものすごく驚いていた。

「迷つてたし、どうしようかって悩んでいたけど」

「でででも、もうちょっと考えて…」

「考えた結果だよ」

「……でも、突然すぎる」

「突然じゃないんだけど。ずっと悩んでたし」

「……」

桃子ちゃんは目を点にしたまま、固まっていた。

「俺、夢も大事だと思うけど、1番は家族なんだよね」

「……」

「俺の夢を叶えることで、家族が大変な思いをするのは、嫌なんだ。それに、本当に俺、考えたんだ。沖縄の大学に行かないと、お前は夢を叶えられないのかって、自分に聞いてさ」

「うん」

桃子ちゃんは真剣に話を聞いてくれた。

「そんなことないんだ。ただ、沖縄にあこがれて、いつも潜りたい時に潜れて、なんかいいな〜、そういうの…。くらいの軽い気持ち」

「……」

「でも、なんか執着になつてた」

「執着？」

「沖縄行かないと、俺の夢は叶わない、みたいなそんな頑固な夢になってた」

「……」

「それで、母さんや父さんが大変な思いをしたり、桃子ちゃんに我慢させるの、なんか違うよなって」

「でも……」

桃子ちゃんの顔、困ってる。

「行つて欲しくないんでしょ？」

「うん」

「じゃ、素直に喜んでね」

「……」

まだ、桃子ちゃんは困った顔をしていた。

「……。えっと、まだ本音言っていないか、俺」

「え？」

「俺も、桃子ちゃんに会えなくなつて、大丈夫かなって思ってた」

「え？」

「一分一秒でも長く、会っていたいのに、今なんて、夢にも出てくるし、それなのに1年も離れて、俺、耐えられるのかなって思っていたよ」

「ほんと？」

なんか、こういうこと言つの照れるな。

「だけど、沖縄行きは俺から言い出したことだし、なんか桃子ちゃん、俺の夢を応援してるみたいない感じだったし、言えなかったんだよね」

「……」

「ただ、桃子ちゃんが高校卒業して沖縄に来たら、ぜっっつたいに

一緒に住んでやるって、意気込んでたけど」

「い、一緒に住む?!」

あれ?なんでそんなにびっくりしてるの?

「あれ?桃子ちゃんはそんな気、まったくなかったの?」

桃子ちゃんは真っ赤になって、こくんとうなづいた。

「あれ?そのつもりかなって思ってたよ」

「……」

なんだ。そういうこと考えてたの、俺だけなんだ。

あ…。桃子ちゃん、赤くなりながら意識がどっか飛んでってる。  
今、もしかして同棲してるところでも、妄想してる?

「桃子ちゃん、戻ってきて、話の途中だよ」

「え?」

「また、どっかいったたでしょ?一人の妄想の世界?俺と同棲して  
るところでも、妄想してた?」

「う、うん」

やっぱりね。

「で、俺の本音だっけね」

さて、なんて言おうかな。やっぱり、思いをそのままだよな…。

「桃子ちゃんと、俺も離れたくないな」

こっいつの、改まって言っのって、ほんと照れる。桃子ちゃん、  
よく本音、話してくれたよな。

「あ、そういえばさっきの、甘えてるとか、わがままだとか、足を  
引っ張ってるとか、困らせてるとか、あれ、ぜ〜んぶ、桃子ちゃん  
の思い込みだから」

俺は、半分照れ隠しでそう言った。

「え?」

「俺、そんなこと一回も思ったことないよ。あ。一回くらいあるかな」

あ、照れちゃってて、そんなこと言っちゃったよ。ま、いつか。

「え？一回はあるの？何？いつ？」

「桃子ちゃんが、胸さわったら、嫌だつて抵抗した時には、ちょっと困っちゃった、俺」

桃子ちゃんが、真っ赤になってうつむいた。

「あとはない！」

あ、待てよ。あの時とか。

「あ、もう一回あるかな」

「いつ？」

桃子ちゃんが、ちょっとこわごわ聞いてきた。

「子供っぽい下着だからって、脱がされるのを抵抗した時。あれも困った」

そう言うつと、桃子ちゃんはますます赤くなった。

えええい。こうなつたら言っちゃおう。今思ってることも。

「ごめん、桃子ちゃん。俺、嘘をついていました。実は今もすごく困っています」

「ええ？なんで？」

桃子ちゃんは焦った顔で俺を見た。

「セーターとジーンズ。今日はいいのか、駄目なのか、その辺がわかんなくって、困ってます」

「う…」

桃子ちゃんが固まった。でも、俺も引き下がらないよ。

「できれば、本音でお願いします。どっち？」

「どっちって？」

「今日はOK?それともNO?」  
聞いてもいいよね?っていうかき、教えてくれないとわからないもん、俺。

「どうして、ジーンズとセーターだと、駄目なんだって思ったの?」  
お、逆に聞いてきたぞ。

「…なんかの雑誌に載ってた」

「え?なんて?」

「ジーンズ履いてきたら、NOの合図」

「へ?」

「スカートならOKとかなんとか」

あ、黙っちゃった、桃子ちゃん。

「そうなの?それとも違うの?」

「わかんないけど、私は違う…」

「え?違うって?」

「その…、えつと…」

あ、困っちゃった、桃子ちゃん。

「スカートだね、夏ならいいけど、この季節、素肌は寒いかなって。友達と出かける時は、タイツや、スカートの下にスパッツを履くの」

あ、一気に話し出した。

「え?うん。そうなの?」

「そうすると、あったかいし。だけど、タイツもスパッツも、ぬ…」  
ぬ?

あ、あれ、うつむいちゃった。

「ぬ?」

俺が聞くと、顔を上げて真っ赤になって俺を一回見てから、また

うつむいて桃子ちゃんは、話し出した。

「脱がせにくい…かな…って思ってた」

「え?!」

脱がせにくい…ってことは、

「俺がつてこと?」

「うん」

うわ!そ、そんなこと考えてくれちゃったの?

「そういうこと桃子ちゃん、考えたの?」

「う…うん。だから、ブラウスもやめたの」

え?ブラウスも?

「ボタン、外すの大変だろうから」

「だから、セーター?」

「うん」

桃子ちゃんは真っ赤になって、思い切り下を向いた。

「…じゃ、駄目ってことじゃなくって、その逆で…」

「うん」

うわわ。そうだったんだ。

「そうなんだ」

あ、俺も真っ赤だ。顔熱い!

「じゃ、えつと…。今日は、その…」

その気で、来てくれてるってことは、

「子供っぽい下着じゃないんだよね?」

「なななな、なんで?」

「だって、それって、俺が服を脱がしちゃってもいいってことでしょ?」

あ、桃子ちゃん、首まで真っ赤になっちゃった。でも、小さくうなづいた。わ…。そうなんだ。

「桃子ちゃん、ちゃんとそういう気で来てくれてたんだ」

俺は桃子ちゃんの横に座りながら、そう言った。

「そっか。なんだ。俺が勝手に駄目なのかなとか、そんなことを考えちゃっただけか」

「う、うん。ごめんね」

「え？なんで？」

なんで謝ったの？

「ややこしい格好できちゃって」

「いや、俺が勝手にいろいろと考え込んだだけだから」

桃子ちゃんってば、そんなことで謝ってくれるなんて…。

「えっと…」

やっぱ、あれかな。桃子ちゃん、明るいと嫌かな。

「う、うん…」

桃子ちゃんは緊張した感じで聞き返した。

「電気は消した方が…」

と俺が言いかけると、桃子ちゃんは思い切りうなづいた。

俺は立ち上がり電気を消した。でも、外が明るいから、あまり部屋が暗くならなかった。

「やっぱり、あまり電気を消しても変わらなかった。今日、天気いいから」

桃子ちゃんは黙っている。

「どうする？」

「え？」

「カーテン閉めれば、ちょっと暗くなるかも」

桃子ちゃんは、うんうんとうなづいた。

カーテンを閉めた。部屋が暗くなった。それから俺は、桃子ちゃんの隣に座るとすぐに、桃子ちゃんにキスをした。

桃子ちゃんはいきなり体がぐにやっけて、俺はそのまま桃子ちゃんを押し倒してしまった。桃子ちゃんを見たら、色っぽい目で俺を見ている。

あ。駄目だ。もう、止められないぞ、俺。

桃子ちゃんにキスをして、髪をなでて、それから、

「桃子ちゃん、大好きだよ」

と耳元でそつと言つと、桃子ちゃんがくすぐったそうな顔をする。くくく。その顔も可愛い。

どんだけ、俺桃子ちゃんが好きなんだろうとか、どうしてこうも可愛いんだろうとか、そんなことが頭によぎりながら、桃子ちゃんの服を脱がせていった。

それにしても、これだけ抵抗がないと、なんかかえって、どぎまぎする。それに、桃子ちゃんが言うように、確かに、今日の服脱がせやすい。と、思う。なにしろ、この前は桃子ちゃんが自分で脱いだから、比較できないけどさ。

やべくくくく。心臓が高鳴ってる。嬉しすぎて、可愛すぎて、桃子ちゃんにキスしまくってるよ。なんでこうも、なんでこうも、なんでこうも、可愛いんだよくくくくくく!!

俺の本音。桃子ちゃんに完全に、まいってます。

惚れまくってます。アウトです。ずっとこうして、抱き合っていたいです。

つてのは、さすがに言えなかった。そんなのめっちゃ恥ずかしくつて、言えないだろ。やっぱり…。



## 第21話 嬉しすぎる！

俺と桃子ちゃんは夕飯を食べ、リビングに移り紅白を観た。

夕飯の準備を一緒にしたり、一緒に食べたり、片付けたり、そしてリビングでまったりとテレビを観たり、俺はどれもこれもが嬉しくって、めっちゃ幸せを感じていた。

もし、桃子ちゃんと一緒に住んだら、こんな毎日なんだ。すげえ！

あ、そうだ。お風呂！

「お風呂入るよね。今、準備してくるね」

俺はそそくさと風呂場に行って、風呂の用意をした。今日、一緒に入れないかな…なんて妄想しながら。

リビングに戻り、

「一緒に入る？」

と桃子ちゃんに聞くと、桃子ちゃんは真っ赤になってぐるぐると首を横に振った。

なんだ。やっぱり、無理だったか。ちょっとだけ、桃子ちゃんが真っ赤になってくくんとうなづくところまで、妄想してたのにな。

桃子ちゃんが先にお風呂に入った。俺はソファに座り、紅白を観ていた。

去年は、家族と観ていたっけな。

は~~~~。やべ。俺、幸せだ。さっきからテレビの画面を観てるのに、まったく目に入らない。それにきつと、ずっとにやけてるよ。

桃子ちゃんがお風呂から出てきた。ほっぺがピンクに染まり、濡れた髪が色っぽい。

俺の隣に座ると、ほんのりとシャンプーの匂いがした。ドキドキ

した。

俺も風呂に入りに入った。風呂場のドアを開けると、さっきまで桃子ちゃんから香っていたシャンプーの香りがした。

それだけでも、ドキドキしてる。

風呂から上がって、リビングに行くと、すっかり髪を乾かし終えた桃子ちゃんがいた。俺も髪を乾かして、明日も早いしもう寝ようって、寝ることにした。

ベッドはシングル。狭いけど、桃子ちゃんとくっついて寝ることにした。

桃子ちゃんは、俺の胸に顔をうずめてきた。くくくく。可愛い。そしてしばらくすると、鼻をすする音がした。

え？あれ？

「桃子ちゃん？泣いてる？」

「嬉し泣きだから」

「うん…」

可愛い。嬉し泣きしちゃってたんだ。桃子ちゃんにキスをした。

ああ、朝まで、桃子ちゃんが隣にいるんだ。

「こうやって、桃子ちゃんと寝れるなんて、夢みたいだね」

俺がそう言っていると、桃子ちゃんは、もっと俺に顔をうずめてきた。

あったかくって、可愛くって、いい匂いがする。俺は思い切り幸せを感じながら、いつの間にか眠っていた。

5時、目覚ましが鳴った。目を開けると、桃子ちゃんの可愛い寝顔が目に入ってきた。

わ！あ、そっか。昨日隣で寝たんだ。

桃子ちゃんは、すーすー寝息を立てて、静かに寝てる。目覚まし

を止めた。桃子ちゃんは目覚ましの音で、目が覚めなかったみたいだ。

桃子ちゃんのことをしばらく見ていた。不思議だな。すごく心が癒される。ものすごく優しい気持ちになれる。

俺、女の子と一緒にいてこんなに癒されたことってないな。

中学の時、初めて付き合った子は、一緒にいても何を話していいかもわからず、特に何も話さずに、学校から帰ってきたことがあった。家に着くと、ものすごく疲れてたことを覚えてる。

一緒にいてもつまらない。聖君、何を考えてるかわからないって言われたっけな。

そのあと、中3で、付き合いまでいかなかったけど、気になる子ができる。委員会と一緒に、とにかく元気のいい子だった。話しやすかったし、一緒にいても楽しかったけど、二人で偶然一緒に帰ることになったとき、やっぱり、話に困っちゃったっけ。

他の誰かがいて、みんなでわいわいする分にはいいんだけど、二人きりになると何を話していいか、わからなくなるんだ。

それから、その子のことも、変に意識してしまって、あまり話せずに、卒業しちゃった。で、変な話だよな。高校入ってしばらくして、あの子、お前のこと好きだったみたいだよって、友達に言われた。俺のほうで、告白も何もなかったから、向こうも、勝手に諦めちゃったらしい。

そのあとに好きになった子は、高校1年の時。同じクラスの子で、すごく元気で明るい子だった。だけど、その子はあまり男子と話すことがなくて、俺も女子と話をしなかったから、結局1年間話を特にすることもなく、終わってしまった。

いや、チャンスはあった。隣の席になったこともあった。だけど、いったい何を話していいかもわからず、ぎくしゃくしただけで、席替えになり、話す機会もなくなってしまった。

さんざん、葉一に馬鹿じゃないかって言われた。そういう葉一だって、好きな子がいても、意思表示ができないくせにさ。似たもの通しだよな。

そして、高校2年、夏、菜摘を好きになった。またもや、元氣はつらつな子。今度こそ、告白もするし、彼女にするぞってかなりの意気込みだった。それを基樹にも葉一にも、宣言したほどだ。

でもやっぱり、同じ。話をしようと思っても、話ができず、基樹と蘭ちゃんとバカやって終わる、みたいなの……。

そうなんだよな。俺って、女の子が苦手なのかなって自分でも思ってた。男子とバカしてる方が楽しいし楽し。好きな子ができて、何も話せなくなってたし、もし付き合ってもまた、つまらないって言われて、終わるんじゃないかって、そんなことも思ってたし。

なのにな……。桃子ちゃんは違ってたんだ。

ちよつと話すだけで、真っ赤になってた。すげえ、可愛いって思った。話しかけると、必死で話してるのがわかった。

そんなリアクションが可愛くって、それをまた見たくて、話しかけたっけな。

もっと桃子ちゃんのことを知りたいって思った。

知れば知るほど、好きになった。可愛くって、どんな表情も見逃したくないって思った。

話しづらいつて思ったことは、一回もないし、何を話していいかわからないってことも、一回もない。不思議だよな。

それに、一緒にいて、安心ができる。桃子ちゃんの隣は、あったかくって、嬉しくって、すごい幸せをいつも感じるんだ。

これって、俺の居場所なんだって最近、マジで思う。桃子ちゃんの隣が、俺の居場所なんだ。

こんな気持ちにさせてくれたのは、桃子ちゃんが初めてだ。

すつ…。桃子ちゃんはすごく気持ちよさそうに寝ている。可愛いな。その寝顔をずっと見ていたいって思ったけど、俺はベッドから出て着替えて、顔を洗い、初日の出に行く準備をしてから、また部屋に戻った。

桃子ちゃんはまだ、すやすや寝ていた。

「桃子ちゃん、起きて」

桃子ちゃんはまったく起きる様子がない。

「桃子ちゃん、起きて、朝だよ」

ようやく、桃子ちゃんが反応した。

「お母さん、あと5分」

え？お母さん？

「ブツ」

俺は思わず、ふきだした。可愛い！寝ぼけてるよ！

「桃子ちゃん、お母さんじゃないよ。俺だよ、聖だよ」

「…聖君？」

そう、俺。って、あれ？なんで手を伸ばして、何かを探してるの？

「桃子ちゃん、何探してんの？」

「…え？」

ようやく桃子ちゃんは目を開けた。

「あ、あれ？ここ？」

「俺の部屋」

「……」

桃子ちゃんは、まだ眠そうな顔をしている。

「もう5時過ぎたけど。どうする？眠たいなら、初日の出はあきらめて、もう少し寝ちゃおう？」

「初日の出？あ！そうだ！」

桃子ちゃんは、ようやく目をぱちりと開いた。それまでは、今にも寝ちゃいそうだったもんな。

「ごめん、聖君。起こしてくれてた？」

「うん。いいよ。ほんと眠いなら、まだ寝てても」

「大丈夫、起きる」

桃子ちゃんはベッドから出た。

「ごめんね。急いで用意する」

そう言つと、パジャマを脱ぎかけてから、

「聖君、着替えるから部屋から出てもらっていい？」  
と聞いてきた。

「ああ、うん。じゃ、リビングで待ってる」

でもな、桃子ちゃんの着替え、今までも見てるんだけどな。

「でも、別に桃子ちゃんが着替えるところなんて、もう前にも見てるし」

そう俺が言つと、桃子ちゃんは、

「でも、恥ずかしいの！」

と、真っ赤になりながら言った。あはは、可愛いな〜。

桃子ちゃんが行く準備を整え、一階に下りてきた。菜摘と葉一が海岸で落ち合おうとメールをしてきたから、みんなで会うことにし

た。

浜辺に行くと、初日の出を見ようと出てきた人たちが、けっこういた。

その中から、葉一と菜摘を探し出し、4人で初日の出があがるところを見た。

感動だった。桃子ちゃんも、感動していたようだ。

1年前も、桃子ちゃんと元旦は過ごしていたっけな。1年、たったんだな〜。

そして、また今年も1年、俺は桃子ちゃんのそばにいるんだ。沖縄に行くのもやめたしな。

桃子ちゃんを見た。去年一緒に初詣にいったときよりも、大人びて見える。背も伸びたし、ますます綺麗になったし。

高校3年の桃子ちゃんも、高校卒業して、どんどん大人になっていく桃子ちゃんも、俺はずっとずっと見ていくんだな。ずっと隣でさ…。

新しい年の初めに、俺はそんなことを思っていた。

そして、すぐそばにいる桃子ちゃんを見ながら、俺ってすげえ幸せものだって、めっちゃ感激していた。

## 第22話 決意

2日、伊豆に俺は一人で行った。もう、沖縄に行くのもやめると決めていたし、すつきりとした気分だった。

父さんはそんな俺のことに、いち早く気づいたらしく、

「なんか、すつきりしていない？お前」

と聞いてきた。

そんな父さんと連れだって、伊豆の海を見ながら二人で話をした。

「沖縄行くのやめるって決めたんだ」

父さんは一回、動きが止まっていたけど、すぐに俺を優しく見つめ、

「決意したのか。それで、すつきりできたのか」

と聞いてきた。

「うん」

「そうか。お前の心のうちを聞いて、決められたんだ」

「…うん。どうしたいか、聞いたよ」

「そうしたら、聖自身はなんて言ってた？」

「大事な人のそばにいたいってさ」

「え？」

「大事な人のことをこれから、すぐそばで、支えていきたいって思ってる」

「……」

父さんは、につこりと黙って微笑んだ。

「何よりも大事なのは、家族や桃子ちゃんだ。そんな大事な人をほっておいたり、傷つけたりしてまで、叶えたい夢なんてないよ」

「そっか」

伊豆の海は綺麗だった。青く澄みわたった空も、風もとても気持ちよかった。

「聖には、桃子ちゃんは相当特別な存在なんだな」

「うん」

「そばにいてあげたいのか」

「うん。いや、どっちかって言うと、そばにいたいって感じかな。

桃子ちゃんのそばにいと、癒されるし、元気になる」

「ふうん」

「俺が俺らしくいられる場所なんだよね」

「そっか」。そりゃ、すごい存在だね、桃子ちゃんは」

「うん」

「さすがにいい顔してるな、お前」

父さんはそう言つて、高らかに笑つと、

「そんなにすっきりしたいいい顔をしているから、きっと、母さんももう何も言わないさ」

と言つてくれた。

母さんに沖縄に行くのをやめたと告げると、一瞬驚いた表情をしたけど、

「そう、決めたの」

と、すぐに冷静に答えてきた。

「うん、決めたよ」

俺がそうきつぱりと言うと、

「後悔しないなら、それでいいのよ」

と、母さんは優しい目でそう言つた。

「うん」

ああ、なんだかんだ言つて、父さんも母さんも、やっぱり俺のこ

と、1番に考えてくれてる。そんなことをすごく感じた。

伊豆のじいちゃんとはあちゃんの家は、楽しかった。毎年そうだけど、みんな本当に明るい。

何年かしたら、ここに桃子ちゃんもいることになるのかもしれない。そんなことを思いながら、みんなと過ごしていた。

家に帰った。俺には、あとは受験の勉強だけが残っていた。

桃子ちゃんは、風邪を引いてしまい、れいんどろっぷずに顔も出さなくなった。

俺にうつしたら、大変だって思ってるようだけど、俺にとっては会えないほうが痛手。

それもまた、桃子ちゃんは俺に気をつかってか、メールすらなくなってくれない。時々思うよ。やっぱり俺のほうが、桃子ちゃんのと好きなんじゃないの？なんてさ。

>桃子ちゃんに会いたいよ~~~~( ; ; )

寂しさのあまり、そんなメールを送った。でも、桃子ちゃんからのメールは、

>私も会いたいけど、風邪うつしたら大変だから。勉強頑張ってる、これだけ。

ガック……。いや、俺のことを思ってたのだと思うけどさ、会いたいんだってば。やっぱり、思う。桃子ちゃんの方が強い。断然、俺の方が情けない。

センター試験前、夜、あまりコーヒーを飲まない俺が、眠気を覚ますためにいっぱい飲んじゃったからか、それともストレスか、プレッシャーか、胃腸の調子を悪くした。

青い顔してトイレから出てきたところを父さんに見られ、

「おい、聖、大丈夫か？」  
と聞かれてしまった。

「う〜〜ん、お腹壊した」

「整腸剤飲めよ。今、持ってきてやるから」

父さんは俺の部屋に、整腸剤と水を持ってきてくれた。

「サンキュー」

「お前って、いつも強いけど、たまに弱くなるな」

「そう？」

「高校入試も、ほとんど寝れなくなって、試験終わったら、まるま  
る1日寝てたじゃん。あ、そのあと熱も出したか」

「そういえば、そうだったかな。試験終わるまでは気を張ってたか  
ら、風邪も引かなかったけど」

「桃子ちゃん、そういえば、最近来ないね」

「風邪引いたから、俺にうつさないよう気をつかってくれてさ」

「なるほどね。それでさらに、弱ってるわけだ」

「え？」

「桃子ちゃんってお前の、元気の源じゃん」

「……何、それ」

「あれ？お前自分で、気づいてないの？」

「……。気づいてるけど」

「なんだ！気づいてたか！あははは」

「なんだよ。笑うところ？そこ…」

父さんは笑いながら部屋を出て行った。

あ〜〜。そうだよ！気づいてるさ、とつくに。最近会えていな  
いから、俺まいったよ。会って癒されたいだの、桃子ちゃんのぬ  
くもりを感じたいだの、そんなことばかり思ってるからか、桃子ち

やんを抱く夢ばかり見てるし。

俺って欲求不満？とか思ったけど、そうじゃなくって、桃子ちゃんのぬくもりが恋しくてしかたがないんだ。

やべ〜。なんなんだ。俺、情けない。

桃子ちゃんは、弱そうに見える。一見ね。でも実は強い。俺は強そうに見えると思う。でも実は弱いかもしれない。そんなことを思う今日この頃。ああ、情けない。

センター試験が終わって、夜、桃子ちゃんに電話をした。実はここ3日間くらい、電話も我慢していた。本当は声が聞きたくって仕方なかった。だけど、一回聞いたら、今度は会いたくなって、いてもたってもいられなくなっても困るしって思っで、我慢してたんだ。

「なんかどうにか、終わったよ…」

「お疲れ様」

ああ、桃子ちゃんの声だ。すげえひさしぶりに聞いた気がする。

「まじ、疲れた。桃子ちゃん、風邪もう治った？」

「うん」

そっか。じゃ、もう会えるのかな。

「あ、会いたいんだけど」

「うん」

「じゃ、来週会える？」

「うん」

やった！会えるんだ！！俺は一気に元気になった。

それから、土曜日が来るのを楽しみにしながら、勉強に励んだ。たったそれだけのことなのに、なんだか力が湧いてくる。桃子ちゃんパワー、どんだけだよって自分でも驚いた。

そして土曜が来た。

朝からうきうきわくわくだ。まじで会いたくてしょうがなかった。わくわくしながら、支度をして時計を見て、めっちゃ焦った。待ち合わせの時間にもうなってるじゃんか！

すげえ慌てて、家を飛び出した。全速力で走って行って、駅に着いたけど、桃子ちゃんはいなかった。あれ？遅れてる？

息を整え、わくわくしながら待っていた。でも、次の電車でも桃子ちゃんは現れない。

あれ？

俺は携帯で昨日のメールのやりとりを見直した。

げ！待ち合わせの時間、違っじゃん。俺、30分早くに来てるじゃんか！

仕方なく、コンビニに行き、雑誌を読んだりして時間をつぶした。けど、読んでいてもまったく、頭に入ってこない。早く桃子ちゃんが来ないかって、待ち遠しくてたまらない。

5分前になり、改札口の前に行った。電車がホームに入ってきた。あれに乗ってるのかな。

あ、来た！

「桃子ちゃん！」

俺がクロなら、尻尾を振って思い切り抱きついて、べろべろに桃子ちゃんの顔、なめてるよ。

「お疲れ様。元気？」

桃子ちゃんが聞いてきた。

「元気。なにせ、桃子ちゃんに会えてるし」

「？」

「あ、そうじゃなくって、桃子ちゃんに会えたから元気」  
なんか何言ってるのかもわかんなくなってきた。

「なんか、すげえ久しぶりに会った気がする〜」

俺は桃子ちゃんと手をつないだ。ああ、桃子ちゃんのぬくもりだ。あつたけ〜!!

「あれ？今日、手袋は？」

「忘れた。慌てて出てきたから」

「慌てて？」

「桃子ちゃん、手あつたかいね」

「聖君は冷たいね。もしかしてずっと待ってた？」

「うん。時間、間違えて出てきたから」

桃子ちゃんは不思議そうな顔で俺を見た。

「30分、早くに慌てて出てきた」

「間違えて？」

「うん」

「30分も待ってたの？」

「駅ついて、しばらく待ってて、来ないからメール見直して、時間間違えてたのに気づいた」

「それから、ずっと待ってたの？」

「あ、コンビ二で時間つぶしてたよ」

また、桃子ちゃんは俺の顔を覗き込んだ。

「桃子ちゃんに会えると思ったら、浮かれちゃって、時間間違えちゃった。きつと早く会いたかったのかな、俺」

そう言ってから、早く会いたかったのかな、俺…じゃないだろ。めっちゃ会いたくしょうがなかっただろ、て突っ込みを自分でいれていた。

## 第23話 桃子ちゃんパワー

れいんどろつぷすに着くまでの道のりは、うきうきわくわくで、スキップしそうになる衝動を必死で抑えていた。

俺ははつきり言つて、何を話していたかも覚えていない。きつとりとめのないことをべらべらと話していたと思う。桃子ちゃんは相槌を打ったり、笑ったりしていた。それだけでも、ものすごく嬉しかった。

れいんどろつぷすのドアを開けると、母さんが元気よく桃子ちゃんを出迎えた。

「桃子ちゃん、いらっしやい。風邪もう、大丈夫？」

「はい。もうすっかり」

「そう良かった。聖、ずっと桃子ちゃんに会えなくて、しよげてたから」

「母さん！何言つてんだよ」

「あら、駄目だった？ばらしちゃ」

「…う。まあ、そうなんだけどさ」

なんだよ。母さんにもそういうの、ばればれだったのか。

俺は桃子ちゃんの手を取って、2階に上がった。

「ヒーターつけるね」

俺は先に入り、ヒーターをつけた。

桃子ちゃんは、部屋に入り、上着を脱いだ。それから、注意深く歩きながらベッドに座った。

あ、そっか。床にいろんなもの散らばってた。

「ごめん、散らかってて」

慌てて、床にある参考書やら問題集を、どかした。

「聖君、勉強で疲れてるんじゃないかと思ってたけど、すごく元気そうだね」

桃子ちゃんがそう言ってきた。

「だから、桃子ちゃんに会えてるから元気なんだって」

そう言って、俺は桃子ちゃんの横に座り、

「今日、会えることだけを励みに、頑張ってたよ、俺」

と正直に言った。そして、桃子ちゃんにキスをして、ぎゅうって抱きしめた。

「ああ、桃子ちゃんだ〜〜」

う、嬉しすぎる！桃子ちゃんの匂い、ぬくもり、全部が嬉しい。

「すげ、会いたかった」

そう言って、もう一回抱きしめると、桃子ちゃんも俺を抱きしめてくれた。ぎゅー！その腕の力がめっちゃ嬉しい。

「桃子ちゃん、今日…いい？」

思わず、俺は甘えてそんなことを聞いた。

「え？ででも、下にお母さんいるよ」

「店にいるから、聞こえないし大丈夫」

「お、お父さんは？」

「今日出かけてる」

「杏樹ちゃんは？」

「部活」

「クロは？」

クロ？クロのことまで、気にするの？

「店すいてるし、店にいるよ」

「……」

「駄目なの？駄目ならいいんだ。こうしてるだけでも」

「……」

桃子ちゃんは黙っている。

ぎゅう。桃子ちゃんの俺を抱きしめる腕に、力が入った。

「聖君」

「え？」

「いいよ」

「え？」

「大丈夫……」

「ほんと？」

「うん」

俺は、めちやくちゃ嬉しくなつて、すぐに押し倒してしまった。

どれだけ、我慢してたかな。桃子ちゃんを抱きしめること。桃子ちゃんのぬくもりも、キスも。

キスをするとう桃子ちゃんは、俺を色っぽい目で見つめてきた。ああ、この目。ずっと夢の中で、見ていたよ。

桃子ちゃんの服を脱がして、キスをして、抱きしめて、その頃ようやく気づいた。やけに、今日は桃子ちゃんがはつきりと見えることに。ああ、電気つけっぱなし。

だけど、桃子ちゃんも気にする様子もないし、そのままにしておいた。

体の線、前よりも女らしくなった。桃子ちゃんはどんどん、どんどん大人に成長してるんだな。

胸は真っ白だ。だけど、ほんのり赤くなってるのがわかる。

今までは、すげえ可愛いだった。でも今日は、すげえ綺麗だ。

こんなに綺麗だったかな。こんなに桃子ちゃんは女らしかったっけ？やべえ。毎回、毎回、桃子ちゃんは違う顔を見せてくる。そのたびに俺、惚れちゃってるんじゃないの？

桃子ちゃんはぼくって宙を見ている。目線を追ってみると、俺の部屋に貼ってあるイルカや海の写真を見ているようだ。そういえば、最近、写真が増えたんだっけ。癒されたくて海の写真を、貼ったりしたんだ。

俺は桃子ちゃんにキスをして、桃子ちゃんの胸に顔をうずめた。すげえあったかいし、いい匂いがする。ああ、桃子ちゃんだ。「もう少し、こうしてていい？」

俺が聞くと、

「うん」

って、桃子ちゃんは静かにうなづいた。

「なんか落ち着く」

「え？」

「心臓の音や、桃子ちゃんのぬくもり、落ち着く」

「そう？」

桃子ちゃんが俺の髪をなでてきた。されるがままにしていたけど、だんだんとくすぐったくなってきた。

「桃子ちゃん、くすぐりたいよ」

俺は体を起こして、腕枕をした。

「髪、伸びたね」

「俺？」

「うん」

「そっいえば、しばらく切ってないもんな〜」

「サラサラだよね」

「俺？」

「うん、羨ましいな」

「桃子ちゃんの癖毛だって、可愛いよ。俺、好きだよ」

「ありがとう」

桃子ちゃんの髪を、指に絡めてみると、くるくると巻きついてくる感じがした。面白いな、これ。

「……、海の写真増えたね」

「さっき、見てた？」

「うん」

やっぱりそうか。

「海にいる気分になると、落ち着くから。本当は、この部屋、真っ青に塗りたいくらい」

「え？」

「今、カーテンモスグリーンだけど、濃いブルーでもいいな」

「海の中にいるみたいで？」

「うん。モスグリーンは、母さんの趣味なんだ。中学の時、このカーテンにして、そのまま変えてないから」

「それまでは？」

「空のブルーに白の雲の模様のカーテンだったよ」

「へえ。それもいいね」

そう言っていると、桃子ちゃんは俺の顔をじっと見つめてきた。その目がまた、色っぽくてドキドキする。

「あ！！」

「え?!」

突然、桃子ちゃんが声をあげた。

「何？」

「で…」

「で？」

「電気…」

「ああ。つけっぱなしだったね。忘れてた、消すの」  
そう言つと、桃子ちゃんは顔を真っ赤にさせた。

「今、そんなに真っ赤になつても、遅いつて、桃子ちゃん。それに、もういいじゃん？」

「い、いいつて？」

「そんなに恥ずかしがらなくても」

「は、恥ずかしいよ…。まだまだ、恥ずかしいもん」

桃子ちゃんはその言つと、そそくさと布団にもぐりこんだ。

「あ、俺も入れてよ」

俺も布団にもぐりこんだ。

「桃子ちゃん、でもさ」

「え？」

「いや、いい。やっぱり」

こんなこと言つてもな…。

「何？」

「いいつて」

「気になる」

うーん、言っちゃおうかな。じゃあ…。

「あのさ。恥ずかしがつてるけど、でもいつも、その」

「え？」

「無抵抗になつちゃうでしょ？」

「え？う、うん」

「そんなときは、けっこう大丈夫みたいだよ」

「何が？」

「何がって…。」

「裸、見られてても」

「え?!?!」

「なんか、いつも色っぽい目で、俺のこと見てるだけだし」

「え?え?え?」

「だから、全然見られても平気なんだなって思って、今日、電気消さなかったけど」

「平気じゃない!」

「そうかな」

「全然平気じゃない!」

「でも、さっきまで電気がついてることに、気づかなかったんでしょ?」

「う…」

桃子ちゃんは言葉に詰まっていた。

「桃子ちゃんって、色白いからかな」

「え?」

「ほくろ、けっこうあるよね」

そう言つと、さらに桃子ちゃんは真っ赤になった。そしてぐるっと後ろを向いてしまった。

っていうリアクションをとるだろうなって思って、わざとこんなことを言う俺ってどうよ。なんて思いながらも、俺は後ろから桃子ちゃんに抱きついた。

「もう少し、こうやっていようね」

そう言つて、桃子ちゃんの肩にキスをしたり、髪にキスをした。

「ああ〜。桃子ちゃんだ」

めっちゃ嬉しい！

「わ〜。やっと、抱きしめられた」

「え？」

「ずっと、夢でしか抱けなかったから」

「夢？そんな夢見てた？」

「見てた。毎日、見てた」

俺はまた、桃子ちゃんを抱きしめた。

「あとちょっとで、受験も終わるけど、どうにか、頑張れそうだ」

「え？」

「桃子ちゃんから、パワーもらえたから」

「ほんと？」

「うん！」

やっぱり、桃子ちゃんパワーは偉大だよ。まじで俺はそう感じていた。

## 第24話 一筋だから

しばらく桃子ちゃんと、ぎゅうって抱きしめあっていた。そこにトントンと階段を上がってくる音がして、俺らは慌ててベッドから出て、焦って服を着た。

二人とも沈黙して、ドアの外の音を聞いてると、どうやら、父さんのようで、自分の部屋に入っていたようだ。

どうも、そのトントンという軽い足音はクロだったみたいで、きっと父さんが帰って来て、一緒に2階に上がってきたんだろうな。ああ、慌てた。鍵もかかっているし、かかってなくなったら、部屋に入ってくることもないのにさ。

「なんだか、聖君のお母さんに会にくいかも」

桃子ちゃんは、ぼそってそう言った。確かに。俺も顔あわせづらい。

「玄関から出てく？」

「変に思われない？」

「大丈夫だよ。あれこれ話しかけられるのは嫌でしょ？また、夕飯食べていってってことになっちゃうのも、困るでしょ？」

桃子ちゃんは、こくんと思い切りうなづいた。そりゃ、そうだよ。ね。みんなで食卓を囲むなんて俺もできそうもない。

「夕飯外で食おうか？一緒に」

「うん」

「もう5時半だし、そろそろ出たら、早めの夕飯って感じでいいんじゃない？」

「うん」

桃子ちゃんもうなづくから、そうすることにした。

一階に静かに下りて、そっと店側においていた靴を取って、玄関に行き、玄関から二人で外に出た。

それから、寒空の中、桃子ちゃんとべったりよりそって歩いた。

よくこの辺を、桃子ちゃんと歩いているから、近所では俺に可愛い彼女がいるって評判になってるらしい。で、店にたまに来ていた中学の後輩の女の子が、ぱたりと店に来なくなったり、近くのコンビニで働いてた女の子が、よくこの辺で会つと、声をかけてきたのが、まったく声をかけてこなくなった。

まあ、声をかけられても、あまり俺は話さなかったから、それで愛想つかされたのかもしれないけど。

近所の手前、江ノ島では手をつなぐこともしていなかったんだけど、いつの間にかどうでもよくなって、江ノ島でもどうどうと腕組んで歩いてるもんな、俺。

でもそんなにさ、中学の頃のダチに会うこともないし、知ってる人にも会うこともないから、平気なだけだよ。

だから、今日もべったりとくっついて歩いていた。そして、レストランに入ろうとしたら、ちょうどその時ドアから出てきた女の子たちに、声をかけられた。

「聖君じゃない？」

「え？」

振り返ると、中学の時、付き合ってた例の彼女がそこにいた。げ！それも、その子の隣には、中3の時同じクラスだった子も。

「うわ~~~~。久しぶり！」

二人で、はしゃいで寄ってきた。

「誰？彼女？！」

「え？うん」

「わくく」。聖君でもそんな腕組んだりして歩くんだ」

あ。見られた。

「聖君、背、伸びたね」

元かのが言つて来た。

「高校での噂聞いたよ。すごいもててるんでしょ？同じ高校の子？」

「いや、違うけど」

俺がそう言つと、桃子ちゃんはそつと腕から手を離した。そして俺の後ろに隠れてしまった。

「麻子ったらさく、別れなきゃ良かったよね。聖君と」

げ！そんなこと言ってるし…。後ろに回つた桃子ちゃんが、俺のジャケットの裾を、後ろからつまんでるのがわかる。

「だけど、もう何年もたってるもの、あれから。それに聖君には、こんなに可愛い彼女がいるじゃない」

「これから、飯食うんだ。悪いけど、急いでるから」

俺はそう言つと、さつと後ろを向き、桃子ちゃんの手を取つて、そのままレストランに入つていった。

「ほんと、かつこよくなってるく」

「もてるって噂もやっぱり、ほんとなんだよ。でも、彼女いるんだね。麻子、残念だったね」

そんな話し声が後ろから聞こえていたけど、ドアを閉めると何も聞こえなくなつた。

店員の案内で店の奥に入った。そこからは海が見えた。

「何頼む？何個か頼んで分けようか」

「うん」

桃子ちゃんはちょっと元気がない。もしかして、さっきの子のことを気にしてるのかな。

俺は、何品かを頼み、コーラも頼んだ。桃子ちゃんはジュースを頼んだ。

店員がテーブルを離れてから、俺は桃子ちゃんに聞いた。

「なんか元気ない？」

「え？」

「桃子ちゃん、声沈んでるよ」

「ほんと？」

「うん」

桃子ちゃんは、笑って見せたけど、ちょっとひきつつてる。

「さっきの子のこと、気にしてるの？」

そう聞くと、桃子ちゃんは顔を固まらせた。わかりやすい反応だな。

「あの…、中学の時に付き合ってた子なの？」

「うん」

「葉君も好きだったっていう？」

「うん、そう」

「じゃ、桐太君がちよっかいだしたって言ってた」

「ああ、そうそう」

「大人っぽい子だった」

「そう？そうだな。ちよっと変わってたかな。もっと素朴な感じの子だったから」

「……」

「なんで黙り込むの？」

「え？」

「何か気になる？」

「うっん」

「そうかな〜。なんかひっかかってるでしょ？本音言ってね、本音」

桃子ちゃんは、こうやって聞きださないと、黙って溜め込んだじやう時あるからな〜。

「聖君のことかっこいいって」

「え？」

「また、聖君と付き合いたくなったりしないかって」

「……。そんなこと気にしてたの？」

「うん」

「もし向こうがその気になったとしても、俺、桃子ちゃん一筋だから安心して」

「一筋？」

「そう。それ、知ってるよね？」

「……」

桃子ちゃんは目を丸くして、固まった。

あ〜〜。だから〜。俺は頭を抱えてしまった。そこに店員がコーラとジュースを運んできた。

「聖君、彼女？女の子と一緒になんてめずらしくない？」

店員が話しかけてきたから、顔をあげると、よくうちの店に食べに来る子だった。

「あれ？ここで働いてるの？」

「ええ？知らなかった？前に家族で来たでしょ？あの時も私いたよ」  
「知らなかった」

「やだな〜。こんな可愛い彼女がいたら、そこらへんの女の子なんて目に入らないか。そういえば、もうお店出ないの？聖君、最近ずっといないじゃない」

「受験生だから、俺」

「あ、そうか。じゃ、試験すぐなんじゃないの？こんなところで油売ってていいの？」

「いいの。センター試験終わったし、息抜きも必要だろ？」

「そうね。じゃ、受験終わったらお店の手伝いするの？」

「ああ、するよ。大学行ってもしてると思う」

「そう？じゃ、またお店に行くからよろしくね」

「うん」

その店員が去っていった。ふと桃子ちゃんの方を見ると、その子の後姿を見ながら、小さため息をついていた。あ、また、なんか暗いこと考えてるんじゃないの？

「桃子ちゃん、今の子は店に来てる子で、っていつても、2〜3こ年は上だと思うけど」

「え？」

「常連つてやつ？よく店に来るから、母さんとも父さんとも、俺とも話したりしてるんだ」

「そうなんだ」

「それだけだよ」

「うん」

桃子ちゃんの表情が暗い。なんで？！

「また、何か考えてる？」

「聖君つて、ほら、学校だと硬派だけど、外だと違うんだなって思  
つて」

「え？俺が？」

「桜さんとも仲いいし」

「別にいいわけじゃないよ？」

「そうかな」

「やつぱ、常連さんや、バイトしてる人とは、話をするよ、俺も」  
「そうだよね…」

「それに、年が上だからかな。話しやすいってのもあるけど」  
「年上だから？」

「うん、多分」

桃子ちゃんは下を向き、暗い表情をした。

「あ、あれ？何？今度は何？」

「大学行ったら、年上の女性いっぱいいるね」

「え？」

「……」

なんか、また桃子ちゃん、勝手なこと考えて暗くなってる。

「大丈夫だよ。桃子ちゃん一筋だから、俺」

「……」

無言だ…。

「俺って、健気で一途だから、ほんと大丈夫だって」

「ええ？」

桃子ちゃんが驚いて顔をあげた。

「何？なんでそんなに驚いてるの？」

「健気で一途って…。うそだ」

「え？なんでうそ？ほんとだよ、本当のことだって」

「……またまた」

「桃子ちゃん、じゃ、俺って何だと思ってるの？」

「超女の子にもてる、すごいイケメン」

「はあ????」

俺の方が目を丸くしたよ。っていうか、なんだ、それ。

「えっと、だから、えっと？」

「だから、私なんかのことを一途に思ってくれたり、健気に思ってくれたりするわけになって」

「じゃ、何？俺、桃子ちゃんのことを弄んどるか？それとも、軽い気持ちで付き合ってるのか？」

「そうじゃないけど」

「じゃあ、何？」

「一途で、聖君以外の人、目に入らなくって、一筋なのは私のほうだから」

「だから？」

「だから、なんか、信じられない」

「……」

なんか、振り出しに戻ってない？

「さっきの麻子さんって人も言ってたよね。かっこいいって。私もそう思うもん」

「だから？」

「だから、えっと…。私が彼女でいるの信じられないなって」  
「……」

「やっぱり、聖君の周りには女の子がいっぱいいて、みんな聖君のことが好きになっちゃうのになって」

「安心して。それ、桃子ちゃんの単なる妄想だから」

「でも、文化祭でもすごかったよ？」

「あ、ああ、あれは、その…」

「めちゃ、もててた。びつくりした」

「そうなんだ…」

「聖君のファンっていっぱいいるんだって、びつくりしたよ」

「でもさ、みんな俺の歌つてるところしか興味ないんだよ？文化祭の時だけ盛り上がったただだよ」

「そうかな。学校一可愛い子からも、告白されたなんてことがあったも？」

「何？それ」

「あ…」

「誰かから聞いたとか？」

「基樹君…」

「あいつ…。なんで桃子ちゃんにそんなこと話すんだよ」

「でも、即断ったって」

「当たり前でしょ？桃子ちゃんがいるんだから」

「……。すごく可愛い子だったって」

「俺には、桃子ちゃんが1番、可愛いの」

「ほんと？」

「本当だよ。だから、いつも言ってるよね？可愛いって」

「……」

桃子ちゃんは顔を赤らめた。もしかして、こういうことを聞きたかったのかな？それで安心したかったとか？だけど、さっきまで俺ら、思い切り抱き合ってたじゃん。それはどうなるの。

「あのさ、まじ、信じていいからね？俺、本当に桃子ちゃんのことしか、頭がないから。桃子ちゃんのこと、いっぱいなんだからさ」

そう言つと、桃子ちゃんはさらに赤くなった。

「……。さっきだって、ずっと桃子ちゃんに俺、言ってたよね？大好きだって。あんなに俺、全身で愛してたのに、そんなふうに言われたら、自信なくしちゃうよ」

「え?!」

桃子ちゃんは、目を思いつきり丸くして、それから、両手で頬を隠して、うつむいてしまった。

あ、今、めちゃくちや恥ずかしがってるな。真っ赤なんてもんじやないや。っていう俺まで、恥ずかしくなってきた。

二人で赤くなつてるところに、さっきの店員が料理を運んできた。桃子ちゃんが赤くなつてうつむいてるので、

「どうしたんですか？気分でも悪いとか？」  
と聞いてきた。

「い、いえ。ちょっと暑いだけです」

「暖房効きすぎてますか？」

「いえ、大丈夫です。すみません」

桃子ちゃんは、店員の方を見ないで、下を向いたまま答えていた。

## 第25話 寝つけない夜

2月に入り、桃子ちゃんはいんどろっぷすに遊びに来た。その日は、父さんも杏樹もいて、リビングで早めに夕飯を食べ、二人が車で送っていった。

夜にメールがあり、勉強頑張つてねと書いてあった。

>うん、頑張る！（><）

と書いて送ると、

>バレンタインデーにチョコを持っていくね。

と返信が来た。

>それを励みに頑張るよ。

と送ると、

>じゃあ、頑張つてチョコを作るね。

と返事をくれた。

俺、ちょっと思ってる。実はまじでまじで、桃子ちゃんに会えるのを励みにして、勉強頑張つてたりするから、本音でメールを送ってるんだけど、桃子ちゃん、そこんところわかってるかなって。

だってさ、この前だって、俺が一途で健気なんだって言っても、信じてくれなかったしさ。

大学入試の試験の前に、数回だけ学校に行った。もう、ほとんどのやつが学校に来てたり、来てなかったりで、教室もまばらだ。

そしてバレンタインが近づいてくると、例年にならない状態になってしまった。

昨年までは、直接チョコを渡してくる子が少なかった。下駄箱やロッカー、机の引き出しの中に突っ込んであることがほとんど。

いきなり来て、ばつと手渡され、逃げられるパターンもあったけど。

でも今年は、駅の付近から待ちぶせにあい、

「聖先輩！チョコ受け取ってください」

と手渡そうとする子が続出。

「ごめん、受け取れない」

と言っても、食い下がらない子もけっこういる。

ロッカーや下駄箱には、チョコ以外のプレゼントつき、手紙つき、メアドのメモつきが急増した。

クラスの子も、

「放課後、中庭に来てくれる？」

などところり言ってきたりする。でも、

「塾があつて、すぐに帰るから、多分いけない。用があるなら今聞  
くけど？」

と言うと、その場でチョコを渡される。

「ごめん、受け取れない」

俺は一貫して、そう言つて断り続けた。

放課後は、こりゃ、大変なことになる？さつさと、帰らないと…。

でも、そうはいかなかった。教室を出ようとした時から、つかまつた。その後も、何人につかまつたことが。

なんなんだ！卒業間近だからか？でも、俺には彼女がいるってどれだけ言つたかわからない。いい加減、諦めてくれないかな。

は~~~~~~~~。重いため息をつきながら、やっとこの駅に着くと、駅でも待ちぶせにあつた。それもまいて、電車に乗り込むと、まったく知らない他校の生徒からも、声をかけられた。

誰?!!

「チヨコ、もらってください」

と、真っ赤になりながら、袋を突き出された。

「ごめん、俺彼女いるし、受け取れない」

泣きそうになる顔を尻目に、とつと俺は電車を降りた。

江ノ島の駅にはさすがに、誰もいなくてほっとした。

文化祭に出たからか？あれに出てから確実に増えたよな。ああ、おとなしく高校生活を送っていたら良かった。

大学ではおとなしくしてるぞ、俺。

れいんどろつぷすに戻ると、桜さんがいた。

「あ、おかえり」

「久しぶりだね、どうしたの？」

「チヨコを持ってきてあげたんじゃないの」

「あ、そうなの？誰に？」

「聖君にでしょ」

そう言っ、桜さんは袋を俺に手渡した。あ、桜さんってのは、去年の夏、うちの店でバイトをしてた大学生。幼馴染と付き合うようになった、俺に酒飲んで絡むこともなくなった。

「義理チヨコでしょ？彼氏に本チヨコあげるだけでいいんじゃないの？」

「そうなんだけどね。爽太さんにも持ってきたし、聖君にだけあげなかったら、聖君すねちゃうかもって思っ」

「すねないよ」

なんなんだ、それは。

「彼女からももらっから、私なんかはいらないか」

桜さんはにやって笑いながらそう言った。

「…しょうがないな。もらってやるか」

俺はわざと、クールな顔でそう言った。

「荷物少くない？」

「俺？ああ、もう授業らしい授業もないしさ」

「そうじゃなくて、チョコ、どこに入ってるの？」

「あゝ。ここ」

俺は学生カバンをあけた。そこには、5個か6個、チョコが入っていた。

「あ、やっぱりもらったんだ。聖君、もてるだろうし。でも、それだけ？」

「うん。今年はロツカーや、下駄箱には少なかったから」

「去年は多かったの？」

「うん」

「今年はなんで少ないの？彼女がいることがばれたとか？」

「あゝ。どうかな」

「5、6個かゝ。もっと期待してたのに」

「え？もしかしてチョコ貰って帰る気だった？」

「そうじゃなくて、どれだけもらってくるだろうって、楽しみにしてたのよね」

桜さんがそう言うのと、カウンターでコーヒーを飲みながら、多分桜さんからもらったであろうチョコを食べていた父さんが、

「聖ね、手渡されるチョコは、ことごとく鬼のように断るから、もし受け取ってたら半端ない数になってたと思うよ」  
と、振り返っていきなり話に割り込んできた。

「え？そんなにもてるんですか？」

「ああ、毎年店にも、チョコ持ってくるよな。近くでバイトしてる女の子も、中学が一緒だったっていう女の子も。でも、受け取ってためしがないの」

「なんで？」

桜さんが驚いていた。

「だって、期待させるじゃん。それに今は俺、彼女いるし」

「ひゃー。徹底してるんだ」

「うん」

「すごいね。それじゃ、桃子ちゃんも安心だ」

「うん」

桜さんが目を丸くしていたけど、俺はそのまま、さっさとリビングにあがっていった。

チョコはリビングのテーブルに置いた。プレゼントはどうしようかって悩んだけど、可愛いキーホルダーやストラップ、タオルとか入っていたから、杏樹や母さんにあげることにして、そのままリビングに置いた。

それから部屋に行き、ベッドにごろんと横になった。

「っ、疲れた」

こつこつ日はめっちゃくちや、疲れる。

桃子ちゃんの言葉を思い出した。

「超女の子にもてる、すごいイケメン」

桃子ちゃん、そう思ってたんだな。今日のことは話さないほうがいいかな。

だけどき、たいていが俺の見てくれや、文化祭のステージで騒ぎ

出ただけで、本質を知って好きになってくれた子なんて、ごくわずかだと思うよ。

って、あれ？そういえば、桃子ちゃんも海の家で働いてる俺を見て、一目惚れしたって言ってたっけ。

働いてる姿や、笑顔が忘れられなくてとか何とか、話してくれたことがあったな。汗いっぱいいて、一生懸命に働いて、力キ氷を注文した時に、返してくれた笑顔が素敵で…とか何とか。

あ、俺、いいように着色してる？

だけど、それってさ、俺の働きっぷりに惚れてくれたってことだし、なんつうか、他の子とは違うよね。なんて思ったりしてるんだけど、それも俺がいいように取ってるだけかな。

ま、いいや。桃子ちゃんがどこを好きになってくれたかなんて。

今は、全部って言うてくれるんだし。

あ~~~~~。早くに桃子ちゃんが来る日にならないかな。

俺はベッドの上で、じたばたした。すげえ、早く会いたい！

それからいきなり、眠気が襲ってきた。でも、今寝たら、勉強できないと思い、着替えて机に向かった。

試験まであと数日。今さら頑張ってもと思うけど、どうにも勉強をしていないと、落ち着かない。

夜も、ベッドに入っても、眠れないからまた起き出して、机に向かうこともしばしばある。

結局今日もまた、俺はなかなか眠れず、2時過ぎまで机に向かっていた。

トントーン…。こんな遅くに誰だっと思ってドアを開けると、父さんだった。

「何？父さん、まだ起きてたの？」

「それはこっちの台詞。俺は仕事で今まで起きてた。聖は勉強？」  
「うん」

「最近夜遅くまで、聖の部屋の電気がついてるって母さんも言ってたけど、そんなに根詰めて大丈夫なのか？」

「うん、大丈夫だよ」

「体壊したら意味ないんだぞ」

「わかってるよ」

俺はちよつと黙り込んでから、

「でも、寝れないんだよ」

とぼそつて言った。

「あつたかいもんでも飲んで、布団にもう入れ、な？」

「うん」

父さんはそう言うのと、部屋に戻っていった。俺はそのまま、ベッドにもぐりこんでみた。でもなかなか、目が冴えて寝れなかった。

天井を見上げた。数式が頭の中をかけめぐった。次には英単語。

あ、あの単語のスペル、なんだっけ？

気になってまた起き出し、電気をつけて、辞書を引いた。

駄目だ。やっぱり寝れない。

机の引き出しを開けた。数枚、去年の夏に撮った、桃子ちゃんの写真が閉まってある。それを取り出した。

「あゝあ、べつたり一日中、桃子ちゃんといたい」

胃がちくつてした。やべ。また調子悪くしたら大変だ。俺はまた電気を消して、ベッドにもぐりこんだ。

桃子ちゃんを思い出した。俺の隣で寝ていた桃子ちゃんのこと。そのぬくもりや匂いを。

可愛かったな。

しばらくすると俺は寝ていたようだった。

## 第26話 二人になりたい

桃子ちゃんが店に来る日がやってきた。

そんな日に限って、桐太のやつまでが店に来た。母さんと仲よさそうに会話して、カウンターに着くと、今度は俺にあれこれ話しかけてきた。

「やっぱり、家にいた。そりゃそうか。もうすぐだもんな、試験」  
「なんでお前、来たの？」

「いいじゃん。客だよ、客。あ、すみません。コーヒーお願いします」

「はい、待っててね、桐太君」

母さんはそう言って、キッチンに入っていった。

なんだ。母さんもずいぶんと愛想いいんだな。

「お前、高校卒業したらどうするの？」

俺が聞くと、

「フリーター」

と、桐太は、にこってしながら言った。

「ふうん」

「江ノ島で、バイトでもしようと思ったださ」

「なんで江ノ島？」

「なんでって、それは……」

桐太が黙り込んだ。まさか、俺がいるからとか言っただけだな。俺も、それ以上つっこまないようにすることにした。

ふと時計を見ると、げ！待ち合わせの時間になってるじゃん！  
「やべ〜」

俺は慌てて店を飛び出した。それから全速力で駅まで走っていった。

駅に着くともう、桃子ちゃんがいた。桃子ちゃんは大きな紙袋を持っていた。それ、チョコかな。でかいな。

「寒いのに待たせちゃったね、ごめんね」  
「ううん」

俺の吐く息も、桃子ちゃんの息も白かった。

桃子ちゃんはすぐに俺と腕を組み、ひつついてきた。わ！めっちゃ嬉しい。こういうところが、前と変わったよなって思う。

「なんかさ〜。邪魔なやつが店に来てるんだけど、ま、気にしないで。きつとそのうち帰ると思うし」

「邪魔？」

「俺がどうせ家にいると、ふんだらしい」

そう言いながら、店に向かった。

れいんどろつぷすのドアを開けると、桐太が、

「ああ、やっぱり桃子のこと迎えに行ってたんだ。よ！桃子」

と、いきなり桃子ちゃんを呼び捨てにした。すると桃子ちゃんは、桐太のそばに近寄り、何か耳打ちをした。それにこたえて、桐太も桃子ちゃんに耳打ちをしていた。

なんだ？なんなんだ？！

「何？なんで二人で、内緒話してんの？！」

「ああ。いや、別になんでもないよ、な？桃子」

だから、その馴れ馴れしい言葉使いがすげえ、気になるんだって。お前ら、なんか仲良くない？時々お茶してるって言うし」

「だって、桃子、聖に会えなくて暇そうだから、誘ってやってるんだよ」

なんだよ、それ。むかつく。

「じゃ、受験終わったら、もう誘うな」

そう言つと、桐太は、苦笑いをした。

桃子ちゃんはカウンターで、カフェオレを飲んだ。俺はその隣で、桃子ちゃんの空気を感じて幸せになってた。桐太がべらべら話しかけてきたとしても。

つて、本音は早く二人になりたいって思ってたけどさ。

そこに二人の女の子のお客がやってきた。と思つたら、客じゃなかった。

「あ、あの…。聖先輩は？」

母さんにそう聞いているのが聞こえた。

俺はカウンターの席を立ち、

「俺に用？」

と聞いた。

「これ、受け取ってください。チョコ、作ってきたんです」

一人の子がそう言つて、紙袋を渡そうとしてきた。

「ごめん。受け取れない」

「でも、チョココレート、頑張つて作ったから」

あ、そこで諦めてくれないのか。

「頑張つて作ったなら、なおさら受け取れない。俺、食べてあげられないし、結局捨てることになるよ？」

そう俺が言つと、泣きそうな顔をした。

「そんなに簡単に断らないでください。聖先輩、桃香のこともわかつてないのに、いきなり断るなんて、桃香かわいそうです」

その子の友達が、鼻を膨らまし言って来た。

「桃子？」

俺はびっくりした。

「桃香！」

ああ、桃香。一字違いか。

そのうえ、その友達の名前は夏樹っていうらしい。元気で、強気なところが、菜摘とだぶる。そのうえ、桃香って子は、桃子ちゃんとだぶって見える。

ここでいつもなら、悪いって言って、さつさと俺、リビングに行っちゃうんだ。だけど、なんだか、突っぱねるのに気が引けた。

「チョコ、作ってくれたのも、ここまで来てくれたのも、悪いなとは思っけど、やっぱり受け取れないし、俺、本当に彼女いるしさ」

そう言うてから、俺はつい、

「寒いし、もし良かったら、ここで、コーヒーでも飲んで、あったまってる」

なんて言うってしまった。

母さん呼んで、注文を聞いてもらった。それから俺は、カウンターの席に着いた。

そのあと、桃子ちゃんの作ってきてくれた、チョコケーキを食べた。すげえ旨かった。すごく嬉しいはずなのに、でもなぜか気持ちが悪く沈んでいた。

俺、なんで、気が引けたのかな。

どうも、名前かな。ひっかかっているのは。

そうだ。桃子ちゃんとだぶったからだ。いきなり冷たくできなくなった。

前にもあったつけ。桃子ちゃんと雰囲気似てて、その子が泣いちゃって、すげえ罪悪感に襲われた。まるで、桃子ちゃんを泣かせてる気になっちゃって。

その子達は、俺らのやりとりを聞いていて、桃子ちゃんが俺の彼女なんだということを察して、諦めて帰っていった。

二人が帰ってから、俺はなんだか、重い気持ちを抱えたままだった。

そのあと、桐太も、邪魔したなって言って、帰っていった。ああ、ようやくこれで、桃子ちゃんと二人の時間が持てる。

すると、今度は、部活から帰ってきた杏樹が桃子ちゃんに、「家庭科の宿題、手伝って」と甘えていた。

「ええ?!」

今度は杏樹? 冗談だろ? でも、桃子ちゃんはあると引き受けて、二人で2階に上がっていつてしまった。

まじで?

あ~~~~。俺はがつくりときて、クロとリビングでテレビを観ていた。

そつえば、桐太のやつ、桃子ちゃんのことえらく気に入ってたな。いい女だなんて言うから、すげえびっくりした。

俺と桃子ちゃんのこと、応援してるし味方だって言ってた。味方って言われてもな、別に敵もないし。

それにしても、俺は桃子ちゃんと二人っきりになりたいんだつてば。ぬくもりも感じたいし、キスだってしたい! いや、それ以上も! 「なんでみんなして、俺と桃子ちゃんが二人になるの、邪魔するん

だと思っ？俺に会いに来てるのにさ」

クロに俺はそう言った。クロはペロツて俺の口をなめた。慰めてくれるの？

気配を感じて後ろを向くと、いつの間にか2階から下りてきた桃子ちゃんが、後ろに立っていた。

俺はこれ以上誰にも邪魔されないうちにつて、桃子ちゃんを俺の部屋に連れて行った。

桃子ちゃんがベッドに座ったから、すぐ俺も横に座った。

それから何気に時計を見ると、6時過ぎていた。ええ？もうそんな時間？

「あ。うそ。もうこんな時間なんだ」  
「うそだろ…」

「もうすぐ、夕飯できると思うから、食べてってね」  
俺は力なく、そう桃子ちゃんに言った。

「大丈夫なの？お父さん、忙しくない？私電車で帰っても」  
「大丈夫。もうちょっとしたら、帰ってくると思うよ」  
「出かけてるの？」

「うん。なんだっけ？打ち合わせとかなんとかって言ってたっけなでも、桃子ちゃん来るなら、早くに切り上げて、車出すからねって念を押してから、今日出かけてった」

桃子ちゃんは、俺の肩にもたれかかってきた。ふわ…。桃子ちゃんからいい香りがしてきた。

「桃子ちゃん」

俺は思わず、桃子ちゃんをぎゅって抱きしめた。  
「うん？」

「は~~~~」

すげえ、ため息が出た…。

「疲れてるの？」

「う〜ん。今さら焦ってもしょうがないし、どっしりかまえてたら？って母さんにも言われたんだけど、昨日も、不安になっちゃってさ」

「え？」

「けっこう遅くまで勉強してた。何かしてないと落ち着かないんだよね。で、それを知ってか、父さんが、今日は勉強しないで、桃子ちゃんのこと送って行って、帰りドライブしようってなってさ」

桃子ちゃんは黙って聞いている。

「もうさ、じたばたしてもしょうがないんだけどね」

はあ…。もう一回小さなため息をした。

「こうなったら、開き直るか」

また、ぎゅうって桃子ちゃんを抱きしめた。桃子ちゃんも俺の背中に両手を回して、ぎゅうって抱きしめてくれた。

「桃子ちゃんに抱きしめられるの、すげえ嬉しい」

「え？」

「なんか、落ち着く」

そう言つと、桃子ちゃんもつと力を込めて、抱きしめてくれた。

「桃子ちゃん」

「うん？」

「チョコケーキ、まじで、旨かった。サンキュー」

「うん」

「それから、俺も」

「え？」

「俺も大好きだから」

チョコケーキについていたカードに、「大好き」って書いてあった。それにハートマークも。確か、去年は「いつも、ありがとう」だった。

それも嬉しかったけど、正直、あれ？それだけ？って思っちゃったんだよね。

今年は「大好き」。なんかくすぐったいような感じもする。

ああ、でもそれを、母さんに見られちゃったんだよね。母さんに桃子ちゃんは袋ごとケーキを渡し、母さんカードまで見ちゃうんだもん。そういうのはさ、俺に見ないで渡すだろう。普通。

父さんが夕飯ができたと教えてくれて、俺らはリビングに移動した。それから夕飯を食べ、食べ終わり俺が食器を片付けてる間に、今日の出来事を母さんが父さんに報告していた。

出来事っていうのは、女の子が二人やってきて、チョコを俺に渡そうとしたけど、俺が断っちゃったことと、その子たちに俺が、コーヒーをおごったりしたこと。

「偶然もあるもんだな、聖」

俺がリビングに行くと、父さんが話しかけてきた。偶然っていうのは、あの子たちの名前のことだろうな。

「性格もね、桃香ちゃんの方が大人しめで、夏樹ちゃんはどうどうとしていたわね」

母さんはそんなことまで言い出した。

「わからないよ。そんなの。ちょっと見ただけじゃさ」

「そうだけど」

「桃子ちゃんだって、一見みた感じと、内側まったく違うし」

俺がそう言つと、

「そうだね〜。桃子ちゃん、こつ見えても、男らしいし、強いからね〜」

と父さんが、口をはさんだ。

「お、男らしい？」

桃子ちゃんが、驚いた。

「あ、今の俺が言つたんじゃないかって、聖が言つてたことだけだね父さんがそう言つと、

「ええ?!」

と、桃子ちゃんは目を丸くして俺を見た。

「たまにね、桃子ちゃん、俺より強くなるし、男らしくなるから」

「ま、聖にとつては、桃子ちゃんが1番つてことか」

げ!だから、父さん、そんなことを平然として言うなよな。

「だ〜!だから、そういうことを父さん、平気で言わないでくれる?」

俺は思い切り照れてしまった。

「あはは!でも、本当のことだろ?だから、チョコも断つてんだろ?他の子の…。でも、今日はめずらしいね。なんか、来た後輩の子達に、おごつてあげたんだつて?」

「え?ああ」

「同じ高校の後輩だから?」

「いや、そういうわけじゃなくつて。俺も、あとから何やってるんだつて思ったけど」

「うん?」

なんて言つたらいいのかな。

「名前聞いて、なんだか他人じゃないような、なんだか、そっけな

くするの、悪い気がしちゃって」

「え？」

「駄目だよ、俺。前にもあった。ちょっと雰囲気桃子ちゃんに似てる子、泣かれてものすごい罪悪感で…。今日も、桃子ちゃんただぶっちゃって、つい」

「あははは！そういうこと！」

「そんなに笑うなよ、父さん」

なんでそこで、そんなに笑うかな。

「でも、聖。いくら桃子ちゃんに似てたり、名前が似てても、桃子ちゃんじゃないんだから」

逆に母さんはきつい口調で言ってきた。なんで、ここで怒るかな。

「んなのわかってるよ」

俺がそう言うと、母さんは俺の顔を覗き込み、

「本当に？これから先も、桃子ちゃんと同じ名前だったり、似てる子が現れるたび、心が揺れてたら、当の本人も気が気じゃないわよ？」

って言ってきた。

ガーン！なんか今、すごい衝撃が走ったぞ。

俺は桃子ちゃんの顔を見た。そうか。そうだな。桃子ちゃんじゃない子を、俺が気にしてて、桃子ちゃんだっていい気しないよな。

「あ。うん。うん…。ごめん、桃子ちゃん」

俺が謝ると、

「ううん」

と、桃子ちゃんは首を横に振った。

## 第27話　ずっと隣で

俺と桃子ちゃんは車に乗り込んで、桃子ちゃんの家に向かった。俺は助手席ではなく、後部座席の桃子ちゃんの隣に座った。

つてところまでは覚えてる。どうやら乗ってすぐに寝ちゃったらしい。

「聖、聖」

父さんに起こされた。

「ほら、桃子ちゃんの家に着いたから、もう起きな」

「ん？あ、あれ？ここ、どこ？」

「桃子ちゃんの家だよ」

「…え？あ！俺、ずっと寝てた？」

「寝てたよ。熟睡してた」

「なんで？桃子ちゃん、起こしてくれたら良かったのに。もしかして俺、ずつとよっかかったた？重くなかった？」

「大丈夫」

桃子ちゃんは、そう言うのと、にっこりと微笑んだ。

「なんだか、まだぼろろとする。あゝ。まじ、よく寝てた。俺」

「お前はまだ、ここでのんびりしてる。桃子ちゃんは俺が玄関まで送っていくから」

「え？俺も行くよ！」

「駄目。そんな寝ぼけた顔で、桃子ちゃんのお母さんに会ったら、笑われるぞ」

「ええ？」

「どんな顔だよ。俺は慌ててミラーで顔を見ると、確かにすんごい寝ボケ顔してた。」

「わ。ほんとだ」

「だからここで、待ってるよ。なんならもう少し寝ててもいいぞ」

「……。寝ないよ。でも待ってるよ」

俺はそう父さんに言ってから、

「なんだ。桃子ちゃんと今日全然、話もしてない」と、つぶやいた。

「いいじゃんか。ずっと桃子ちゃんによっかかって寝ただけでもそれだけ、桃子ちゃんに会えて、ほっとできたってことだろ？」

「え？」

「安心したから、寝たんじゃないのか？お前」

「うん、そうかも」

「じゃ、桃子ちゃん、玄関まで送っていくよ」

父さんはそう言って、車から先に降り、歩き出した。桃子ちゃん  
は、

「おやすみなさい」

と、俺にささやいた。

「おやすみ。桃子ちゃん。それと、ほんとよっかかってごめんね」

俺も小声で桃子ちゃんにそう言った。

「本当に大丈夫だよ。それに聖君の寝顔も寝息も可愛かったから、得した気分だし」

「え？何それ」

なんか照れくさいぞ。

俺が照れてると、桃子ちゃんがそつと俺のほっぺたにキスをした。わ！こういうことも、前はしなかったのに。俺はめっちゃ、嬉しくなった。

車から降りようとした桃子ちゃんを呼びとめ、

「口にもして」

と、言ってみた。してくれるかな。

桃子ちゃんは一気に真っ赤になったけど、父さんの方を見て、父さんがもう玄関の方に行ってるのを確認し、俺にそっとキスをしてくれた。

「サンキュー。桃子ちゃん。最高のバレンタインだったよ」

「お、おやすみなさい」

桃子ちゃんは真っ赤になりながら、そう言った。可愛いな。

桃子ちゃんは車から降りた。俺はその後姿を見ていた。門までは見えてたけど、そのあとは見えなくなった。

俺はシートにもたれかかった。

父さんが言ってたこと、本当だよな。俺、桃子ちゃんが横にいと、あんなに安心していられるんだ。

父さんが戻ってきた。車に乗り込むと、

「助手席に移るか？」

と聞いてきた。

「ううん、ここでいいや」

俺はそう言っ、外をぼろりと眺めた。父さんは車を発進させた。

「最近、寝れてなかったみたいだもんな。聖」

「え？」

「よく寝れてよかったな」

「ああ、うん」

もしかしてそれで、今日車で送るって言ったのかな、父さん。

父さんは音楽をかけた。静かなジャズの音楽だった。俺は外をずっと見ていた。

「あのさ」

「え？」

俺が話しかけると、父さんはちらりとバックミラーで俺を見た。

「母さんといると、父さん安心したりする？」

「するよ」

「母さんの方がいつも、父さんに頼ってるようにも見えるし、励ましてるのもいつも、父さんの方だってそう見えてたけど」

「え？そうなの？」

「うん。母さん、強そうに見えて、弱かったりするじゃん」

「ああ、まあね。そうだな。俺が励ましてる時もあれば、その逆もあれば、いろいろだよ」

「そっか」

「桃子ちゃんもきつと、お前といて安心できたり、元気になったりするんじゃないの？」

「そうかな」

「多分、お前以外の誰かによっかかれたりされるのは、桃子ちゃん嫌なんじゃない？」

「え？」

「お前だから、安心しきった顔でいたと思うけど」

「桃子ちゃんが？」

「うん。すごく優しい顔でいたよ、ずっと」

「……」

そうなんだ。

「道間違えて、遠回りしちゃったんだよ」

「え？また？父さんそんなに、方向音痴じゃないよね」

「ああ、なんでかな。桃子ちゃんの家に着くのが、遅くなっちゃうから桃子ちゃんに悪いことしたなって、謝っただけ、桃子ちゃんはその分、お前が寝てられるからって、優しい顔して言ったんだ」

「え？」

「自分のことより、お前のこと考えてるところが、すごいよね」  
「うん」

なんだか、恥ずかしくなって俺はまた外を見た。反対車線の車のライトが綺麗だった。

「早く免許取りたいな」  
ぼそってそう言つと、

「それで、桃子ちゃんとドライブに行きたいんだろ？」  
と父さんに聞かれた。図星。俺はそれには何も答えずに、外を見続  
けていた。

家に着き、机に向かうのはやめて、風呂に入って寝ることにした。  
もう、今さらだよな。ここらへんで、開き直ってもいいよな。  
なんでだかわからないけど、気持ちがすっきりとしていた。

そこへ、桃子ちゃんからメールが来た。

> 大好きだよ。聖君。

勉強の邪魔をするからって、遠慮してた。でも、ちゃんとこの想  
いは届けないと。

いつでも、そばにいる。いつでも、力になる。だから、いつでも  
呼んでね。私を。

俺は驚いた。桃子ちゃんがそんなふうに思ってくれていたことに。  
やべえ、すごい感動だ。嬉しくってしょうがない。

何度もそのメールを読み返した。

桃子ちゃん、本当に変わった。今、桃子ちゃんのあったかさや、優しさ、大きさ、強さ、そんなものをものすごく感じる。

俺、すごく桃子ちゃんに、大事に思われているんだ。桃子ちゃんの想いの大きさに感動していた。

>ありがとう。桃子ちゃん。

しばらくじゅんって、感動を味わって、なかなか返信ができなかったけど、どうにかそう送り返した。そしてしばらくしてから、またメールした。

>帰りの車で父さんに聞いたよ。父さん、道間違えて、遠回りしちゃったんだって？でも、桃子ちゃんが、その分聖がたくさん寝れるって、そんなこと言ってたよって。まじ、ありがとう。嬉しかった。それに、ほんとに桃子ちゃんの隣は、安心できるよ。

桃子ちゃんからの返信はなかった。俺はまた、

>でもさ、ほんとに桃子ちゃん疲れてない？俺、重かったでしょ？ってメールした。すると、

>大丈夫。ずっと嬉しかったし、幸せだったよ。っていう、メールが来た。

ああ！何それ！俺がよりかかって寝てるのが、嬉しくて幸せなの？俺、寝てたんだよ？よりかかってずっと、寝ちゃってたんだよ？く~~~~~~~~！嬉しすぎる！

俺はベッドに寝転んだまま、イルカのぬいぐるみを抱きしめ、じたばたした。すげえ、幸せ。めっちゃ幸せ。俺って、本当に幸せ者じゃん。

しばらくじたばたして、それからメールを返した。

> 桃子ちゃん、俺も超幸せ！（> <）

俺もね、桃子ちゃん。桃子ちゃんのことをずっと大事にしていこうよ。桃子ちゃんの隣が、俺の居場所で、桃子ちゃんが一緒にいないと、夢を叶える意味がないんだってことも、なんだか痛感しているんだ。

これから先もずっと、ずっと、そばにいて、桃子ちゃんの隣で俺は幸せを感じて生きていくんだって、妄想じゃない。確実にそうなるんだって、そう思ってる。

その日の夜は、本当に安心して熟睡した。そして夢を見た。桃子ちゃんはエプロン姿で、ご飯を作ってて、その横で、俺は小さな子を抱っこして、あやしていた。

俺らの子だ。

朝、目が覚めて、それは妄想なんかでも、単なる夢なんかでもなく、未来に起きることなんだって、はつきりとそう予感できた。

その日から、不思議と気持ちが落ち着いて、勉強もできたし、試験にも落ち着いて臨むことができた。

そして、合格発表がある前も、冷静でいられた。

合格発表の結果は、まっさきに桃子ちゃんに教えよう。受かってても、受からなくても。

そして、桃子ちゃんにすぐに会って、思い切り抱きしめよう。何度も、何度も。

ああ、本当に桃子ちゃん存在は、もう俺にはかけがえのないものになってる。ものすごくでかい、はかりしれないくらい、かけがえのない存在だよ。

今も、これからずっと、桃子ちゃんは大事な存在なんだ。

俺は、落ち着いた気持ちのまま、合格発表を見に行った。結果は、合格だ！

俺はすぐに桃子ちゃんにメールした。

さあ、4月から俺は、大学生だ。新しい生活が始まる。

夢だったダイビングのライセンスも取るし、免許も取るし、いろんなことがわくわくだ。そして、これからも、隣には桃子ちゃんがいるんだ。ずっと、ずっと。

く  
かけがえのない君だから おわ

り

## 第27話　ずっと隣で（後書き）

番外編を最後まで読んでいただき、ありがとうございました。  
ようやく終わりました。これから、永遠のラブストーリーの続き  
を書いていきますので、引き続き、そちらもよろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8165n/>

---

かけがえのない君だから（かけがえのない存在だから 番外編）

2011年5月29日02時25分発行